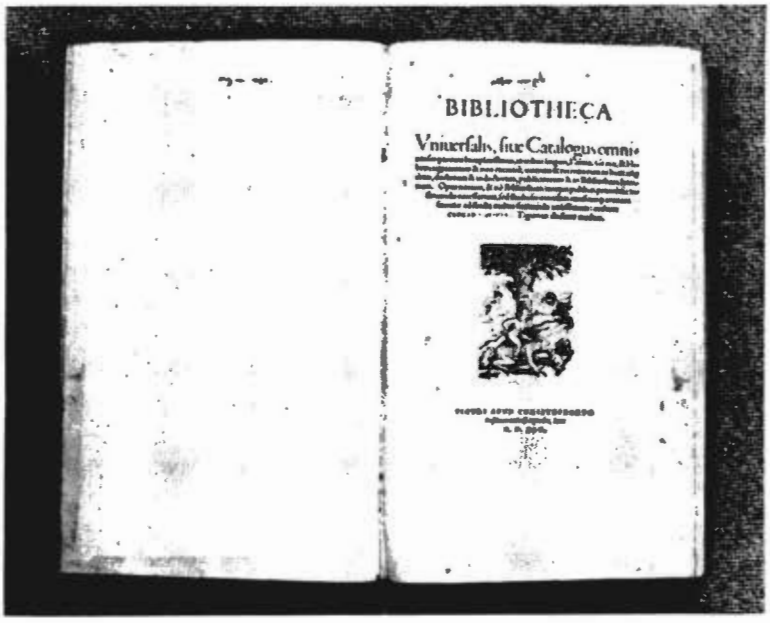
KULIC

19

1985. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

〔稀 覯 書 解 題〕



16世紀のユニバーサルビブリオグラフィ

GESNER, C. Bibliotheca Universalis, sive Catalogus omnium scriptorum locupletissimus, in tribus linguis, Latina, Graeca, & Hebraica : extantium & non extantium, veterum & recentiorum... Opus novum. Woodcut printer's device on title. Thick folio, cont. blind-stamped calf over heavy wooden boards. Zürich : C. Froschauer, 1545.

GESNER, C. — SIMLER, J. Epitome Bibliothecae Conradi Gesneri, conscripta primum a Conrado Lycosthene... denuo recognita. Zürich, Froschauer, 1555.

Conrad Gesner (1516—1563) は，一般にはスイスの博物学者として知られているが，図書館史では近世書誌編纂技法（システィマティッフビブリオグラフィ）の集大成をなした人物として著名である。1545年彼は Bibtiotheca Universalis を刊行した。この書誌編纂の意図を彼は書名の中に書き綴っている。

曰く，この書誌はギリシァ語・ラテン語・ヘブライ語で書かれたあらゆる書物を網羅し，この世にその存在が知れわたったものは，現存するとしないとにかかわらず，また学術書であると否とにかかわらず，さらに，図書館に所蔵されて一般に公開されているものもそうでないものもすべて収録している。その意味で，これは最も豊富な収録点数を誇るものであり，新しく図書館を作るときなどに有効であるばかりか，あらゆる分野での研究者にも有益である。それゆえ，Gesner はこの書誌の主書名を“世界の図書館”とした。書物を扱う者の雄大なロマンが読みとれる。

Bibliotheca のスタイルは，いわゆる伝記的書誌で，Pinakes 以降中世および近世初頭の典型的な様式を採った。しかし彼は新しい創意も試みている。索引などもその一つであるが，最も重要なことは，収録された書物の出典を示し，印刷本には出版事項や対象事項を含め，写本にはその所蔵館を記載していることである。彼は，これらのことをあらゆる方法で確認する努力をした。

Gesner は生存中数々の書誌を刊行した。Bibliotheca の補遺版 Epitome Bibliotheca も3版（死後第4版が刊行された）を重ねた。しかし，最も重要なものは，Bibliotheca の姉妹編ともいうべき Pandectarum sive Partitionum Universatium であろう。これは1548年に刊行されたが，Bibliotheca に収録されている約1万2千点の書物を21の主題に分類，編成したもので，各主題区分は，さらに細区分されている。そしてその巻末には，小項目主題のアルファベット順索引が付けられ，書物の主題からの検索の工夫が施されている。〔渋川雅俊〕

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 19

目　次

特集　慶應義塾日吉図書館の開館

1……慶應義塾日吉図書館特集の序に代えて　柳屋良博
2……新しい選書体制　天野善雄
6……利用サービスの概要と展望　小川治之
9……慶應義塾日吉図書館のイメージ　風間茂彦
14……新しいサービス——AVサービス　風間茂彦
16……教養課程日吉における利用者教育の模索　松浦恵子
20……研究者用フロア　五藤良子
23……日吉情報センターにおける目録サービスについて　武　正恒
27……日吉図書館への期待　村瀬　昇
28……新日吉図書館の印象　加藤弘和
29……館内ツアーに参加して　木村敏康
29……日吉新図書館を利用して　田辺真一郎
30……慶應義塾日吉図書館の印象と期待　高鳥正夫
32……日吉新図書館に関する書誌

34……看護学生と読書<ティールーム>　大橋由美子
35……医学情報センター所長就任にあたって<新所長の抱負>　横山哲郎
36……慶應義塾図書館遠山音楽文庫　中野博司
38……ミュージック・ライブラリアン<スタッフルーム>　平尾行蔵
39……三田情報センターにおける教員の選書行動　上田修一・会田真由美
43……新しい高等学校図書室（日吉）のサービス　斎藤憲一郎
46……福沢展と義塾図書館の資料　田中正之
48……三田の新館，この3年間の変化　中島紘一
51……第5回国際医学図書館会議の開催　大沢　充
52……統計資料の新しいメデイアについて　浜田裕一郎
54……頭痛の種“テクニカル・レポート”<スタッフルーム>　落合啓一
55……指定出版社制度による一括購入方法<KULICのノウハウ>　田中芙美子

資　料

63……研究・教育情報センターに関する書誌 1984—1985. 7
63……スタッフによる論文発表・研究発表　1984—1985. 7
66……年次統計要覧<昭和59年度>

70……編集後記　〈表紙〉孫福　弘　〈カット〉日下部寿子

KULIC第19号＊1985年11月25日発行＊編集人 渋川雅俊＊発行人 速水　融
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都港区三田2—15—45＊電話（453）4511（内線 2501）＊印刷所　梅沢印刷＊

特集　慶應義塾日吉図書館の開館

慶應義塾日吉図書館特集の序に代えて

柳　屋　良　博
（日吉情報センター副所長）

昭和33年８月に竣工した藤山記念日吉図書館と昭和39年９月から使用し，昭和47年４月の日吉情報センター発足時に17番教室をも改装した第四校舎Ｂ棟増築部分の大学日吉研究室地階書庫・日吉情報センター事務室（日吉研究室事務室並置）は，それぞれの使命を終えて，昭和60年４月９日の開館とともに慶應義塾日吉図書館に新しい活躍の場を変えた。新館建設にかかわる委員会は昭和55年６月に発足し，昭和58年９月に工事着工となったが，ＫＵＬＩＣ第17号（昭和58年11月発行）はこの建設計画を特集した。第19号では新館の新しい運営の現状と今後の課題のために特集ページを割いていただくことになった。

昭和60年１月30日の竣工披露に始まり，引っ越し準備・移転作業・開館準備に２か月を要して，３月27日の開館式，相次ぐ見学者の案内があり，６月15日の大学図書館界への披露で公式行事を終えた。５月末までは，８時45分～19時（土曜日16時）を暫定的な開館時間としたが，６月３日からは，授業期間中は21時（土曜日18時）休業期間中は18時（土曜日16時）を正規の閉館時刻としたので，職員退館時刻から閉館時刻までの夜間運営態勢を確保することがすべてに優先した。また入館者数，館外貸出数，複写サービス等について前年度同期との比較に一喜一憂し，７月中旬の期末試験には満席状態となったり，騒音問題が再現した。すべてが初めての経験であった。新館運営上の問題点を明確に把握し，早急には解決できないものは四季の移り変わりを見極めて，次年度までに軌道に乗せること，基礎固めが今年度当面の目標である。日吉キャンパスの顔であり，教育・研究のための補助機関として，今後の活性化いかんによって真価を問われるだけに，すべてが真剣とならざるをえない日々である。

現状の分析と将来の抱負は，各執筆者によって詳細に述べられるはずである。ここでは，施設上の制約によって不可避の課題である２点について触れるにとどめたい。第１は，日吉情報センター発足時にはかなえられなかった学習図書館機能と研究図書館機能の統一・吸収が施設面で実現したことである。しかも研究用図書の学生利用と非常勤講師への開放も認められた。４階の研究者用コレクションと３階以下の学生用コレクションの補完機能の在り様，４階資料の貸出・返却業務の機械化，皆無に等しかった研究者に対するレファレンス・サービスの展開と参考図書の収集等が課題として挙げられる。また依然として，自然科学部門（化学・物理学・生物学・数学・心理学），一部の人文科学部門（美術・音楽）及び教員室設置の研究室蔵書は，分散のままであり，これらに対するデリバリ・サービスと配置資料の管理も手に染めざるをえない責務である。

第２は，建築計画当初に論議されたことであるが，学習用コレクションの収容可能冊数の上限を20万冊としたことである。30余年の年間平均増加率が約８％に達するものであるだけに，新装藤山記念館地階書庫の使用許可に愁びを開いてはいるものの，90 cm の棚板延長につき25冊収容という文部省基準に照らすと，数年後に所蔵資料を再評価し，これを再編成する業務を確立しなければならない。これは，我が国の学習図書館として先べ

んをつけるものとなろう。自然科学部門の各教室及び理工学情報センターからも，書架緊迫のため藤山記念館地階書庫の利用要請が出されており，本塾としての保存書庫対策問題が不可避となったと考えられるのである。

新しい選書体制
—蔵書再編成の問題を中心にして—

天　野　善　雄
(医学情報センター総務担当課長
前日吉情報センター副所長付)

はじめに

日吉新図書館（以下新図書館と略す）の開館を期して，学生用図書の選書体制を確立すべく，副所長および副所長付（選書担当）が中心となって準備を進めてきた。その骨子は，新たに選書委員会を発足させ，資料の選定，寄贈受入，廃棄など，選書に関する一連の事項を処理していこうというものである。残念ながら現在までのところ全体として成案とはなっていない。しかしながら選書の中でも廃棄に関連する事項は，新図書館の場合，その収容能力に限りがあることと，廃棄の規模も大きくなることが予測されるため，できるだけ早くその実施方法を確立しておく必要がある。新図書館が開館と同時に負わされているこの問題について，以下に私見を述べることとする。

I　資料再評価，蔵書再編成の必要性

新図書館の学生用図書収容能力は20万冊を限度としている。総棚板延長が7,878.2m あるので，文部省が毎年発行している大学図書館実態調査結果報告書にある通り，90 cm 25冊という数値にあてはめると218,839冊となるので，実際には22万冊程度の収容能力は見込めるものと思われる。これに対して本年3月末現在の蔵書数が170,808冊となっている。1984年度の受入冊数が，除籍を別にして，13,551冊なので，今年度以降も同程度の受入冊数を見込むとすれば，あと2.2年で20万冊に達し，22万冊としても3.6年位しかもたないということがいえる。折角新図書館が建築されたとしても，これではたちまち次の図書館が必要になってしまう。そのようなことにならないように，1981年12月に開催された日吉図書館建設調査委員会において，新図書館の書庫スペースを，年間増加等も考慮した上で20万冊とするが，その一方で既蔵分を含めた基本図書コレクションの再編成を行っていくことが確認された。その結果の一つとして，新図書館には，選書室と並んで資料再編成室が作られることになった。しかしながら再評価の基準や再編成の目安といった具体的なものは現在までのところ何もできていない。収容能力が限界に達する前に手を打たなければならないので，この点については早急に固めておく必要がある。

II　資料再評価のポイント

私立大学図書館協会　東地区部会事務能率研究分科会では，昨年末に選書に関するアンケートを実施した。その中に，どのような場合に図書の廃棄を行うのかをたずねている設問があり，そのモデルが示してあった。そのうち日吉のケースに該当する項目をあげると，

1) 資料が重複していて利用頻度・資料価値が認められない図書
2) 頻繁な使用により利用価値・資料価値を失った図書
3) 著しい汚損，破損により修理，修繕が不可能，または修繕費が図書入手より高価になるもの
4) 図書の内容が，逐次または改版等によって改訂され利用価値を失った図書，但し史料的価値が認められるものはこの限りではない。
5) 一定期間内に多数の利用を計るために受入れた重複図書で，目的を果し，利用度が減り，保存を要する正本を除いた図書，などとなっている。

これらのモデルの中には，廃棄を理由づけるキ

ーワードがいくつかある。そのうち物理的な形態や明確な事実に基づいているものは特別な基準は必要としない。例えば，重複図書，改訂された図書（旧版図書）や汚損，破損図書などである。ところが同じキーワードでも，利用頻度・資料価値が認められない図書，利用価値・資料価値を失った図書，史料的価値が認められる図書などは絶対的な目安というものがないだけに，現実に廃棄／再評価しようとする場合には，詳細な目安を設けておく必要がある。これらのキーワードを要約すると，ｉ）利用頻度の低くなった図書，ii）資料的価値を失った図書，iii）史料的価値の認められない図書，などとなり，資料を再評価する場合に重大な影響をおよぼすポイントとなるであろう。

ところで，一般的に教養課程の学生用図書は，類書があって代替のきく図書が多い。日吉の場合でも，教科書や授業で指定された図書を除いては，学生がある特定の図書を求めてくるケースは少ない。また購入図書の平均単価（日販ウイークリー出版情報による購入分）をみても，昨年度約2,800円台と極く一般的な図書で占められている。即ちもともと日吉の学生用蔵書には資料的／史料的価値の高い図書はほとんどないといっても過言ではない。むしろ利用価値の決め手となる利用頻度の多寡が，日吉における資料再評価の際には最も有力なポイントと考えられるのではないか。

Ⅲ　学生の図書利用の実態

日吉では1982年度より，学生に対する貸出業務の機械化を開始した。これによって得られる利用記録をもとにして各種統計を打出すプログラムが開発されている。これらの統計を用いて，学生の図書利用の実態をかなり詳細に分析できるようになっている。資料の利用頻度を検証するために，これらの統計分析結果の一部を以下に示す。

資料の利用頻度という以上，厳密には一点一点の利用状況が把握されなければならないが，日吉における再評価作業は，対象図書が相当数にのぼることが予測され，タイトル毎に評価するのは作業上困難と思われるので，ここでは主題別（10区分），年代別（５年単位）でとらえることとした。

なお調査は1982年度から行われているが，毎年大体同じ傾向を示しているので，1984年度分のみを用いた。調査対象は，参考図書，雑誌を除いた和書だけである。

A．主題別貸出図書の利用頻度

表１は，貸出対象となった図書が１冊当り何回利用されているかを示すものである。自然科学，技術分野の回数が多く，総記，文学がそれぞれ1.6回と半分以下の数字となっている。貸出タイトル数，延貸出冊数の下の％は，全体との比率を表わしている。例えば社会科学で貸出された図書は全貸出タイトル数の28.1％を占めていたが，延貸出冊数でみると26.3％に落ち，逆に自然科学は貸出タイトル数では全体の17.9％にすぎなかったものが，１冊当りの利用頻度が高いために，延貸出冊数では26.8％を占めていることを示している。

B．主題別貸出図書の対蔵書比

表１　主題別貸出図書の利用頻度

NDC	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計／平均
貸出タイトル数	426	2,533	1,998	7,468	4,766	2,055	599	1,568	945	4,237	26,595
%	1.6	9.5	7.5	28.1	17.9	7.7	2.3	5.9	3.6	15.9	100
延貸出冊数	675	6,191	3,398	15,851	16,134	5,509	1,097	2,686	1,753	6,914	60,208
%	1.1	10.3	5.6	26.3	26.8	9.2	1.8	4.5	2.9	11.5	100
利用回数	1.6	2.4	1.7	2.1	3.4	2.7	1.8	1.7	1.9	1.6	2.3

表2　主題別貸出図書の対蔵書比

NDC	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計／平均
貸出タイトル数	426	2,533	1,998	7,468	4,766	2,055	599	1,568	945	4,237	26,595
蔵書数	4,376	11,566	14,958	33,792	13,856	5,899	3,242	8,881	4,587	30,100	131,257
%	9.7	21.9	13.4	22.1	34.4	34.8	18.5	17.7	20.6	14.1	20.3

表3　出版年別貸出図書

	1981～1985	1976～1980	1971～1975	1965～1970	1961～1965	1960～	合計
貸出タイトル数	13,001	9,512	1,470	1,335	730	415	26,463*
%	49.1	35.9	5.6	5.0	2.8	1.6	100
延貸出冊数	32,220	22,155	2,325	1,914	967	624	60,205
%	53.5	36.8	3.9	3.2	1.6	1.0	100

* 表1，2の合計と異なるのは，刊年不明図書が含まれていないためである。表4も同じ。

表4　出版年別貸出図書の対蔵書比

	1981～1985	1976～1980	1971～1975	1966～1970	1961～1965	1960～	合計／平均
貸出タイトル数	13,001	9,512	1,470	1,335	730	415	26,463
蔵書数	34,940	27,449	14,577	16,246	11,350	26,695	131,257
対蔵書比	37.2	34.7	10.1	8.2	6.4	1.6	20.2

表2は，貸出対象となった図書が，その主題の蔵書数に占める割合を示したものである。技術，自然科学，社会科学の順に蔵書数に対する利用率が高いことが分る。また全体の平均が20.3%ということは，全蔵書のうち約80%は年間に一度も貸出対象となっていないということを示している。

C．出版年別貸出図書

表3は，出版年別にみた貸出図書の割合を示したものである。貸出タイトル数でみると，過去10年分の利用が全体の85%を占め，過去20年分では95.6%となっている。また延貸出冊数でみると，過去10年分で90.3%，過去20年分では97.4%にも達していることが分る。

D．出版年別貸出図書の対蔵書比

表4は，出版年別貸出図書の蔵書に対する割合を示したものである。当然のことながら新しい出版年の図書がよく使われている反面，例えば1960年以前に出版された図書では，その年代の全蔵書数に対してわずか1.6%しか使われていないことが分る。また表3，4から，全蔵書数の約1/5が1960年以前の図書で占められていながら，その利用は全貸出図書の1.6%にしかみたないこと，同様に全蔵書数の約1/3が1965年以前のもので占められているにもかかわらず，その利用は全貸出図書の4.4%にすぎないなど，蔵書構成上極めて不経済な状態にあることをも示している。

Ⅳ　資料再評価，蔵書再編成の方法

既述した調査結果から以下の事実が判明した。

1）主題別による利用頻度の差異は認められるが，そのことによって利用頻度の低い主題の図書は除いてもよいというほどの結論づけはできない。むしろ日頃の選書業務の中で，利用頻度の高い分野では積極的に複本購入なども手がけ，低い分野では厳しく選定するなどの配慮をすべきであろう。

2）全蔵書のうち80％程度が年間を通じて一度も貸出対象となっていないという事実は，学習図書館として今後の選書を行う上で極めて示唆的な意味を含んでいる。しかも新図書館で今後資料再評価を行い，蔵書の再編成をするだけになおさらである。

3）出版年別で図書の利用傾向をみると，新旧によって顕著な利用の差が表われる。出版後20年以上経過した図書は，蔵書数が比較的多い割にほとんど利用されていないという極めて効率の悪い状態におかれている。

以上の点から，新図書館における資料再評価，蔵書再編成の方法としては，出版年の古い図書から順に処理していくことが最も現実的であると結論できる。即ち，資料を個別に再評価するというよりも，ある程度機械的に出版年単位で蔵書を再編成していくという方法である。

ところで実際にはどのように蔵書再編成の業務を実施することになるのだろうか。今のまま推移していくとすれば1987年度中には20万冊を突破してしまうことになるので，遅くも同年度中には実行に移す必要があると思われる。年間受入冊数が13,000冊で20万冊を上限とするということは，安定した段階では約15年分の蔵書を保有していくことになる。1987年度から蔵書再編成業務を開始した場合，安定段階（15年分保有）に到達するまでに以下のような実施計画が考えられる。

年　度		対象年	対象冊数
開始年度	1987年	1960年以前	26,694冊
第2年度	1988年		
第3年度	1989年	1961～1965年	11,350冊
第4年度	1990年	1966～1970年	16,246冊
第5年度	1991年	1971～1975年	14,577冊

この結果1991年度末の蔵書数は，13,000冊ずつ増加するとして約20万冊強となる。保有年数は1976年から1991年までの16年間である。従って翌年度に2年分を対象とすることによって15年分保有という状態になる勘定である。

V　問　題　点

現段階における問題点は以下の通りである。

1）調査時点と現在では配架方法が異なっている。

1984年度までは，藤山記念図書館の図書は出版年別配架となっていて，古い年代の図書は利用しにくい地下書庫に配架されていた。新図書館ではそれがないので，古い年代の図書が，これまでの調査結果よりも利用されている可能性がある。従って厳密には1985年度の調査結果をまたないと，正確な利用傾向は把握できないといえる。

2）貸出対象となった古い年代の図書を個別的に分析しておく必要がある。

例えば1984年度の調査では1960年以前の図書が415冊利用されている。現在の機械化システムによれば個別の書名も打出せるので，試みにこれらの図書を一点一点検討してみる必要があるのではないか。そのことによって，日吉には資料的／史料的価値のある図書が本当にないのかどうかを，より明確に判断することができよう。

また当然のことながら，実際に処理する段階でも，一度資料再編成室に図書を配架し，例えば選書委員が眼を通すことも必要と思われる。

3）具体的な要員が確保されていない。

新図書館では図書が年代別に配架されていないので，再編成作業を行うためには，全蔵書のシェルフリーディングもしくはインベントリーを行った上，1万冊以上の図書の移動（一般書架から資料再編成室書架）を行うことになる。また処理方法がどうであれ，テクニカルサービス課による記録の訂正が行われなければならない。しかも資料再編成室の書架収容能力は約3,000冊しかないので，これらの作業は年間を通じて小刻みに行わなければならない。処理方法が決定した後は，その方法に従って資料再編成室から資料を移動させなければならない。これら一連の作業に何名の要員が必要となるかは定かではないが，現有勢力だけではとてもこなせないと思われる。しかも一時的にアルバイトを動員して行うような作業ではなく

完全な日常業務となるであろう。これらの要員の手当てをする必要があると思われる。

4) 処理方法を明確にする必要がある。

新図書館の蔵書がその収容能力を越えた場合，古い年代の図書から順に処理するといっても，具体的には別置するのか，除籍して廃棄するのかといった問題は，関係者の間でも未だ詰めて話合われていない。

別置の可能性としては，旧藤山記念図書館地下書庫および新図書館地下予備書庫が考えられる。前者は67,000冊の収容能力があるが，既に自然科学系の教員から資料の収納を求められており，また理工学情報センターのバックナンバー収容の話もおきている。従って日吉の学生用として使用できるスペースはあまりないと思われる。後者は約56,000冊の収容能力があると思われるが，元来が研究室書庫の予備スペースという考え方に基づいているため，学生用図書の別置スペースとはみなしにくい点がある。また仮にこれらのスペースを使えたとしても有限スペースであるだけに，いずれ収容しきれなくなることは目に見えている。以上の点から別置という方法はあまり考えられないと思われる。従って処理するについては，除籍して廃棄するという方法をとることもやむを得ないのではないだろうか。しかしながら一口に廃棄するといっても，大学の財産を処分することになるのであるから，その実施については慎重の上にも慎重を期す必要がある。事前に塾内他機関へ連絡して利用可能な図書を抜き出してもらうようなことも必要であろうし，何よりも経理部，管財部等事務当局に，蔵書再編成をせざるを得なくなった日吉の事情を基本的に理解してもらう努力が必要である。

終　り　に

約15年経過した図書を毎年廃棄するということは，塾内はもとより他大学図書館でもあまり例のないことである。しかしながら，ほとんどの図書館で書庫スペースの不足に悩んでいる状況を考慮すれば，日吉の今回の措置は注目される考え方であろう。それだけに実施にあたっては問題点をよく整理し，不注意やミスのないよう充分に心がけ，図書館界の先駆けとなる必要があるのではないだろうか。

利用サービスの概要と展望

小　川　治　之
（日吉情報センター
パブリック・サービス課長）

はじめに

新図書館は，基本的には昭和33年に開館した藤山記念日吉図書館を継承したものである。旧図書館は，日吉キャンパスに学ぶ一般教育課程の学生を主な利用者とした，いわば学生用の図書館であったが，新図書館建設に当っては更に，長い間施設等の事情で十分なサービスが行われていなかった研究者に対する機能をも取り込み，文字通りキャンパスにおける情報センターとして，研究・教育の拠り所となるよう計画された。大学図書館の運営上，必ずしも利害の相い入れ難い両機能を1つの建物に収め，フロアで明確に分けた上で，蔵書・閲覧施設を中心に相互補完性を持たせたのが，この新図書館の大きな特色であり，又，提供される様々なサービス・ソフトの基本となっている。具体的にはメイン・フロアである1階は，学習図書館機能に重点をおいたメイン・カウンターを配置する一方，レファレンス・フロアとも言うべきもので，コレクションとサービスをレファレンス・デスクを中心に共有している。2～3階に旧藤山時代の資料を中心とした学生用の資料を，そして4階は第4校舎の地下書庫に置かれていた，語学部分を中心とした人文・社会科学系の研究用資料を配した研究者用フロアとし，専用のカウンターを設けている。

こうした新図書館運営に拘る基本方針が決定したことと，新館建設により可能となった新しいサ

ービス，又，物理的な管理スペースの拡大によって，サービス部門の全てを担当するパブリック・サービス課も，組織上の変更を含め，大きな変貌を遂げることとなった。

閲覧サービス

新図書館におけるサービスの最大のものは，開館時間の大幅な延長であろう。研究者用フロアを含め，これまでの午後6時（土曜2時30分）の閉館時間を9時（土曜6時）までと，一挙に3時間延長された。同時に開館時間も15分早め8時45分としたことにより，授業の開始前の利用も可能となった。4月9日の開館以来の入館者数は，7月末現在で315,013人，貸出冊数33,727冊と，前年度と比して入館数で50.8%増，貸出冊数で28.4%増と，予想した数字とは言え驚異的な伸びを示しているが，貸出冊数の約2割近くが新たに延長されたサービス・アワーに占められており，この効果の程が伺われる。

こうした利用の急増に対しては，昭和57年度以来導入されている貸出機械化システムが威力を発揮している。又，新図書館が駅に近く，キャンパス内とは言え，付近の住宅街への通路に面していることから，初めての入館チェックを機械化した。これまでになかったこうしたシステムの導入は，当初の機械の調整不備と相俟って，お世辞にも好評とは言い難いが，開館以来5ケ月を経た現在どうやら定着してきたようである。因みに入館用のＩＤカードは貸出システムに利用されているものだが，今秋稼動が予定されている三田情報センターの貸出システムにも共用できるよう，新たに作成されたものである。全塾の教職員，学生に配付できる体制ができ上った現在，単に三田・日吉の2センターの利用から，利用の目的に応じて塾内4センターの特色ある蔵書・サービスを利用するためのパスポートとしての役割りが期待される。既に他キャンパスからの利用者が急増している。

新図書館として学生用図書の収容能力は20万冊とされた。この数の妥当性については論があろうが，学生用としてはいたずらに数を誇らず，常に利用されるような資料を開架書架に展開することを基本としている。具体的な方策は今後の大きな課題として残されているが，現在の蔵書数約17万冊のうち，既に旧図書館時代に箱詰されていた約24,000冊の資料は，旧館内に確保された保存書庫に展開され，目録を利用しての要望が出た場合に，デリバリー・サービスの形で応じている。今後は一時的な資料は除籍するとしても，利用頻度は低くなったが，当分保存を要する資料の扱いは，この方法によることになろう。その他の大部分の資料は，旧来集密型書架に収められていた資料も最近の資料と混配され，閲覧施設に隣接させた開架書架に収容されている。この結果は，先の貸出統計に示されている通りである。

利用の増大の影には，職員による書架管理の努力を見逃すことはできない。これまでの経験から，複式書架のそれぞれの棚板との間の溝をなくし，はめ込み式のブック・エンドを使用するなど，ハード面での多少の工夫はしてあるものの，最大の効果は人力に頼らざるを得ない。アルバイトを含めた地味な努力が，大規模な開架書架を提供しているわけである。

一方，こうした物理的な蔵書管理とは別に，利用者の資料に対する要求を，日頃のサービスの中でこまめに吸い上げていくことも，生きたコレクションづくりを進めていく上で大変重要であり，サービス部門の大きな役割りとなる。これまでにも成されていたことではあるが，購入希望図書の受付け，貸出状況を見ながらの複本の購入等，今後は組織的に，且つビビッドな対応が必要である。この他にも，貸出機械化システムは本来の業務の簡略化に効果を上げる一方，蔵書構成を行っていく上で，様々な生のデータを提供してくれる。生きたコレクション論を持ち出せるのも，こうした裏付けがあってのことで，大いに駆使してゆきたいと考えている。

専っぱら学生を対象として提供されている2～

3階の資料とは別に，これらを支える専門的な資料としてこれまでは利用できなかった研究用資料のうち，4階に収められた資料が必要に応じて利用できるようになったことも画期的なことと言える。学生，研究者の双方が，それぞれの目的に応じた資料を補完しあう体制が，キャンパス内に初めてできたわけである。こうした補完の輪は，更に他の3センターに広がってゆくのである。

情報サービス

貸出等のサービスは，主として学習用，研究用と言った蔵書単位で窓口を2分しているのに対し，レファレンスを中心とした情報サービスは，一元化された資料を背景に，1階のレファレンス・デスクで学生・研究者の双方に対して行っている。これまでが館の性格から，学生に重点がおかれており，これとてもカウンターを貸出業務と共用していたことを考えると，独立した施設と専任の職員を得て，サービス体制の確立が最も強く望まれている。適切なレファレンス・コレクションと熟練した職員を必要とするこのサービスが一朝一夕に成し得るものではない。しかし，特にこれまでなおざりにされて来た研究者に対し，よりコレクションの整備，サービスの充実に努めており，その結果他のセンターの応援も得て開館以来日が浅いにも拘らず，急速にその存在が理解され始めている。今後は，研究者に対するサービスの前衛基地とも言える4階カウンターとの表裏一体のサービスが，日吉に於ける研究図書館機能をつくり上げてゆくことになる。

又，特に学生に対しては，彼等が初めて接する大学図書館であることを考えると，図書館に対する理解を深め，更には専門課程に進んで，より専門的な図書館利用ができるよう指導することが，学習図書館の大きな役割りと考えている。初年度としては，開館準備に追われ十分な計画はできなかったが，とりあえず4～5月にかけて施設案内に重点を置いたライブラリー・ツアーを30数回，又，夏のスクーリングの学生に対しては更にレファレンス・ツールの小展示や文献リストの配付も含めて催してみたが，こうした面における関心の深さを十分に感じることができた。今後は専門課程の他の3センターとの連携のもとに，ソフトの開発を含めた本格的なプログラムづくりを行うことにしている。

今後の課題

冒頭触れたように，日吉の新図書館計画は単に老旧化した施設を改めることに留まらず，これを機にこれまで立ち遅れていたキャンパスにおける図書館サービス機能を確立することにある。こうした観点から考えるならば，ようやくハードの面が一段落した，別の言い方をするならば，今後展開される諸サービスの寄り拠ができ上った段階であり，幸いこの点における評価は高いようで安堵している。一方，本格的なサービスは緒についたばかりであり，今後時間をかけて様々な新しい試みを企てていくことになる。当面の大きな課題としては，これらを実施した上での基盤とも言うべき，研究室資料の管理の一元化と言うことになろう。今回，語学部門の研究室を中心に資料の集中化を図り，その大部分が研究者用フロアの中核として管理・運用されるようになった。しかし研究室がキャンパスに点在している他部門の資料は，新図書館計画の対象外とされたため，管理の一元化のためにはサテライト論を含めた別な方法での対応が必要とされている。新図書館の目録ホールに，キャンパスで所蔵する全ての資料の目録が公開された結果，当然のことながら研究者の専門以外の，あるいは関連領域の資料に対する関心が高まってきている。こうした機運をより促進するためにも，これまで放置されてきた研究室資料室に対する整備を，研究室の理解と協力を得て進めてゆきたい。こうした一つ一つの積み重ねによって，日吉情報センターのサービス体制がつくり上げられてゆくことになる。

慶應義塾日吉図書館のイメージ
—利用者アンケートから—

風　間　茂　彦
(日吉情報センター
パブリック・サービス課係主任)

はじめに

当館では，オープン以来三ケ月たった去る7月15日，利用者が，この新しい館(やかた)と，それが提供するサービスに対し，どの様なイメージを持っているかを知る為に，アンケート調査を実施した。ここでは，その調査の結果を報告すると共に，若干の考察を加えてみたいと思う。

方　　法

今回のアンケートは，7月15日の入館者に対し，開館時より，1,000部の調査用紙を配布し，退館時に所定の箱に回収するという方法をとった。ただし，配布対象は学生に限った。用意した部数は，夕刻には配布を終了したが，回収された有効回答は499件であり，約半数という結果であった。当日は，学生にとっては，試験期間の真最中であり，そのことが，この回収率の低さに影響を与えていることは否めない。同時に，これは，様々な形で回答結果にも影響を与えていると考えられる。そこで，今回のアンケート調査から何かを読み取ろうとする時には，この様な条件下で行なわれたということを必らず考慮しなくてはならない。

質問および集計結果について

今回実施されたアンケートには，全部で43の質問があり，それらは，「あなた自身について」，「図書館の全体的印象について」，「施設について」，「運用について」，「目録について」，「コレクションについて」，「ガイド・利用案内について」の7つのカテゴリーに分けられ，設問されている。それぞれのカテゴリーには，利用者の意見を書きそえるオープンアンサーのスペースが用意されている。また，最後には，カテゴリーにとらわれず，図書館の利用上の問題点を指摘するスペースも用意されている。「あなた自身について」を除く図書館に関する質問のほとんどには，それぞれ，「**a．まったくその通り**」，「**b．まあその通り**」，「**c．どちらとも言えない**」，「**d．あまりそう思わない**」，「**e．まったくそう思わない**」の5通りの回答が用意されており，その中の最適なものが選ばれる。この報告では，誌面の都合上，質問用紙をそのまま掲載することはできなかったが，それぞれの質問と，それについての回答集計は，附録に示す。

重みづけによる比較

次に，回答の結果をより比較しやすくする為に，それぞれの質問項目の指数化を行なった。「a．まったくそう思う」から「e．まったくそう思わない」までの5項目の選択肢に，それぞれ，+2，+1，0，−1，−2の重み付けを施し，各質問ごとに加算し，指数とした。この数字が大きい程，良い評価が得られ，小さい程，低い評価が与えられたものと理解できる。ここで得られた各項目ごとの指数は，附録の質問末尾の括孤内に示した。さらに，各カテゴリーの指数合計を表1に示す。また，すべての質問項目のうちの，ベスト5及びワースト5を指数上で求めると，表2・3に示すとうりである。

表1　各カテゴリーごとの平均指数

図書館の全体的印象について	214
施設について	131
運用について	207
目録について	−44
コレクションについて	129
ガイド・利用案内について	196

考　　察

まず，今回の収計結果を各カテゴリーごとの指数（表1）でみると，今回のサンプリングに関する限り，統合的には，かなり良い評価が与えられているものと考えられよう。しかし，その中で，「目録について」の評価が極めて低いのが特徴的である。これを項目ごとにみると，「目録の利用の仕方がわからない」ことと，目録をひいても，「資料を入手することができない」ことに起因していることがわかる。これらは，目録自体の問題ではなく，それにともなう利用案内やガイドの問題であろう。一般的な「ガイド・利用案内について」では，良い評価が与えられていることを考えると，目録を用いての資料検索プロセスに対するガイドの必要性を指摘する声と考えられる。さらに，「目録について」の1)，2)で知ることができる，利用者の目録収録範囲の無理解（誤解）をも含めて考えると，この種の利用案内・ガイドの必要性を痛切に感じさせる。二番目に低い評価が与えられているのは，「コレクションについて」である。特に，雑誌を中心とするコレクションの貧弱さが指摘されている。この理由として考えられるのは，1）収書・整理の遅延（書店で見かけた本が図書館にない）2）図書館の選書方針と利用者の要求とのギャップ　3）選書・収書の漏れの3点である。これらについては，今後，調査・検討し，然るべき対策を講じる必要があろう。次に低い評価は，「施設について」にあらわれる。これは，新たに計画された新施設でのサービスであるだけに，かなりシリアスな問題のようにも思える。しかし，これには，結果を左右した，大きな要因があった。このカテゴリーの中には，あらゆる項目の中で最低の数字を示す「閲覧席が満員ですわれなかったことがある」という項目が含まれているのである。ただしこれは，先にも述べた試験期の特殊事情（1日に，6,000人程の入館者を記録する日が続いた）を考え合わせて判断しなくてはならないものである。

次に，「ベスト5」，「ワースト5」（表2，3）を見てみよう。ここでは，今まであげてきた項目以外には，入館者チェック装置の評判が良くないことがわかる。この装置は，あらかじめ配布してあるＩＤカードを，入館のたびごとに，入口ゲートの装置でチェックし，入館資格のない者の入館を事前にチェックするものである。しかし，ＩＤカードの出し入れの煩雑さや，装置の反応の遅さ（混雑時には，入館待ちの長い行列ができる）また，オープン当初の装置の読み取りトラブルの頻出が，この評価を生んだものと思われる。次に「ベスト5」を見ると，1）から3)，および5)は，いずれも施設に関する項目である。表1の平均指数では，常に満席であることと，入館チェック装置の不評の陰に隠されていた，施設面での居ごこちの良さに対する評価が，この様なかたちであらわれてきた。また，あまり評判の良くなかった，「コレクションについて」の中で，とりわけ，ＡＶコレクションだけが「ベスト5」に入っている。このことは，学生を中心とする利用者のＡＶ資料に対する興味と期待のあらわれであろう。

最後に用意されたオープン・アンサーの部分には，図書館に対しての様々な希望が書かれているが，ここでも，座席数の増加を望む声が多かった。それに次いで，静寂性を望む声も多かった。これもまた，試験期特有のことであろう。また，蔵書の充実をうらづける意見として，特に，専門書の充実を望む声が多かったことは，学習図書館としては，意外であった反面，当館の今後の蔵書構築を考える上で，良い指針となるであろう。

表2　ベスト5の項目

1. 清掃がゆきとどいている。
2. 明るく開放的な良い雰囲気を持っている。
3. 閲覧席の机や椅子は使いやすい。
4. 1F ＡＶコーナーのビデオやＣＤ等は特色ある良いコレクションなので，今後ますます充実してほしい。
5. 照明は適切である。

表3　ワースト5の項目

1. 閲覧席が満員ですわれないことがあった。
2. 入館者チェック装置がわずらわしい。
3. 3F の雑誌コレクションは読みたい雑誌が少ない。
4. 目録の利用の仕方が良くわからない。
5. この図書館には十分な蔵書がある*。

* この質問に対し，否定的な回答が多かったので，ワーストに入る。

さいごに

この様にして今回のアンケートの結果を，先にあげた特殊な条件をも考慮して考察してくると，目録のガイドの問題，およびコレクションに関する問題の2つが，今後の我々の課題となるように読みとれる。これらは，新しく展開され始めたばかりの様々なサービスの中では，とりわけ旧体制をそのまま引きついでいる部分である。施設が先行しておし進められた図書館計画の中で，残されてしまった部分とも言いかえられよう。そこで，我々は，今回のアンケートで指摘された部分を含め，このシステムの中で，まだ未成熟な部分を改善し，育て，よりよいサービスが提供できるよう努めねばならないと考える。

附録　アンケート集計結果

★あなた自身について

1. 所属学部
   a. 文学部 5.9%　b. 経済学部 18.5%　c. 法律学科 5.9%　d. 政治学科 8.4%　e. 商学部 16.9%　f. 医学部 1.4%
   g. 理工学部 42.6%　h. その他 0.4%
2. 学年
   a. 第1学年 54.2%　b. 第2学年 37.1%　c. 第3学年 4.7%　d. 第4学年 2.0%　e. 修士課程 1.4%　f. 博士課程 0.6%
   g. その他
3. 性別
   a. 男性 81.6%　b. 女性 18.4%
4. あなたがこの図書館を利用する主な目的はなんですか。
   a. 授業に関係した学習に必要な図書館の資料を利用するため　44.6%
   b. 授業とは直接関係ない個人的な調査や読書で，図書館の資料を利用するため　13.6%
   c. 図書館の資料は利用せず，自習室として利用するため　38.3%
   d. 図書館の資料以外の物を複写するため　0.2%
   e. 友人との待合せや，会話の場として　1.4%
   f. その他　1.8%

★図書館の全体的印象について

1. この図書館は明るく開放的な良い雰囲気を持っている。(611)
   a. 39.5%　b. 50.9%　c. 5.1%　d. 4.1%　e. 0.4%
2. この図書館の蔵書は利用しやすい。(155)
   a. 10.7%　b. 37.4%　c. 29.4%　d. 17.9%　e. 4.5%
3. この図書館には，十分な蔵書がある。(−102)
   a. 5.8%　b. 24.6%　c. 25.2%　d. 31.6%　e. 12.8%
4. この図書館のカウンターのサービスには満足している。(193)
   a. 11.2%　b. 38.0%　c. 35.7%　d. 10.0%　e. 5.2%

★施設について

1. 閲覧席の机や椅子は使いやすい。(577)
   a. 33.5%　b. 55.3%　c. 7.8%　d. 2.9%　e. 0.4%
2. 閲覧席が満員ですわれなかったことがある。(−607)
   a. 56.8%　b. 25.3%　c. 6.6%　d. 8.6%　e. 2.7%
3. 資料はわかりやすく配置されている。(104)
   a. 5.2%　b. 37.2%　c. 36.4%　d. 16.5%　e. 4.8%
4. 書架の間隔は資料を探すのに十分である。(318)
   a. 13.7%　b. 52.9%　c. 21.2%　d. 10.2%　e. 2.1%
5. 照明は適切である。(493)
   a. 25.8%　b. 57.9%　c. 9.3%　d. 6.2%　e. 0.8%
6. 空調は適切である。(293)
   a. 18.3%　b. 47.1%　c. 16.0%　d. 13.6%　e. 4.9%
7. エレベーターはあまり待つことなく利用できる。(55)
   a. 7.7%　b. 34.0%　c. 27.2%　d. 24.3%　e. 6.8%
8. グループ学習室は皆んなで利用するのに便利である。(357)
   a. 26.1%　b. 38.4%　c. 21.9%　d. 11.1%　e. 2.5%
9. 喫煙の為のラウンジが設けられていてありがたい。(7)
   a. 17.3%　b. 14.6%　c. 38.0%　d. 12.7%　e. 17.5%
10. コピー機はあまり待つことなく利用できる。(−75)
   a. 3.8%　b. 18.9%　c. 45.9%　d. 20.4%　e. 10.9%
11. 入館者チェック装置はわずらわしい。(−495)
   a. 47.4%　b. 26.0%　c. 10.7%　d. 13.0%　e. 2.9%
12. 出口のチェック装置はわずらわしい。(143)
   a. 14.9%　b. 14.9%　c. 15.7%　d. 34.6%　e. 19.9%
13. 全体的に騒々しく落ちついて勉強できない。(33)
   a. 7.9%　b. 19.8%　c. 35.7%　d. 30.8%　e. 5.8%
14. 清掃がゆきとどいて気持がよい。(630)
   a. 44.6%　b. 46.5%　c. 5.2%　d. 1.9%　e. 1.9%

★運用について

1. 一般的に利用手続きや利用制限が多く不便である。(122)
   a. 5.1%　b. 15.6%　c. 34.9%　d. 37.5%　e. 6.9%
2. 2週間という貸出期間は妥当である。(314)
   a. 10.7%　b. 59.5%　c. 18.1%　d. 8.6%　e. 3.2%
3. 一度に3冊という貸出冊数は妥当である。(250)
   a. 10.1%　b. 54.2%　c. 19.3%　d. 10.9%　e. 5.5%
4. 開館時間／閉館時間は妥当である。(319)
   a. 22.3%　b. 48.4%　c. 9.3%　d. 14.1%　e. 5.9%
5. 4Fの研究室図書の利用が館内閲覧だけであるので，不便を感じたことがある。(30)
   a. 9.9%　b. 9.7%　c. 53.5%　d. 17.6%　e. 9.3%

★目録について

1. 和書カード目録には，1980年度までの受入図書しか載っていないことを知っていますか。
   a．知っている　18.9%　　b．知らない　81.1%
2. 1981年度以降受入れた和書は，冊子体目録にしか載っていないことを知っていますか。
   a．知っている　16.8%　　b．知らない　83.2%
3. 目録の利用の仕方が良くわからないので，もっと説明がほしい。(−231)
   a．21.2%　b．34.4%　c．20.0%　d．21.0%　e．3.4%
4. 利用したい資料は目録を引けばすぐ利用することができるので便利である。(124)
   a．6.2%　b．33.4%　c．44.3%　d．13.0%　e．3.2%
5. 目録を引くことはできるが，図書，資料の配架場所が複雑で利用したい資料を入手することができない。(−24)
   a．8.2%　b．22.5%　c．40.4%　d．24.2%　e．4.8%

★コレクションについて

1. 使いたい図書が貸出になっていることが良くある。(133)
   a．13.6%　b．26.6%　c．37.2%　d．19.6%　e．3.0%
2. 1Fレファレンスコーナーの参考図書類は豊富にそろっている。(−12)
   a．3.4%　b．21.5%　c．49.8%　d．19.7%　e．5.6%
3. 2Fバルコニーコレクションは特色ある良いコレクションなので，今後ますます充実してほしい。(306)
   a．21.1%　b．34.3%　c．36.1%　d．7.0%　e．1.5%
4. 1F特別図書コーナーの豪華本は特色ある良いコレクションなので，今後ますます充実してほしい。(295)
   a．20.7%　b．33.0%　c．37.4%　d．6.9%　e．1.9%
5. 1F　AVコーナーのビデオやCD等は特色ある良いコレクションなので，今後ますます充実してほしい。(573)
   a．50.0%　b．25.6%　c．17.2%　d．4.3%　e．2.8%
6. 3Fの雑誌コレクションは読みたい雑誌が少ない。(−287)
   a．25.6%　b．25.9%　c．34.7%　d．12.3%　e．1.5%
7. 単行書（一般図書）は豊富にそろっている。(−69)
   a．3.5%　b．24.3%　c．36.3%　d．25.4%　e．10.4%

★ガイド・利用案内について

1. 「利用ガイド」は図書館の利用の手びきとなって便利である。(245)
   a．10.5%　b．47.5%　c．28.7%　d．11.8%　e．1.5%
2. 館内の施設案内や手続きを示すガイドは，はっきりとしていてわかりやすい。(138)
   a．7.0%　b．39.7%　c．33.4%　d．16.2%　e．3.7%
3. レファレンス・カウンターの係員の利用案内や指導はとても手助けとなる。(281)
   a．8.8%　b．31.9%　c．44.2%　d．10.3%　e．4.8%
4. 受付やメインカウンターの係員の対応は親切である。(119)
   a．9.0%　b．36.7%　c．34.3%　d．11.6%　e．8.5%

新しいサービス：AV サービス

風　間　茂　彦
（日吉情報センター
パブリック・サービス課係主任）

1. はじめに

慶應義塾日吉図書館には，ニュー・メディアに対応する設備として，AVホールとAVコーナーがある。AVとは，Audio-Visual，すなわち視聴覚の意である。これらは，大学の研究・教育を支える資料形態面での多様化に応える施設として，図書館計画の中に当初より盛りこまれ，開館と同時に，従来の藤山図書館時代にはなかった，まったく新しいサービスとして登場したものである。近年，ビデオをはじめとした視聴覚メディアの大学教育における重要性は増大し，その利用範囲も，語学教育や音楽教育にとどまらず，様々な分野に広がりつつある。また，一般的にも，映像情報の占める情報全体の中での地位は，どんどん向上しつつあるように思える。この新しいサービスであるAVホール及びAVコーナーは，この様な状況に鑑み，利用者の多岐にわたる情報要求に応じる為に計画された。同時に，学習図書館としての性格上，図書館におけるメディアとしての視聴覚資料の位置づけを，教養課程の学生諸君に再認識してもらい，情報化社会における「図書館」のイメージを一つのサンプルとして提供するという重要な意味を合わせ持っているのである。

2. AV コーナー

a 概　　要

AVコーナーは，図書館1F のメイン・カウンターの隣り，北側吹抜け階段をはさんで，新聞コーナーと対称して位置している。ここでは，備付けのビデオ・ソフト，コンパクト・ディスク，カセット・テープを，個人的に利用することができる。座席は，個人用ブース16席，グループ用の4人掛けソファー2席を備え，24人を収容できる。利用者は，メディア別のカタログから，利用したい資料を選び，カウンターに請求，カウンターでは，資料とヘッド・フォーンを学生証と引き換えに手渡し，指定したブースで，セルフ・サービスで利用させるという，極めてオープンなシステムである。

b 備付け機器

このコーナーは，現在一般的に市場に出ているほとんどのAVメディアに対応するようになっている。しかし，当館の収集方針と関連して，VHSビデオ・テープ，コンパクト・ディスク，カセット・テープの利用を中心に考えられている。その他のメディア，すなわち，ベータビデオ・テープ，Uマチックビデオ・テープ，レーザー・ディスク，VH・ディスクについては，あくまでも現時点では，補助的資料と考え，カウンターから，それぞれ一系統のみをソファー2席（8人掛相当）に送り出しできるように設計されている。また，当館では，ビデオ・メディアは，VHS方式で，音楽情報は，可能な限りコンパクト・ディスクで収集するようにしている為，これらの補助的資料の利用は，現在のところ，極めて稀である。しかし，特にこれらビデオ・メディアに関しては，多種のソフトをめぐる状況が，規格的にも，内容的にも不安定であるのが現状のようである。そこで，多種多様な情報要求に対応できる，幅広いサービスの展開を前提とすると，既定の収集方針を遵守しきれなくなるケースがあり得るのである。その様なメディアをとりまく実情を考えると，これらの補助的機器の付設は，それなりの意味を持つと考えることができる。

表1　備付け機器の種類と台数

ブース備付け		カウンター送り出し	
VTR（VHS）	12台	VTR（ベータ）	1台
CDプレーヤー	4台	VTR（Uマチック）	1台
カセットデッキ	6台	LDプレーヤー	1台
		VHDプレーヤー	1台

c　備付け資料

日吉情報センターの学習用コレクションの中には，藤山図書館時代より，若干のＡＶ資料が散見された。それらは，語学資料が中心であり，どちらかというと，テクストに付随したカセット・テープといった感じのものがほとんどであった。その意味では，従来は，量的にも質的にも，ＡＶ資料の積極的収集を行なっていたとは言い難い。また，その利用方法にしても，利用の為の装置を欠いていたので，一般図書と同様に，館外貸出しを行なっていた。しかし，これとても，しかるべきサービス・ポリシーにのっとったやり方と言うよりも，図書での方法を単に踏襲したにすぎなかった。新しい図書館でのサービスの開始をきっかけとして，その貸出方式は，すでに述べた様な個人ブースを利用した，セルフ・サービスの館内貸出方式に変わった。同時に，収集するＡＶ資料も，従来の語学学習用教材およびカセット・テープを土台として，質・量ともに，大きく変化した。そんな例としてあげられるのが，カセット・テープ以外のメディアの収集である。音楽資料として，話題のコンパクト・ディスクやレーザー・ディスクが収集された。同時に，旅行ガイド，スポーツのハウ・トゥー，美術，語学，ニュース・ソース，ＢＢＣのオープン・ユニバーシティ教材等を中心とした娯楽，教養関係資料として，ＶＨＳビデオ・テープが収集された。また，語学学習用として，各種のリンガフォンテープを購入し，既存の語学テープコレクションを，より充実させた。この様なメディアの多様化は，それらの内容面での多様化という結果をももたらした。そして，その収集内容の幅は，語学から，音楽，教養，娯楽と，より豊かに広がりつつあり，今後の可能性をも約束している。

表２　AV ブースの備付け資料数

メディア名	タイトル数	枚数
コンパクト・ディスク	161	191
カセット・テープ	54	257
ビデオ・テープ（ＶＨＳ）	39	75
レーザー・ディスク	4	7

（1985年６月１日現在）

3.　AV ホール

ＡＶホールは，図書館の B1 にある。ＡＶコーナーが，個人的な利用を目的としていた一方，こちらは，集団的な利用を主眼としている。ここは，様々なＡＶメディアを利用して，授業や発表を行なうのに適したスペースである。簡易な小机を収納した72の固定席があり，補助席を含むと，90人が収容できる。各席には，音声副チャンネルのアウト・レットが用意されているので，ビデオのバイリンガル音声や，講演や発表の際の同時通訳に利用することができる。ここで使用できる機器は，下記の通りであるが，これらは，16mm 映写機，スライド・プロジェクターを除いて，ホール正面の演台に組み込まれているので，すべて，ホール前方で操作することができる。16mm およびスライドも，後方のモニター・ルーム内の映写機やプロジェクターにあらかじめセットしておくことにより，前方操作が可能である。スクリーンの出し入れや，照明をも含めて，すべてが講演者の手許でコントロールでき，ＡＶメディアを自由自在に駆使しながら講演や発表をすることができるのが，このシステムの特色である。

表３　AV ホールの備付け機器

ビジュアル・メディア	オーディオ・メディア
ビデオ（ＶＨＳ）	ＣＤプレーヤー
ビデオ（ベータ）	カセット・デッキ
ビデオ（Ｕマチック）	レコード・プレーヤー
書画カメラ	ＦＭチューナー
ＯＨＰ	
16mm 映写器	
スライド・プロジェクター（２台）	

4.　利用の実態および今後のビジョン

図書館オープン以来，３ケ月が経過し，現在の

ところ，この「新しいサービス」は，概ね歓迎されていると考えることができよう。特に，ＡＶコーナーは，開館当初，ものめずらしさも手伝って，毎日100件以上もの利用が殺到し，メイン・カウンターと兼務の係員は，その対応に嬉しい悲鳴をあげたものだった。また，２台用意されたコンパクト・ディスクプレーヤーには，順番待ちの列が出来，あまりの利用の多さに，２台の追加購入を余儀なくされたというエピソードもあった。しかし，現在，その利用は，毎日50～60件に落ちつき，常時，座席の30～40％が占められているといった状況となった。このＡＶコーナーに対しての利用者の評価は，当館が実施したアンケート調査の結果にうかがうことができ，「ＡＶコーナーのビデオやＣＤ等は特色あるコレクションなので，今後ますます充実してほしい」という設問に，75％が肯定的な回答を寄せている。さて，この様なＡＶコーナーであるが，開館以来の利用者の減少は，見方によれば，「落ちついた」とも考えられるが，文字通り，「減少」と考えることもできる。むしろ担当者としては，後者と理解し，謙虚に利用者の動向から学ぶ必要があるように思える。先にあげた数字からもわかる様に，このコーナーの備付け資料は，現在のところ，残念ながら，決して多いとは言えない。このことは，慶應塾生新聞の行なったアンケート調査でも「ソフト数不足」として指摘されている。特に，最も力を入れるべきビデオ・メディアにその傾向が著るしい。ビデオ用ブース12席に対し，39タイトルでは，いかにも少な過ぎる。今後の課題は，とりあえず，収集の分野は現在のままとし，その中で，バラエティに富んだタイトルを収集してゆくことであろう。

一方，ＡＶホールは，現在，その利用を備付け機器を用いての授業や，教職員の主催する研究発表に限っているので，それ程の稼動率を示しているとは言えない。（とは言え，利用した教員の方々からは，高い評価を得ている。）この制限は，このホールが，単なる貸教室となり，ＡＶメディアを用いての本来の利用の妨げとなることを懸念してのことであった。しかし，今後は，利用の実態を良く把握し，施設の有効利用にむけて，より適切な運営方針を模索してゆかねばならないであろう。

表４　AV ブースの利用件数

４月の利用件数	1,501 件
５月　〃	1,406 件
６月　〃	1,181 件
７月　〃	1,197 件

（1985年）

教養課程日吉における利用者教育の模索

松　浦　恵　子
（日吉情報センター
パブリック・サービス課）

はじめに

日吉キャンパスは，言うまでもなく教養課程を学ぶ全学部の塾生が集う唯一のキャンパスである。彼らを利用対象者とする日吉図書館は，塾生にとっては初めて接する大学図書館であり，今まで利用してきたであろう学校図書館や公共図書館とはかなり性質の違う図書館である。よって，日吉図書館は，塾生にとっては大学図書館入門編と言えるのである。パブリック・サービスに携わっていて常々感じていた事は，ほとんどの学生が図書館の基礎的な利用の仕方を知らずに損をしているという事であった。例えば，本を探す時に目録を使うということを知らないのはもちろんのこと，カウンターの横にある小さな箱のかたまりは何なのか，本の背に付いているラベルが何の為のものなのか，棚に本が左から並んでいるというような図書館的常識について知らない学生が多いのである。これは，学生が悪いのではなく図書館の使い方を教える機会が用意されていないという状

況に問題が有り，直接利用者と接する立場上，利用者教育の必要性を痛感していた。しかし，旧図書館である藤山記念図書館においては，様々な物理的，人員的制約に囲まれ，よりよいサービスを意識しつつも我々スタッフは，かなりの限界を感じざるを得なかった。幸いにも，創立125年記念事業の一環として，日吉に新図書館が設立され物理的な面が，かなり改善された。現在日吉図書館は，新しい建物とともに新しい時代を迎えて活気付いている。その新図書館までの準備と，これからの課題を利用者教育について述べていきたいと思う。

旧図書館時代から新図書館にむけて

旧図書館は，物理的な問題を多く抱えた図書館ではあったが，年々学生の利用はかなりの割合で増加する傾向にあり，学生生活における図書館の必要性が高まってきている事を示しているようであった。その様な利用状況を見ると，ハード面の充実はもちろん，サービスの充実—特に利用者に対する利用指導の実現は急を要するのであった。旧図書館では，閲覧業務が機械化されていたとは言えパブリック・サービス課スタッフは，大半の時間を書庫管理等にとられ，利用者を指導する等という能動的なサービスを行う余裕は全く持っていなかった。その様な余裕のないカウンターには，質問に来る学生もまばらで遠慮がちであった。

そこで，新図書館において利用者教育を実現させる為に，我々の体制を整えなければいけなかった。まずは，新図書館において情報サービスや利用者教育を重点的に行える様に，貸出カウンターとは別個のカウンター（レファレンス・デスク）を設けられるように努めたのである。次にやらなければいけなかったのは，利用者教育を具体的に考えていけるだけの基礎知識を学ぶことであった。利用者教育を先行して行っていた他センターのレファレンス担当者の間でも，利用者教育についての基礎知識を学びその学術的裏付けを得ようという動きがあり，その研究会が開かれることになったのである。その会で教材とした文献は，Rice の "Teaching Library Use"[1] で，その他数々の論文を毎月1回1年にわたり講読した。研究会で得た利用者教育についての知識は数多く，他センター担当者との意識レベルの統一を図ることも出来，大変有意義な研究会であった。

利用者教育の基本的な考え方について，前述した Rice が示している3つのレベルは，非常に明確で参考になった。その3つのレベルとは，第1レベル—Library Orientation，第2レベル—Library Instruction，第3レベル—Bibliographic Instruction（それぞれの内容は2）を参照）である。この考え方に基づきながら，新図書館での利用者教育の足がかりを得るために，旧館で何か試みてみようとしたのであった。まずは，第1レベルの Library Orientation として何か出来ないかを考えた。旧館における人員的制約を考慮すると，唯一実現可能な手段が，スタッフに頼らない Self-guide Tour であった。Self-guide Tour の一般的なものは，施設案内の説明をカセット・テープで聞きながら館内地図のポイントに従って館内を一巡りするのである。実際，カセット・テープの準備等は容易ではないので，現代の若者感覚にマッチしたイラスト図書館マップというものを作ってみることにしたのである。その図書館マップは，学生時代に漫画研究会に在籍し，趣味は絵画というスタッフの協力を得て完成した。A4サイズで，手書きの白黒印刷物であった。情報を盛り込み過ぎている，字が細かい等の他センタースタッフによる批判もあったが，だいたいは好評で日吉らしい，おもしろいという感想を頂いた。学生達にも好評で，かなりの勢いで用意した印刷物がなくなった。配布前に比べて，施設面の質問は減り，旧館特有の分りにくい地下書庫の存在を知らしめるのに有効であった。図書館マップ片手に，メインフロアーから地下書庫を歩いている学生の姿をしばしば見ることが出来た。このイラスト図書館マップが，日吉における利用者教育の第

一歩と言えるだろうし，新図書館の「利用案内」の基礎となったのである。

新図書館において配布する「利用案内」をどういうものにするかという事が論じられたのは，ちょうどその頃からであった。基本案は，パブリック・サービス課の全スタッフで作ることになった。方針としては，文章を出来るだけ減らし館内地図を中心として，施設や資料の配置，サービスの紹介，資料の探し方等を簡潔に視覚に訴えるものであり，Self-guide Tour の一助となり得るものにしたいということであった。基本案作りは，意見がまとまるまでにかなりの時間がかかり，一時暗礁に乗りあげた時もあったが，パブリック・サービス課のスタッフ全員が，利用学生の実態を考慮し，サービスを提供する側の立場にも立ち，頭を悩ませてまとめ上げた。その基本案の最終的な編集やデザイン等は，専門の方（エディトリアル・デザイナー木村久美子氏）に依頼し，現在の「利用案内」が出来上ったのである。

この様にして，新図書館における利用者教育の実現の為に少しづつではあるが準備していたものの，実際は日々のルーティンワークに加えて移動計画や作業に追われ，具体的な利用者教育プログラムを考えるところまでには至らず，開館をむかえたのである。

新図書館における利用者教育の実際

新図書館においては，要請が通りレファレンス専用のデスクが設けられ，人員的にも専任者２名がレファレンス業務に携わることが出来るようになった。おかげで，開館当日から，ある教員のリクエストに応えたのをきっかけに，４月から５月に渡ってライブラリーツアーを行なうことが出来たのであった。充分な準備なしに始めたという不安はあったものの，毎回多数の学生の参加を得ることが出来た。もの珍しさということもあったであろうが，学生の関心の高さに驚くとともに，積極的なサービスを行なえば必ず学生は集まるし，それだけに利用者教育をやらなければいけないという責任を実感させられた。

今回のツアーは，Rice の言う利用者教育の第１レベル—Library Orientation として行なった。その目的としては，第１に新図書館の新しい施設やサービスに早く慣れてもらうことで，第２に図書館的常識を身につけて，必要な資料や情報の探し方の概要をつかんでもらうことであった。実施した人数は，延べ44グループ約440名であった。広報には，館内掲示と10分前の館内放送を使った。説明の中心は，１階メインフロアーであったが，３階までの各フロアーを40分のコースでレファレンス担当者が説明して歩いた。

５月に入って，ライブラリーツアーに関しての簡単なアンケートを実施した。サンプル数は少いが，その結果[3]を見ると，学生達の意向がかなりつかめるようである。ツアーを知ったきっかけとしては，「放送」が多く効果が大きかった様であるが，常にＰＲ出来る掲示の効果も見逃せない。何よりツアー参加を勧める友達が結構居たということは，我々にとっては喜ばしいことである。資料の探し方や配置は，解答者の$^{3}/_{4}$が大体分ったとしているが，40分程度のツアーでは目録の細かい使い方や注意点，何階にどんな本が有るか把握出来なくて当然である。事実，設問３では，もっと詳しく資料の探し方を説明して欲しいという要望も強いし，設問５のように，実際の資料の探し方には不安を感じる人の数が多くなっている。さらに，設問10では，今後行なう資料の探し方等の説明会には，ほとんどの人が参加すると答えていることは，注目しなければいけないと思う。Self-guide 的要素を強く持たせたつもりの「利用案内」については，ほとんどが「わかりやすい」としているが，それだけでは限界があることを設問８は示している。

以上のことから判断すると，利用者教育の第１レベル—Library Orientation としてのライブラリーツアーは，その目的を達していると言えるものの，それだけにとどまっていては不十分な部分が多いようだ。やはり，資料や情報の探し方等を

何らかの方法で教える利用者教育の第2，第3レベルの実施があってこそ，図書館の有効な利用の仕方が理解されるのであるし，学生達もそれらを希望していると言えるのである。

そこで，次に試みたことは，夏期スクーリング期間中のスクーリング生に対しての利用者教育であった。第1レベルとともに，第2レベル的な部分をとり入れて実施した。Orientation として，ライブラリーツアーを行い，それを補う為に，レファレンスコーナーの一角に小展示コーナーを設け，図書館の使い方や論文の書き方に関する本と各主題の基本的参考図書を抜き出し，ゆっくり手にとって見てもらうよう配慮した。さらに，配布資料として，目録の使い方，地方在住者の図書館利用，各主題別の解題付き参考図書リストを用意した。展示や配布資料の効果は具体的には分らないが，それらを基にした説明会が設けられればよりよい効果があったのではないかと思う。しかし，配布資料は予想以上の数がなくなり，毎日補充に忙しい程だった。図書館が用意する資料に対する学生の関心の高さを教えられた。

今回の4，5月のライブラリーツアーと，スクーリング生対象の利用者教育は，準備不足の面は多々あったが，実際に行なってみることによって様々な事が分り，今後の利用者教育を充実していくための重要な足がかりとなったと思うのである。

今後の課題

日吉においての利用者教育は，始めたばかりで，試行錯誤の段階ではあるが，この様な積み重ねをもとに，学生達に効率よく，しかも興味を持って有効な図書館利用法を学んでもらえるように，新しいメディアも活用して工夫していきたい。そして，それらを学んだ学生は，さらに他キャンパスでより専門的な利用者教育が学べるようになるのが理想的なパターンなのである。教養課程における利用者教育の第1レベルから第3レベルを，どの様な方法を使ってプログラムしていくかが今後の課題であり，閲覧係や整理課の協力を得ながらその課題に向けて努力していきたいと思う。

<注>

1) Rice, James.
Teaching library use: guide for library instruction. Westport, Conn., Greenwood Press, 1981.

2) ライブラリーツアーに関してのアンケート
——集計結果——　サンプル数：43

1. あなたは，このツアーを何で知りましたか
   a．放送で 27　b．掲示で 9
   c．友達に勧められて 11
2. ツアーに参加して，今後図書館が
   a．使い易くなる 39　b．変らない 1
   c．わからない 3
3. 資料の探し方の説明は
   a．十分である 36
   b．もっと詳しい方がいい 6
4. 資料の配置が
   a．よく分った 33　b．まだ分らない 9
5. 資料の探し方，借り方に不安を
   a．感じる 12　b．感じない 31
6. ツアーの時間は
   a．丁度よい 33　b．長すぎる 6
   c．短い 4
7. 「利用案内」は
   a．分りやすい 39　b分りにくい 4
8. ツアーに参加しなくても「利用案内」で十分であった
   a．そう思う 6　b．そうは思わない 37
9. これから職員に質問が
   a．しやす 36　b．いしにくい 1
   c．変らない 6
10. 今後もっと詳細な資料の探し方の説明会があったら
   a．参加する 38　b．参加しない 5

3)・*The First of Three Levels—Library Orientation*

1. To introduce users to the physical facilities of the building itself.
2. To introduce the departments or service

desks and the appropriate staff members.

3. To introduce specific services such as computer searches, book talks, or interlibrary loan.
4. To introduce library policies such as overdue procedures, or the hours the library is open.
5. To introduce the organization of the collection with the specific goal of reducing user anxiety about trying to locate materials.
6. To motivate users to come back and make use of the resources.
7. To communicate an atmosphere of helpfulness and friendiness.

• *The Second of Three Levels—Library Instruction*

1. To learn to use the *Readers Guide to Periodical Literature.*
2. To be able to find books on a specific subject through the card catalog.
3. To be able to use microforms and the appropriate reading equipment.
4. To learn to use a specific reference tool such as the *Encyclopedia Britannica* or a *Who's Who.*
5. To locate a specific film and be able to operate the projector to view it.
6. To confirm the availability of resources in other libraries and be able to request an interlibrary loan.
7. To learn how to conduct a search in an indexing service such as *Educational Resources Information Center* and be able to locate and use the resulting microfiche and other citations.

• *The Third Level—Bibliographic Instsuction*

1. Information and its organization.
2. Subject headings, vocabulary control in research, and definition of a research topic.
3. Types of sources to consult.
4. Outlining techniques and planning a research paper.
6. Style, footnotes, references, and bibliographies.
7. Search strategies, exhaustiveness in research, and library services pertinent to a given collection.
8. Writing the research paper.

研究者用フロア

五藤良子
(日吉情報センター
パブリック・サービス課)

日吉図書館の最上階，４Ｆに位置するのが研究者用フロアである。日吉図書館は緑に囲まれ，自然環境に恵まれているが，この階からの眺めは特に素晴らしく，銀杏並木を見おろし，日吉の街を一望のもとに見渡すことができ，さらには，空気が澄み，良く晴れた日には，丹沢連峰の山々や富士山まで見ることができるのである。

日吉図書館の機能は大きく２つに分かれ，１つは利用者対象を教養課程の学生とする学習図書館であり，もう１つが対教員の研究図書館である。そして，教員を主たるサービス対象とするのが，この４Ｆフロアなのである。

新図書館が建設され，従来の藤山記念日吉図書館と研究室書庫とが同じ建物の中に一本化され，あたかも１つの図書館であるかのように見えるが，内容的には，依然として２つの図書館としての機能を持っている部分がある。

そして，４Ｆが１つの独立した図書館として運営されているため，４Ｆに事務室が置かれ，専任のスタッフがいて，サービスに当たっている。そのため，例えば，教員が図書を借りようとする場合，２，３Ｆの図書については１Ｆのメインカウンターで，４Ｆの図書は４Ｆのカウンターで手続きをしなければならない，という不便さが生ずる。利用者対象を異にするため，利用規則にも違いがある。ただし，それは利用の妨げには決してならないと思われるし，今のところ何の問題もないようである。

しかし，もちろん見かけ上だけ１つの図書館であって，内容的に（サービス等含めて），完全に２つの図書館，というわけではない。人的サービスの最も重要なレファレンス・サービスについては，１Ｆで専門のスタッフが一括して行なっているし，何より，今まで２ケ所の図書館を調べなければならなかったのが，１ケ所ですむようになった，という機能性も大いに評価されるべきであろう。とにかく，１つの建物になったおかげで，より相互利用をスムーズに行えるようになったのである。

特に，学生にとっては，今まで全く利用の余地のなかった研究室図書が，必要に応じて利用できるようになった，ということは，快挙と言えるだろう。

４Ｆの蔵書としては，以前第４校舎の地下にあった語学，人文，社会科学を中心とした図書，雑誌であるが，新館オープンにあたり，英語，独語の合同研究室から，カレント雑誌，新聞の全面的放出という協力を得ることができ，資料のより一層の集中化となり，広く利用に供することができるようになった。

そして，現在この４Ｆには，図書約14万冊（製本雑誌を含む），カレント誌約400タイトル，新聞25誌（日本語５，中国語３，英語13，独語３，仏語１），が置かれている。

設計面から見ると，大部分が書架になっており（収容能力20万冊の開架式書庫），そのまわりを取り囲むようにしてキャレルがあり，また南側にキュービクル，２つの閲覧室，中心部に事務室やカウンター，各施設がまとまっている。

資料と閲覧施設が一体化した，というのは，新図書館になってからの４Ｆの大きな特徴であり，今まで「研究室書庫」という呼び名の通り，書庫そのものであったのが，これでようやく「図書館」と呼べるようになった，といえる。

そして，２，３Ｆが書架と閲覧席が完全に分離して，明るく，解放的な空間になっているのに対して，４Ｆはキャレルを主体とした，静かで，落着いた雰囲気を醸し出しているのである。

もちろん，環境そのものは明るく，数多い窓からは緑が見え，また，トップライトによって通路部分に自然の光が取り入れられるようになっており，日中は電気を消しても明るい，というような工夫も見られる。

これが概容であるが，次に各施設について，少しずつ紹介してみたいと思う。

☆マイクロコーナー

マイクロ資料（ロール形態，フィッシュ形態）の閲覧，及び複写ができる。

現在は，リーダー・プリンターは一台しかないが，ニーズに応じて増やす予定。今後の資料形態の多様化に必要な施設となるだろう。

（座席：２）

☆貴重書室

事務室の奥にある。一般には貴重書の保管・閲覧に供する施設であるが，今後は，取り扱いがむずかしい資料や，特殊な Collection も置く予定にしている。

（座席：６）

☆タイプ室

自分のタイプライターを持ち込まなくても，この部屋でタイプを打つことができる。

タイプライターは２台ある。

（座席：２）

☆コピー室

教員用のキーカードを使用した，セルフコピー機がある。カードは，新研究室に部屋を持つ教員（このフロアーに資料を展開する分野の教員）の場合，研究室棟にあるコピー機と共用できるもので便利。もちろん，カードを所持していない教員も，カウンターでカードを借りて利用できる。

☆カレント誌コーナー

人文・社会系の洋雑誌を中心に，約400タイトルを展開。ピジョン・ボックスを使用し，その場ですぐに利用できるように座席も隣接してい

る。1巻が完結後製本し，書架に配架する。
（座席：ソファー8，キャレル4）

☆キュービクル

東書庫，西書庫に各8室ずつ，計16室。

ここは，完全な個室であり，カウンターで鍵を受け取って利用する。中には書棚もあり，大量の資料を持ち込み，腰を落ち着けてゆっくりと勉強するのにふさわしい。
（座席：16）

☆研究者用閲覧室

テラスに面して2つあり，ここでは声を出すことが認められている。

1つは，グループによる研究会やセミナーのための利用施設としての利用が期待される共同閲覧室であり（座席：16），もう1つは“くつろぎ”の感じられるラウンジ的要素を含んだ閲覧室で，ソファーにすわって，そこにある各国新聞，週刊誌，文芸雑誌等を読んだり，談話室のような使い方をし，先生方のコミュニケーションの場となるような閲覧室である。（座席：ソファー8，大机6）

つまり，この2つの閲覧室は，他のキャレルなどと異なった使い方をされる空間であり，開放的な場を提供することになるだろう。

ここで，テラスについても少しだけ紹介してみたいと思う。

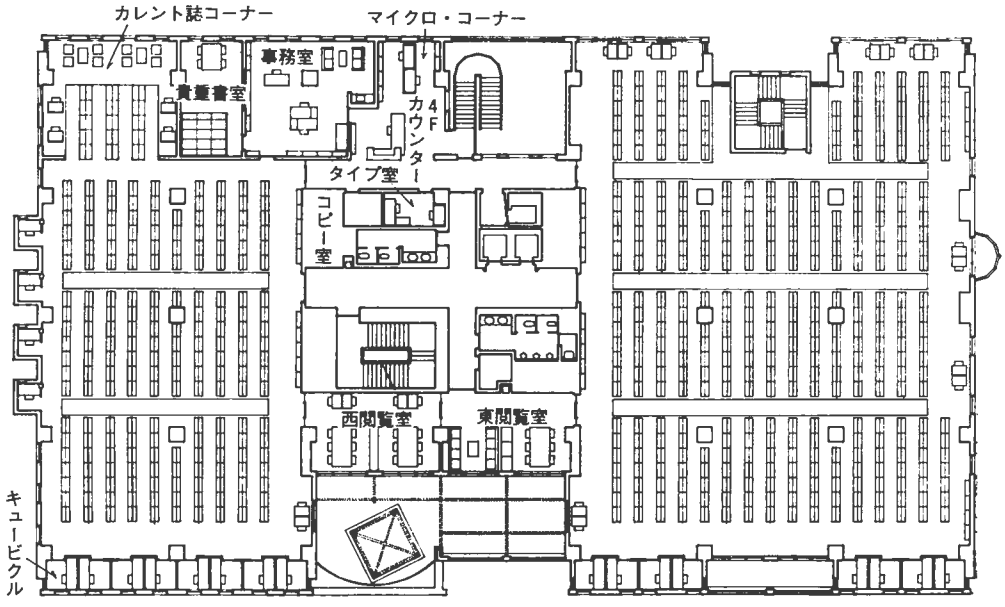
テラスには，朱色の鉄骨製の四阿（あずまや）が設けられていて，その下にイスが6個置かれている。ここからの眺めはすばらしく，風に吹かれ，緑を見ながら勉強の疲れを癒すのに最適の場所である。

☆その他のキャレル

書架をぐるりと取り囲んである。

1人用座席であるから，比較的落ち着ける。中でも特徴のあるのは，日吉駅から見ると煙突のように見える所の下にある4つの座席で，柱の頭にある赤い立方枠が天窓のようなもので，ここから自然光を取り入れているのである。ここは，書架部分より飛び出しており，遮断された空間で，とても落ち着いた雰囲気である。
（座席：20）

以上が，4Fの施設についての紹介である。



最後になったが，４Ｆの蔵書について少し書いてみたい。日吉は教養課程の学生を対象とするキャンパスであるから，授業内容は一般教養，語学が中心となる。

そして，そのうち自然科学系統（化学，物理，生物，数学，心理），芸術系統（音楽，美術）については，特別研究室と呼ばれる研究室を持ち，資料もそちらに置かれ，サテライトを形成している。そのため，ここ４Ｆは語学，人文，社会科学の資料が中心となる。そして，研究者用フロアであるから当然，洋書がほとんど，ということになり，そこで，４Ｆでは特別に，言語別による図書の区分がなされている。言語は，日，英，仏，独，ギリシア・ラテン，キリル文字，中，朝の８つに分かれ，それぞれの言語の中で内容区分され書架に配架されているのである。

しかし，雑誌については細かな言語区分はしておらず，洋雑誌，和雑誌と大別され，その中で，アルファベット順に並べられているだけである。

そして，東書庫には図書が，西書庫には中，朝鮮語の図書，参考図書類，及び雑誌が展開されているのである。

ここ４Ｆ，研究者用フロアは，新図書館になってから「研究室書庫」から大きく変貌をとげ，「研究図書館」に成長した。

20万冊の収容能力を持つ書庫，約90席の座席，そして冷暖房完備の環境。スペース面でも，三田の図書館以上のフロア面積を持つこの４Ｆ。

これからは，単に資料を提供するだけでなく，施設の充実によっての空間的なもの，専任スタッフの情報サービスをも提供することによって，研究者にとって，より快適な，第二の研究室となりうるような場にしていきたいと思っている。

良い図書館が成立するためには，資料，スタッフ，利用者の３つがバランス良く存在することが必要だと思う。

４Ｆ，そしてこの日吉図書館が名実ともにすばらしい図書館となるためには，まだまだ努力，そして時間を要するであろう。しかし，すでに，これだけすばらしい建物が設立されたのである。

これからは，利用者である研究者と一体となって，よりすばらしい内容にすべく，スタッフの一員としてがんばっていきたいと思う。

日吉情報センターにおける目録サービスについて

武　　正　恒
（日吉情報センター
テクニカル・サービス課長）

1. 初　め　に

本年４月９日，新築なって開館した日吉新図書館の目録ホールに於いて，研究室蔵書の目録が初めて利用者に対し全面的に公開された。藤山図書館にあった図書館の目録と異なり，研究室のそれは第四校舎のテクニカル・サービス課内に置かれていたため，これまで日吉専任教員以外の眼にはほとんど触れる機会がなかったのである。

開館当初は学生用図書の目録と混同され，学生達によってやみくもに検索されていたが，漸く落ち着きを取り戻した此の頃，研究室の目録と知った上で使用され，学生や矢上の教員などから資料の請求をうみ出す元となっている。研究室蔵書の利用が日吉の専任教員以外にも認められていたにもかかわらず，肝腎の検索手段が事実上非公開であったため，実際には利用出来なかった頃と比べると隔世の感がある。まさに，情報資源の共同利用の前提として，検索手段の公開または整備が重要であることを如実に物語るエピソードといえる。

以下に慶應の研究・教育情報センターの一翼を担う日吉情セの目録サービスの現状について報告する。

2. 閲覧用目録の構成

目録ホールに配置されている各種目録を図１に示す。

図1　日吉情報センターの閲覧用目録体系

学生用図書目録		研究室蔵書目録
和書		
'80年度受入分まで	―書名目録 ―著者名目録 ―分類目録	著者・書名目録 分類目録
'81年度受入分以降	―冊子体書名目録 ―冊子体著者名目録 ―冊子体分類目録 ―閲覧用書架目録	
洋書 書名目録 著者名目録 分類目録		著者・書名目録 分類目録
言語別目録（英・独・仏語を除き，中国語，朝鮮語を含む）		
慶應義塾雑誌目録（PICC）		

一見して分かるとおり研究室蔵書に対する目録に比べ，学生用和書に対する目録の構成が複雑である。本来，目録利用の初心者である学生に用意する目録こそ単純明解な構成であるべきだが，後述する目録作成の機械化のため己む無く，凍結されたカード目録と，凍結以後の内容を含む冊子体目録及び閲覧用書架目録のセットとに別れた。

3.　言語別目録

言語別目録は語学教育に重点をおく日吉の特性に鑑み，図書館の外国語資料の目録カードを1枚複写して言語別にし，請求記号順に配列したものである。

元来が，洋書（和書）の書架上で他の資料に埋もれてしまいがちな，少数言語資料の利用に便宜を計るために編成されたものである。従って，英・独・仏語資料は比較的多く所蔵されブラウジングも容易なため目録に加えられていない。

4.　閲覧用書架目録

従来のカード目録を凍結した後，'81年度受入分以降をカバーするカード目録で請求記号順に配列されている。詳細な記述内容を持ち，冊子体目録の記述を補い書誌的事項を確認する場合に用いる。

5.　冊子体目録

冊子体目録は学生用和書の目録として'81年度受入分より作成されており，学生にとって最も重要であり，親しむべき目録である。

その構成は，'81年度受入分よりその年の前年度末までを収録し毎年1回発行する累積版と年4回程度発行の補遺版よりなる。内容は書名，著者名，分類目録に分かれすべて電算機で編集，印刷される。なお，この目録は冊子体目録単独でも利用出来るが，閲覧用書架目録と併用する事が原則という特異な性格をもっている。この点を理解するためには，若干過去の経緯に触れる必要があろう。

5―1　カナ文字目録索引

日吉情セが閲覧，整理双方の業務機械化を検討していた'80年頃，整理部門の課題は増大する未配列の目録カードと滞貨図書の発生[1]であった。このため'81年春，「整理期間の短縮と迅速な目録提供」を目指し，電算機によりカナ文字の目録索引を作成することが，閲覧業務の機械化計画と共に正式に起案され当局より承認された。この段階では5年計画で既蔵分をも索引化する事が予定されていた。

目録ではなく索引としたのは，当時唯一の和書マークであった日販マークの，図書館による購入が認められていなかったことと，簡単な書誌事項をカナ文字で記載した索引でも学部1，2年生の利用に対応できる，と判断したためといわれる。索引の本体に当るものとして'81年度受入分以降は目録カードによる閲覧用書架目録を新たに編成し，それまでの書名，著者名，分類の各カード目録は凍結することが前提であった。

5―2　漢字目録索引

カナ文字索引の準備を進めていた同年夏頃，日販マークが図書館向けに売り出された一方閲覧業務の機械化を通じて当時密接な関係にあった日本メモレックス社が，日販マークをベースとして「メモレックス図書データベース・サービス」の頒布を開始した。同社の図書館専用機K-5，K-7用に開発された漢字・カナデータベースを買い取り自館処理をすれば，漢字表記の索引作成が可能となるため，急遽カナ表記から漢字表記へと大きく方向転換がなされたのである。

表1にデータ項目を示す。

さらに日吉情セの専用機，メモレックスライブラリアンK-5により，請求記号を始めローカルデータを入力し，NPL番号をキーとして漢字データとマッチングさせて漢字目録索引が完成する[2)]。

表2にローカルデータのデータ項目を，図2に漢字目録索引の作成概念図を示す。

表1　日吉情セが購入するデータ項目

*書　　名	カナ50字，漢字40字
*著　者　名	2人まで，カナ15字，漢字10字
*著者役割表示	漢字2字
*巻　　次	カナ5字，漢字3字
*出 版 社 名	カナ20字，漢字10字
発 行 年 月	6字
*頁　　数	5字
サ　イ　ズ	2字
シリーズ名	カナ25字（漢字なし）
N　D　C	7字
定　　価	7字
I　S　B　N	13字
*一 般 注 記	漢字70字（表示は54字まで）
N　P　L	9字

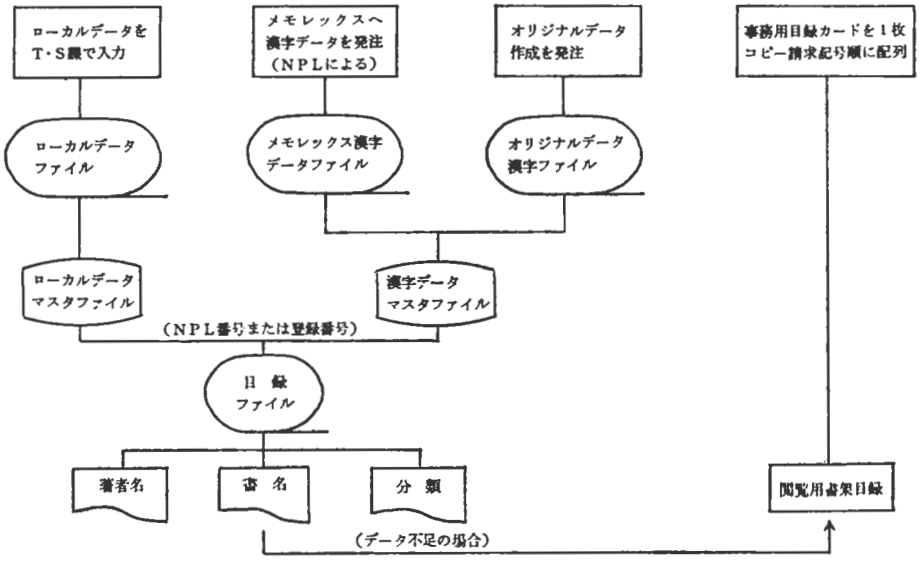
* 漢字，英数字を目録データとして使用

表2　ローカルデータ（ローマ字データ）項目

登 録 番 号	8字
NPL番号	9字
請 求 記 号	20字
分 類 副 出	7字
書　　名	4つまで各40字
シリーズ番号	6字
著　者　名	3人まで25字
人 名 件 名	2人まで各25字
出　版　年	4字

英字，数字により入力。

図2　漢字目録索引作成概念図



5—3　目録索引から冊子体目録へ

目録索引は予定どおり'84年3月に完成し，移転前の藤山図書館で閲覧用書架目録に対する索引として，1年間利用に供された。この間ＴＳ課では利用者の反応を見る一方，完成した索引を種々検討した結果，

1. 副書名が表示されない。例外的に注記の位置に示されるが，この場合注記が欠落する。
2. 著者表示が10文字までのため，外国人名や団体名の表示が中断されることが多い。
3. 版表示は通常示されないが注記の位置に出ることがある。その場合注記がなくなることは副書名に同じ。
4. 2種以上の頁付けの場合，頁数は表示されず空欄となる。
5. シリーズ名の表示がない。
6. データ表示の程度にバラツキがみられる。

などの問題点があるが[3]，書誌的事項にあまり厳密さを求めず単にファインディングリストとして使うなら，すなわち学生が通常使う程度なら，単独で充分に役立つ事が分った。

また「索引」という名は実態にそぐわず，利用者にとまどいを与えるという配慮から，新図書館開館を機に「冊子体目録」と名を改めた。勿論，冊子体目録は記述が簡略なため，必要があれば請求記号を媒介として閲覧用書架目録を参照して下さい，という案内を行っている。

6.　カード目録と冊子体目録

最新の利用統計によると，日吉の学生が利用する資料の9割までが過去9年以内の出版物，5割までが5年以内の出版物である[4]。従って過去4年分，約4万2千冊の目録情報を蓄積した冊子体目録は，学生達が必要とする資料のほぼ半分を収録していると言える。更に数年を経れば検索の中心はほぼ完全に冊子体目録へ移行すると言っても過言ではあるまい。

しかし実際に目録ホールに立った利用者は，圧倒的な量のカード目録に目を奪われ，冊子体目録に気付かないことが多い。日吉の目録サービスにとって，利用者の目を，良く目立つカードボックスから地味な冊子体目録へと向けさせる努力がなによりも重要であると言えよう。

7.　冊子体目録の将来

日吉の目録作成の機械化が検討されてから5年，目録を取り巻く状況は当時と大きく変わり，また今も変わり続けている。従って次の機械化がどのような形になるのか予断を許さないが，いずれにしろ日吉が現在蓄積中のデータの扱いが問題となろう。

計画当初の段階では，ISBN をキーとしてＪＰマークへデータを変換することが考えられていたが費用もかかり，また付与率も100%ではない。

恐らく現実的であろうと思われる解決策は，その時点で冊子体目録を凍結することである。形の上ではオンライン(？)，冊子体，カードと3段階の検索になるが前述のように，利用の9割までが過去10年前後までの出版物と予想されるため，オンライン(？)，冊子体と事実上他の目録と同じく2段階の検索ですむと思われるからである。

日吉の冊子体目録は目録機械化の過程に於いて過渡期の存在として誕生した。しかし我々はこの事業によって得た貴重な経験や教訓を，より良い目録サービスへの糧として来たるべき次の機械化に生かしてゆきたい。

1) 滞貨図書の発生は'80年度から。また'79年度末の未配列カード，約44,000枚。
2) 日販マークがない図書のデータはパンチ会社にデータ作成を外注する。
3) データの表示については，メモレックス社と話し合いし若干改善される見通しである。
4) '84年度，藤山図書館最後の利用統計。
当時はメインフロアの書架と地下の書架（どちらも開架方式）に資料が刊年で別れていた。ここでいう9年（'76年度以降）とは丁

度，利用に便利なメインフロアの書架に配架された資料の刊年にあたる。しかし'82年度の統計によると，メインフロアの資料（過去7年分）の利用率は75%であった。

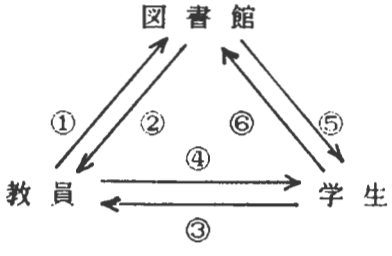
日吉図書館への期待

村　瀬　　旻
（理工学部助教授）

日吉図書館開館披露の日，新しい図書館の正面四階の窓から中庭とそれを取り囲む木立を眺めて，これで日吉も大学のキャンパスらしくなったと最初に思った。明るいだけで何かが欠けていたキャンパスに，中心となるものが備わった感がした。建物のデザインもよい。それ以来，私は研究室（第八校舎）から第四～七校舎へ向かう時，たいてい食堂ホール前の中庭の小道を通る。"哲学の小径"とまではいかないが，歩みつつ次第に図書館の正面が眼前に大きくなってくる変化が，私は好きである。

さて，その新図書館について，私の期待を述べてみたい。

図書館は，言うまでもないことだが，大学のなかで多角的な機能を持っている。図書・記録その他の収集，保管，閲覧から，孤独な学生の避難の場所としてまで多様であろう。私は研究・教育のなかで図書館を利用している。それは図のような相互的関連のなかで捉えられるであろう。たとえば，私が図書を閲覧すること，研究上の文献探索を依頼することなどは①である。それらにたいする図書館のサービスは②となる。教室で学生に参考書を推薦し④，同時にそれを図書館へ連絡する①。学生が請求すれば⑥，購入された図書が閲覧に供せられること⑤になる。



私のいる日吉の心理学研究室では，学生にたいする図書に関心の深いS教授のいることもあって，毎年かなりの数の推薦図書の購入を図書館にお願いしており①，授業やレポートのための参考文献を学生に紹介すること④に気を配っている教員も多い。しかし，それが学生が図書館を活用すること⑥に結びつくためにはさらにまた別の要因があるように思われる。

まず基本は，教師は紹介する④だけでなく，学生からのフィードバックをとり③，授業を刺激的なものにすることが重要だろう。そして図書館は，⑤として推薦図書のコーナーを作るとか，その所在が書棚の中で分かりやすくするといった工夫をする，図書館を親しみやすいものとする（既に'館内ツアー'などがある），②として推薦された図書の購入の有無を教員に迅速に回答する，利用状況をフィードバックするなども必要であろう。要は図書館・学生・教員はシステムであり，図書館が良く機能するには，それらの相互的関連が活性化すること，別の言いかたをすれば，互いに活発なコミュニケーションのあるリレーションが保たれていることが必要であろう。新図書館の発足とともに，まず研究・教育のなかで，図書館を中心とする相互的関連について再検討がなされることを期待したい。

コミュニケーションといえば，コンピュータが話題となる。KULIC誌上でもしばしば論じられているが，図書館と教員との①②の結びつきには将来個人別の端末がほしいところである。研究室から直接の文献検索，推薦図書の依頼，国内外のデータバンクの利用など実現されてよい。米国の大学では，すでに図書館内に学生用のコンピュータがあり，レポートの作成などに供せられているという。

最後に，私はこれまで仕事のうえで，レファレンスをはじめとして，図書館の職員の方々の親切

な助力を受けてきた。学生も同じであろう。新図書館は建物として機能的な，いささかクールな感じがするが，その中ではあたたかなヒューマン・リレーション，コミュニケーションがいつまでもあってほしいと思う。

新日吉図書館の印象

加　藤　弘　和
（経済学部教授）

日吉についに本格的な図書館が誕生した。大変うれしいことだ。ちょうどわたしにとっては研究休暇の年にあたり，おおいに利用させてもらっている。あたかも自分の財産の一部であるかのように日常つかえる図書館を，生涯ではじめて手にしたような気がする。わたしが育ったころの小学校や中学校には図書館もなかったように思う。高校，そして大学の日吉時代には図書室しかなかった。前日吉図書館にはあまりなじみがなかったのだ。

図書館ができて何よりうれしいのは，いままで地下の書庫に押し込まれていた本が明るい四階に，ごくあたりまえに書架に並んでいて，いつでも好きなときに気楽に本を取りだせ，しかもそれをゆっくり読める快適な場所があることだ。こんな風に書いてくると，これまでいかにつつましい状態にあったかを思い出し，あらためて愕然とするとともに，いま大きな喜びをおぼえる。

研究室書庫にあった本が一堂に並べられてみると，こんなに貴重な本，思いがけない本があったのかと驚かされることもある。しかし，全体的にみると蔵書がかなり貧弱であることも，一目瞭然となった。自分の関係分野についても，基本的な図書も含めて，もっと着実に集めていかなくてはならないことを痛感している。さらに，たとえば芸術関係など，極端に本が少ない分野もあることに気づいた。これは本が多少は各分野に分散しているためでもあろうが，それとは別に図書館として，それらの分野を充実させていく必要があるであろう。いざというときに，あれもこれもないということがないようにしたいものである。学生諸君からの購入希望はあまりないと聞いている。

一方，蔵書数は年々急増してゆく。時間的にも空間的にも本をどのように整理・保存してゆくかは，どこの図書館でもかかえている問題だが，素人のわたしでも心配である。目録カード・ボックスだけでも相当の空間が毎年必要になるそうだ。しかも本だけでなく，レコードやテープ，フィルムやヴィデオの数量も急速にふえてゆくであろう。こうした問題にも，ほんのしばらくかもしれないが，楽しみながら対処していけるであろう。

小さなことをいえば，場所によっては通風口の音が大きすぎたり，電車や車の音が響くといった問題もあるようだが，ＡＶホールや四階のベランダなどの有効な活用法を考える楽しみもある。

新図書館の建築学的な美しさは，わたしにはよくわからないが，そのすばらしさは，周囲の風景を存分に取り込んでいるところにある。一階の南東の角の大きなガラス窓から目に入る欅の木のなんと堂々としていることか。これまではその美しさを全体的にとらえることができなかった。四階からの眺めがとくにいい。なだらかに起伏する地形はみていてあきないし，緑の多いことが心地よい。キュービクルによっては，公孫樹と欅の頂きのほかに目に入るのは広い空だけというところもある。まだ春から夏への季節の変化しか見ていないが，一日の変化のなかでは薄暗くなりかけたころが，もっとも風情があると思っている。今夏は澄んだ青い空の日が多かった。これほどの風景を満喫できる場所は，これまで日吉にはなかった。

わたしは単純に建物がよくなればと願う物質主義者ではないが，日吉のキャンパスはあまりにも雑然としている。まるで日本の社会における大学教育の位置を象徴しているようだ。バラック風の建物がだいたい姿を消して，やっと日吉も戦前・戦中・戦後から外面的には抜けだした。大学の建物の消耗は激しい。新図書館を中心に新しいキャ

ンパスが構想されるようになるのはいつのことだろうかと，かすかに期待しはじめている。

館内ツアーに参加して

木　村　敏　康
（理工学部３年）

先日，私はふとしたきっかけから館内ツアーに参加した。以前から館内ツアーがあるということを知っていたのだが，説明してもらわなくても大体のことは知っていると思い，たいして気にとめていなかったし，単なる自習室として図書館を利用することが多かった。

しかし，実際にツアーに参加してみると，知らずにいたことが随分とあり，もっと早く参加していればと苦笑させられた。

新図書館の廊下は一階から三階までほとんど同じ設計で，更に左右対称になっているので，自分が今何階にいるのか，どちらが左で右なのかわからなくなることがしばしばあった。床に階数や案内図を書き込んでくれていたら，と思っていたが，実は床の色とランプの配置が各階ごとに工夫され，本棚が木製かスチールかで，左右の位置を確認できるのだった。この事実を知ってから私は迷うことがほとんど無くなった。このような配慮は他にも沢山あった。特に驚いたのはこの図書館のシンボルマークとなっている四阿だ。見る角度によって柱の数が次々に変っていく。この図案が大きく壁に描かれているということは，ツアーで初めて気付かされた。視点を変えてみればみる程，その奥の深さがわかる。そんな作りになっていた。

こうした遊びは，精神的にも余裕を与えてくれ，知らず知らずのうちに勉強がはかどるようである。ツアーでは，図書の検索やＡＶコーナー，呼び出し電話などの実演も行われ，以前までは面倒くさいと思っていた私も，最近では気兼ね無く使えるようになった。

ほんの20分ほどのツアーではあったが，それの持つ意味は大きかった。これからも館内ツアーのような企画が，頻繁に行われることを期待したい。

日吉新図書館を利用して

田　辺　真一郎
（経済学部２年）

近代的で芸術的な新図書館が開館してから一カ月が過ぎようとしている。すでに多くの塾生が閲覧，自習，談話などそれぞれの目的に利用している。私は一利用者として新図書館に対して気が付いた点を，あげてみたい。

新図書館は広い。しかもあるスペースから別のスペースへの連絡が非常にしやすい。しかし，その割に案内表示が少ない。これが結構，慣れるまではやっかいなものである。探してみると館内ところどころに案内板がかかっているが，階段の踊り場をはじめ，もう少し目立つ所に取りつけてほしい。実際，エレベーターの中の案内を見ている時間はほとんど無いと思う。また，案内のほかにも矢印による表示も必要だと思う。例えば入口のすぐ脇の階段はどこへ通じているかはっきりしない為，意外と利用しにくい。つまり，効率のよい使われ方がされていないのではないか，と思うのである。

また，ここでは図書は番号によって整理されている。この番号制は便利であると思うが，やはり書棚には補助的に本の種類をことばで示してほしい。この制度を知らない人や慣れない人にとっては，探すべき本をいったん番号による種分けを通してからでないと見つけられないのは多少は面倒であろう。

第三は貸出について。貸出方法は図書館によって多少なり違っているものである。ごくあたり前の貸出方法でも明示されていると借りる方は安心して借りられる。またここではビデオ等の館内貸

出もやっているが，これにも多少の説明がほしい。いきなり学生証を要求されるとやはり面くらうところがある。

以上述べてきたことは私が新図書館をよく分っていなかった頃をふり返ってみたことである。丁寧でとても素晴らしい“図書館ツアー”に参加した私にとっては，これらの障害はもう消えているのである。

慶應義塾日吉図書館の印象と期待

高　鳥　正　夫
（法学部教授）

1. はじめに

昭和60年4月に開館してサービスを始めた日吉図書館は，三田の新図書館と同様に，東京大学の槇文彦教授とそのスタッフの設計，監理になるものである。そこで，この異なった特色をもつ二つの図書館を比較しながら，日吉図書館の評価を試みたいと考えていた。幸い，文学部図書館・情報学科で「情報システム管理Ⅰ」の講義を行っていたので，去る5月14日に，聴講していた3年生34名，4年生5名と共に日吉図書館を見学し，日吉情報センター柳屋副所長をはじめ図書館員の方から有益なご教示を受け，資料もいただいた。

これらの学生諸君は三田図書館を実際に利用し，講義をとおして図書館評価に関してある程度の知識を備えていたが，その後も個人的に何回か日吉図書館を見学した上で，リポートを提出してきた。それらのリポートの内容を整理すると次のようになったが，特に注目されるのは，日吉キャンパスの空気を変えたこの新しい図書館においては，三田図書館建設の経験が十分に生かされていると指摘するものが多かったことである。

2. 日吉図書館の特色

(1) 建物と施設

a）日吉図書館の位置はキャンパスの入口に近く，利用者や来訪者にとって図書館の存在が目に入りやすく，グリーングレーの配色と建物の外観は若者の好みに合い，建物の内部も隅々まで建築家の美的感覚が生かされている。図書館の各階は広く開放的で，日吉キャンパスの雰囲気にふさわしい図書館といえる。

b）図書館の入口は，三田図書館における経験を生かして，広いスペースをとっているため混雑が少ない。1,200席という閲覧席も現在のところ余裕があり，三田図書館のように座席の確保に頭を使わないで済む。

c）館内の照明の薄暗い三田図書館に比べて，日吉図書館は十分な明るさを確保してあり，レファレンス・コーナーの吊下げ照明の採用，書架天井の照明の位置などの工夫もあって，全体として明るい図書館になっている。

d）1Fのレファレンス・コーナーは低書架を採用して広くゆったりしており，書架の上で重いレファレンス・ブックを拡げることもできる。レファレンス・ディスクが目録の傍に設けられており，三田図書館よりも利用者にとって便宜である。

e）AVコーナーが入口近くに設けられ，VTR，CD，LDなどの視聴覚施設が，簡単な手続で気楽に利用できるのは良い。

(2) 図書館員とサービス

a）日吉図書館が開館してから，利用時間をAM8：45からPM9：00までと大幅に延長し，利用者の要望に応えた努力は大いに評価できる。

b）IDカードで入館し，図書の貸出，返却手続もきわめて簡単であり，三田図書館でも同様な方法を採用することが望まれる。

c）1Fのレファレンス・ブックの配置とその表示は適切である。雑誌類がバックナンバーを含めて3Fにまとめられ，旧藤山図書館に比べてその利用が便宜になった。

d）日吉図書館のサービスは親切でやさしく図書の貸出も閉館ぎりぎりまでやってくれる。利用ガイドは多色刷で読みやすく，新しく図書館を利

用する者にとっても親切にできている。

(3) そ の 他

a）新入生がすばらしい施設を備えた日吉図書館に入ったとき，初めて大学に入ったという感想をもつであろう。この図書館が塾の他の三つの大学図書館の入門編として，日吉キャンパスにおいて重要な役割を果していくことが期待される。

b）限られた書庫スペースと学習図書館としての性格を考慮して，蔵書の内容を利用統計に基いて更新するため，蔵書再編成室を設けたことは見識であり，実効をあげていって欲しい。

3. 改善が望まれる点

(1) 建物と施設

a）日吉図書館の利用者のなかにも，三田図書館のもつ重厚さを好む者がいるから，照明度を下げて落着いたリーディング・コーナーを設け，個人用ランプをつける配慮をして欲しい。

b）1Fのレファレンス・ディスクがカード目録のケースに妨げられ，入館者の眼に入り難い。AVコーナーの企画を成功させるため，ソフトの充実をはかって欲しいが，一部の大学図書館のように，娯楽物までを備える必要はない。

c）2F，3Fのグループ学習室には開けられる窓が少なく，そのため換気が良くないから改善して欲しい，2Fのラウンジは，日吉図書館の規模からいって，喫煙と休憩用にあれだけの広さをあてることは行過ぎである。

d）1Fのレファレンス・ディスク，4Fの南側ラウンジでは，空調または換気装置の音がひびいて耳ざわりであり，改善を必要とする。

(2) 図書館員とサービス

a）日吉図書館ではカード目録と冊子体目録を併用し，冊子体目録は1981年以降と表示されているが，出版年が不明のときは両方の目録を調べなければならないし，冊子体目録には補遺版まであって検索に不便である。

b）目録をひいている学生が少なく，レファレンス・サービスに力を入れても，レファレンスの意味を理解する学生も少ない。今後は，学生に目録のひき方を教えると共に，レファレンスの利用法を積極的にPRすることが望まれる。

c）館内で飲食したり昼寝している学生がおり，利用者が帰った後に紙くずも落ちている。三田図書館のもつ緊張感が日吉図書館にも育つよう配慮すると共に，館内の清掃を十分に行うことが大切である。

d）複写機が1Fのメインカウンターと3Fにおかれており，両者の値段の異なるのはやむをえないとしても，セルフサービスの複写機を1F，2Fに設置することが必要である。

(3) そ の 他

a）日吉図書館においては，利用者が問題意識をもったときに，いつでも話しかけられる図書館員が身近かにいることが重要であるから，図書館員を増員して，2Fにもカウンターを設けることが望ましい。

b）日吉図書館では，今後も積極的に専門書の充実を続ける必要があり，そうでないと，大学図書館としては取残されていくことを忘れてはならない。

c）逐次刊行物のタイトル数が，国公私立の一大学平均数の半分程度であり，今後の学術情報の流れからいって，その充実を最優先する必要がある。

4. む す び

開館して3か月経った現在では，三田の学生も特定の雑誌や図書を利用するため，日吉図書館に通い始めたようである。そして来年4月には，日吉在籍の学生の約半数が入れ変わり，新しい1年生を迎えることとなる。その意味では，これらのリポートでも高い評価を受けた日吉図書館が，今後も学生諸君によって十分に利用されるよう，図書館はもちろん各学部においても，図書館利用法の教育に理解と熱意をもつことが要請される。

日吉図書館を使いこなした学生諸君が，やがて三田図書館をはじめ医学図書館，理工学図書館の

利用へと進み，また，これらの図書館の間で図書館員が適切に配置されれば，今回の日吉図書館の大幅かつ大胆なレベルアップは，他の図書館にとっても改革のための大きな刺激となるであろう。

日吉新図書館に関する書誌

〔1982〕

衛藤駿“日吉新図書館の構想—新しいキャンパスの顔” **三田評論** No. 825, p. 22-23 (1982).

“日吉新図書館建設へ　125周年記念事業委発足” **慶應塾生新聞** No. 146, p. 1 (昭和57年5月10日).

“125周年記念事業　150億募金計画スタート—“日吉新図書館”六層から五層建てへ第二次設計案出される—” **慶應塾生新聞** No. 150, p. 1 (昭和57年9月10日).

“125周年記念事業　長期的展望に欠ける具体案—日吉新図書館・四谷新病棟当初の想像より縮少早ければ来年八月着工—” **慶應塾生新聞** No. 150, p. 2 (昭和57年9月10日).

“構造上の問題が焦点へ　日吉新図書館建設委再開” **慶應塾生新聞** No. 151, p. 1 (昭和57年10月10日).

“四階へ設計変更　日吉新図書館建設委員会開かる” **慶應塾生新聞** No. 152, p. 1 (昭和57年11月10日).

〔1983〕

“慶應義塾創立百二十五周年 新日吉図書館と新山中山荘” **三田ジャーナル** No. 87, p. 1 (1983).

衛藤駿“日吉新図書館の建設に向けて” **慶應義塾大学報** No. 140, p. 14 (1983).

“日吉新図書館利用法” **慶應キャンパス** No. 112 (昭和58年4月20日).

渋川雅俊“慶應義塾図書館の開館と日吉新図書館計画の決定” **慶應義塾大学報** No. 144, p. 1 (1983).

柳屋良博“日吉の新図書館計画について” **塾監局紀要** No. 10, p. 20-29 (1983).

“新刊文芸書，写真集も—日吉新図書館着工へ” **慶應塾生新聞** No. 161, p. 2 (1983. 9. 10).

高鳥正夫“図書館の建設と日吉ルネッサンス” **塾** No. 122, p. 1 (1983).

衛藤駿“日吉新図書館への期待—図書館＝新書斎・文房論〈日吉新図書館建設計画〉” **KULIC** No. 17, p. 1-2.

柳屋良博“日吉新図書館建設計画の経緯〈日吉新図書館建設計画〉” **KULIC** No. 17, p. 3-8.

槇文彦“慶應義塾大学日吉新図書館・事務棟設計メモ〈日吉新図書館建設計画〉” **KULIC** No. 17, p. 9-16.

小川治之“日吉新図書館におけるサービスの概要〈日吉新図書館建設計画〉” **KULIC** No. 17, p. 17-22.

〔1984〕

“日吉新図書館着工” **慶應タイムス** (1984. 1. 15).

“塾キャンパスの未来—槇文彦氏に聞く” **慶應キャンパス** No. 122 (1984. 1. 20).

小川治之“日吉新図書館の機能とサービス” **慶應義塾大学報** No. 160, p. 14-15 (1984. 4. 1).

〔1985〕

“新図書館・新校舎が完成—三田校舎地下2階地上9階，新図書館私学では異例の巨大さ” **慶應キャンパス** No. 161, p. 1 (1985. 4. 5).

“創立125年記念事業Pt. 1：日吉新図書館建設” **慶應キャンパス** No. 161, p. 2 (1985. 4. 5).

“日吉の核となりうるか—日吉新図書館4月9日オープン” **慶應塾生新聞** No. 178, p. 3 (1985. 4. 10).

“日吉キャンパスに白く映えるは新図書館” **塾風** No. 5, p. 5, 110-111 (1985. 4. 1).

衛藤駿“慶應義塾日吉図書館の開館” **三田評論** No. 857, p. 76-78 (1985. 4).

“日吉図書館・事務棟” **創立125年記念誌**（三田評論別冊）No. 858, p. 97, 104-105 (1985. 4).

福地ひとみ“日吉図書館” **Keio病院ニュース** No. 37, p. 21 (1985. 4. 30).

川村正敏“慶應義塾日吉図書館” **日経アーキテ**

クチュア No. 239, p. 3-4, 106-111 (1985. 5. 20).
"日吉新図書館開館" 撮影　畔田藤治　塾 Vol. 23, No. 3, p. 17-20 (1985. 6. 1).
衛藤駿 "日吉図書館—新しい旅立ち" 塾 Vol. 23, No. 3, p. 21 (1985. 6. 1).
若月幸敏 "慶應義塾日吉図書館" 建築文化 Vol. 40 (No. 464) p. 61-69 (1985. 6).
槇文彦・若月幸敏 "慶應義塾日吉図書館" 新建築 Vol. 60, No. 6, p. 222-236, 279 (1985. 6).
"利用状況調査：開館三カ月後の日吉新図書館—学生アンケート" 慶應塾生新聞 No. 181, p. 3 (1985. 7. 10).
"慶應義塾日吉図書館〈新館紹介〉" 大学図書館協カニュース Vol. 6, No. 2, p. 7-8 (1985. 7).
"慶應義塾高校・大学を訪ねて" つるみがわ (県立港北高等学校図書委員会) No. 23, p. 1 (1985. 7. 20).
"慶應義塾日吉新図書館がオープン" 図書館雑誌 Vol. 79, No. 7, p. 377 (1985. 7).
柳屋良博 "慶應義塾日吉図書館〈新館紹介〉" 図書館雑誌 Vol. 79, No. 8, p. 430 (1985. 8).
衛藤駿・小川治之・徳永隆男 "座談会　日吉新図書館について" 三色旗 No. 451, p. 6-15 (1985. 10).
"New buildings in Keio Univ.," The Mita Campus, Vol. 40, No. 3, p. 1 (1985. 6).

図書館・情報学科出版物（勁草書房刊）

① 図書館・情報学概論　津田良成編　昭和58年5月　239p.　¥2,600
② 図書館・情報学シリーズ（既刊分）
　第7巻　大学図書館の運営　高鳥正夫　昭和60年4月　193p.　¥2,300
　第9巻　目録の歴史　渋川雅俊　昭和60年10月　212p.　¥2,500

三田図書館・情報学会月例研究会

第38回（60年3月16日）
「出版地鑑定のためのコンサルテーション・システム」
発表者　戸田慎一（東京大学教育学部）

第39回（60年5月18日）
"Impressions of librarianship and services in Japan"
発表者　Reinburg, Jesse T.（ライブラリー・デベロップメント・オフィサー，USIS JAPAN）

第40回（60年7月13日）
「東大文献情報センター目録システムの利用の現状」
発表者　内藤英雄（東京工業大学）

第41回（60年10月5日）
"Evolutionary change in British medical and health library and information service"
発表者　Picken, Fiona Mackay (North West Themes and British Postgraduate Medical Federation, University of London)

第42回（61年1月25日予定）
「データベースの著作権」
発表者　井出　翕（東洋大学）

第43回（61年3月15日）
「User Study の知識ベースの開発」
発表者　倉田敬子，後藤智範（慶應義塾大学）

これらの研究会は，非会員にも公開している。また，年刊の機関誌 Library and information science は，個人会費（年額 ¥3,000），機関会費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会，機関誌等に関する問合せは，慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-453-4511 内線 3147）で受付ている。

看護学生と読書

大　橋　優美子

看護学校に入学してくる学生は，一般大学の学生に比して目的をしっかりもっているようである。だが，何人かは大学受験に失敗し，やむなく看護学校に進むことになってしまった者もいる。これらの学生には大学進学組からの疎外感が伴っている行動が入学後多くみられ，肩怒らせる時代は過ぎたが，なんともいえない無気力さが残る。そのため授業内容が高校時代とは大きく異なり学習方法も一つ一つを理解する方法が強調され，思考しなくてはならないので授業は苦痛となる。

現在の看護教育は非常に広い分野にわたって学習しなくてはならない。そこで学習する資源として学術的情報が必要になる。医学，哲学，人間学，社会学，宗教，家庭学，刑法といったいろいろの学問が関与する。看護に関する書籍が千百数点，雑誌が約30点ほど出版されているといわれるが，それらの情報から適格な内容をえらび出すことは難しいようである。看護教育の中に臨床実習があるがこの中で学生が受持患者を持ち看護ケアを実践してゆくとき対象である人間について，生物面，身体面，社会面，精神面を持っていることから情報収集しなくてはならない。患者の疾病についての情報の土台は医学書や専門雑誌が多く文献として使われている。これらは新しい情報と具体的内容を得るために効果がある。図書の活用は基礎的な知識や技術を得るばかりではなく，患者のもつ医学的なもののほかの把握のための役に立つことがある。

学生は高校までの間に落ちついて本を読み，静かに思索するという習慣は殆んど身についていない。それ故に最近は学生に読書をすすめることが多くなった。学生にとって読書は特別にとりたてていうものではなく，読書することから問題を見出したり自分の考えをまとめたりすることはあたりまえの事柄であるはずで，看護にとってサービスする対象が人間である以上，その理解は多くの問題を書物の中より理解することが必要となる。

人命の尊重は，みづからの哲学よりいづるものであるが若い彼女たちが読書することによりその中にある人間像や生き方，価値感などを吸収しそれらを核として生命観や死生観などを自分のものとして育ててゆけるのである。人間の人格形成やその成熟は読書だけではないが，人の痛みや苦しみを受容してゆくための要素を学問外にもとめるならば，読書をしそれについて先輩・後輩そして同輩と語ることもできる。

人間が他の生物と違うことは，明確な意志・判断をもって生・死を統御することができる点にあるとし，そのことから死に対しても自己の主体的意志をもって統御することが人間らしい生き方だとする考え方がある。尊厳死といわれるものが，単なる延命や生ける屍，植物人間として生き続けることが人間存在として本当に意味のあることなのかという問題が各分野で問われているが，看護のなかでも医療でも死の問題がクローズ・アップされている。しかし学生は実生活のなかで死に接することが少なく，それらを文学のなかで読書を通して得て自分の体験とすることがあるが，軍医であり文学者でもある森鴎外の「高瀬舟」が安楽死の問題で有名な小説であるが，最近の学生は殆んどこの作品を読んではいない。安楽死問題はアメリカのカレン裁判で広く知られるようになったが非常にむづかしい命題である。看護のなかでの死にゆく患者ケアは，患者の心理プロセスやその人々の身体的・精神的・社会的・宗教的必要やそのケアの理論だけではなく，文献のなかから実際を読みとりどのように判断し行動するかという基盤とし，自分自身の真の人間としての充実や生き甲斐と使命観をどう貫いてゆくか，また人格的成熟をも読書を通じ養ってゆくことが看護に欠くことができない。他の学問分野に視野を広げるためにも図書の活用は必要である。

（厚生女子学院教務主任）

医学情報センター所長就任にあたって

横山哲朗
（慶應義塾大学医学部内科学教授）

昭和60年4月，嶋井名誉教授の定年退職にあたり医学情報センター所長の重責を引き継ぎました。これまで一部の例外を除いて基礎医学の教授が代々就任してこられたこの所長職を継承いたすことは身に余る光栄ではありますが，一方で診療にも責任をもたねばならない多忙なはずの臨床教室の教授として，どこまで皆様方の御期待に沿い得るかはなはだ心許なく存ずる次第で，所長就任の御挨拶を申し述べるにあたって，まず皆様方の格別の御指導と御協力を御願い申し上げる次第であります。30余年間カウンターの外側から専ら図書館を利用させて戴いて来た立場がここに逆転して，利用者各位にサービスを提供する責任を負うことになり戸惑いを感じております。ここで所長就任の抱負を述べよと言われてもはなはだ的外れな素人的意見を述べることになりそうですが，折角の機会ですから日頃考えていたことなど二，三申し述べてみようと思います。

医学に限らずどの専門分野でも研究者にとって文献調査は大変に重要な作業ですが，特に医学の分野では，文献量の驚異的な増大に対応しながら自分の研究分野に関連を持つ文献の全てに目を通してゆくことは並大抵の事でなくなってきました。日頃図書館で新旧の医学雑誌を書庫から運び出してはゼロックス・コピーをとる作業を続ける同僚・後輩の諸君の姿を見るにつけ，これら文献を一体どうやって整理・保存するのか人一倍ずぼらで怠け者の我が身を振り返って心配がつのります。このような“文献あさり”の作業は年々歳々その形を変えつつあり，手作業の検索は，コンピューターによる検索に移行しました。

近い将来にはさらにコンピューター化が進み，研究者ひとりひとりがコンピューター端末を持ち，研究室であるいは自宅で国内外のデータベースを呼び出して文献調査をする時代に入ることでしょう。そのような時代における医学情報センターの役割とは一体何であろうかを医学情報センターも，またその利用者も真面目に考え，具体的対応を計画すべき時期に来ていると思います。やがて図書館が蔵書数を誇り，膨大な書庫を中心としたものではなくなり，文献の保存と利用にマイクロフィシュを用いるか，高密度磁気記録あるいは光ディスクのような媒体を使うかは別として，研究者が文献調査を行なうにあたってはそれぞれが持つ端末を使い，ディスプレー画面で文献に目を通し，どうしても必要な文献に限ってハードコピーにする時代になることでしょう。

そのような新しい情報化時代の図書館の機能は“情報流通の合理化・効率化”の増進のためのサービス提供に焦点をおくことが必要になります。

具体例を挙げれば目的に応じた文献検索のためのソフトの作製，パーソナライズされた情報検索の手段の開発と提供，個人専門分野別の文献リスト・フロッピーの提供などがごく近い将来に実現・普及することは間違いないと信じます。コンピューターによる論文の日英または日独自動翻訳なども実用化一歩手前まで来ています。このように見ますと図書館のあるべき姿の変革はごく目前に迫っているようです。ここのところ塾内で三田・日吉キャンパスなどの情報センターの整備が進むにつけても医学情報センターの書庫の狭小がますます目立って，医学情報センター改築要望の声が大きくなりつつある昨今ですが，この際今後20年，30年先の医学情報センターのあるべき姿，医学の進歩に対応しながら最もアップデートなサービスを提供し得る医学情報センターは如何にあるべきかを根本的に考えた上で，医学情報センター改築の青写真を整える作業を進めなくてはならないというのが医学図書館に関する私の主張であります。

慶應義塾図書館遠山音楽文庫

中　野　博　司
（文学部教授・西洋音楽史専攻）

総合大学における最大規模の音楽資料

1985年4月1日，三田旧図書館の3階と4階に，西洋音楽にかんする30,000余点の資料を収集した遠山音楽文庫が創設された。資料の搬入が3月末であったにもかかわらず，予定通り開館にこぎつけたのは，三田情報センターの驚くべき機動力にほかならない。大江図書館長，田村学務理事，三雲文学部長を中心に，4月26日に旧図書館の小ホールで開かれた遠山音楽文庫開設記念パーティーの際には，文庫内のオーディオ装置も完備され，寄贈者の遠山音楽財団理事長遠山一行氏も，大いなる満足の意を示されたのである。

今回誕生した遠山音楽文庫に，1972年に文学部教授小泉仰氏から美学美術史学研究室に寄贈された小泉洽音楽文庫，さらに図書館および美学美術史研究室が収集した西洋音楽資料をくわえるとき，義塾図書館は，わが国の総合大学においては全く異例な，莫大な西洋音楽資料を保有する結果になったのである。

遠山音楽財団付属図書館

日本を代表する音楽評論家のひとりとして活躍される遠山一行氏は，わが国の西洋音楽研究を育成する目的から，1952年に私財を投じられて遠山音楽財団を設立された。同時に，財団の主要活動として，付属図書館を開設されたのである。館長に就任された遠山一行氏は，副館長としてふたりの音楽学者を任用された。ひとりは，義塾にも長年にわたって御出講いただいている中世・ルネッサンス音楽史の権威，立教大学教授皆川達夫氏。ひとりは，フランス現代音楽の権威であられるとともに，評論の分野でも活躍されている明治学院大学教授平島正朗氏。この3氏が描いた音楽図書館の収集計画は，当時としては正に画期的なものであった。私立図書館である以上，どこでも手に入る資料を集めてもしかたがない，がモットーとされた。当時のわが国でもっとも欠けている分野が，たまたま3氏の専攻と一致していたことも仕合せであった。したがって，中世・ルネッサンス，現代そして日本の洋楽が，資料収集の3本柱となった。この3分野にかんするかぎり，遠山音楽財団付属図書館の収集は，3人の専門家が選定しただけに，その充実度は特筆に値いする。

こうして，30年近くにわたって収集された遠山音楽財団付属図書館の資料のうち，今回，慶應義塾遠山音楽文庫として，遠山一行氏から寄贈された資料は，中世・ルネッサンス，および日本をのぞく現代にかんする西欧で作製出版された音楽図書，楽譜，レコード，マイクロフィルムのすべてである。

中世・ルネッサンスでは，マショーからモンテヴェルディにいたる当時の大作曲家達の校訂楽譜全集をはじめ，当時の理論書，現代における研究書が，ほとんどもれなく収集されている。なかでも，原典資料としての価値の高いファクシミリ版が多いのが特色である。

現代にかんしては，歴史的評価が一応さだまった19世紀末から1930年代にかけて誕生した作曲家達の資料が中心となっている。フランス系の作曲家達が多いのが特色だが，ヒンデミットやシマノフスキーの楽譜全集など，基本的な文献，楽譜が収集されている。

欧米各国の音楽学にかんする雑誌が完備していること，レコードがすべて外国盤であることも，遠山音楽文庫の特色である。また，恐らくわが国においては唯一の存在である1652年初版のメイボムの〈古代音楽の創始者〉などの稀覯書。一方，ベルリオーズやワーグナーの楽譜全集など，バロック，古典派，ロマン派にかんしても興味ぶかい資料が見られる。

遠山一行氏と慶應義塾

遠山氏と義塾との縁は，遠く第2次大戦直後にまでさかのぼる。若き日の遠山氏がはじめて教壇に立たれたのは，当時，三ノ橋にあった男子高であったというのである。翌年，東京芸術大学に移

られたために，期間はわずか一年間であったが，教室には現在日本の楽団を代表する音楽家の卵たちが並んでいたのである。作曲家の林光氏と小林亜星氏。そして，フルートの峰岸壮一氏など。なんと豪華なメンバー，とはいえないだろうか。遠山氏が塾風を愛されるようになられたのは，この時代からであったのかもしれない。

後年，三田の久保田万太郎講座で，現代音楽，そして日本の作曲家について遠山氏が二度にわたって行われた講座は，当時の学生達を湧かせたものであった。

そして，なによりも遠山氏が2人の令息を，幼稚舎から大学まで一環して義塾で学ばせたことは，遠山氏の愛塾精神を端的に物語っている。

慶應義塾に音楽学専攻を

しかし，遠山音楽財団付属図書館の中心をなす西洋音楽資料を，義塾への寄贈に踏み切られたのは，たんに遠山氏の愛塾精神のみによるものではない。遠山氏は，寄贈先を選定するにあたって，ふたつの条件を考えられたという。ひとつは，一般の音楽研究家も自由に閲覧できる開放的な機関であること。ひとつは，将来，音楽学専攻を開設できる可能性のある総合大学であること，であった。

この2点が，昨年の4月，遠山氏が三雲文学部長に，資料寄贈をはじめて申し出られた際の条件であった。現在の日本においては，音楽学研究は主に音楽大学の楽理科で行われているが，これは音楽学校が音楽大学になったわが国の特殊事情である，と遠山氏は語っていられる。現に，ヨーロッパにおいては音楽の実践は音楽学校で，音楽の学問的研究は総合大学で，というのが長年にわたる伝統である。勿論，音楽大学における音楽学研究は，多くの利点もあるが，同時に広い視野に立つ総合大学における音楽研究の必要性が叫ばれているのが，わが国の現状である。

義塾の文学部哲学科の美学美術史学専攻ならびに同大学院に，西洋音楽史のコースが開設されている事実は，一般にあまり知られていない。専任教授1名，兼任講師2名の小陣容で，創設以来わずか10数年の歴史だが，義塾はもとより他大学で教鞭をとるとともに，NHKをはじめ社会的にも活躍する3人の若き音楽学者をすでに輩出している。

三田情報センターの充実した資料収集と管理。美学美術史専攻の西洋音楽史コースの一層の充実と発展。そして，義塾における音楽学の振興を，遠山氏に御理解いただき，今回の慶應義塾図書館遠山音楽文庫ならびに遠山記念音楽研究基金が設置されたのである。

遠山音楽文庫の今後の課題

30,000余点にのぼる遠山音楽文庫の資料を，有意義にかつ能率的に使用し，着実に管理することは，三田情報センターと義塾で音楽学を学ぶ者の義務であろう。義塾における音楽資料のセンターとなる遠山音楽文庫においては，レファレンス文献の早急な完備が必須である。同時に，音楽資料専門のライブラリアンの文庫事務室における常駐，および後任者の育成が望まれる。欧米の総合大学の音楽研究所図書館の資料収集は，ライブラリアンの能力に左右され，研究者の研究の能率化には，ライブラリアンの協力が大きな役割を演じている。

現在，三田地区における音楽資料は，遠山音楽文庫，小泉文庫，図書館および美学美術史学研究室の4箇所に分散されている。全資料を同一箇所に配置するのは無理としても，三田における全資料のカードを作製し，遠山音楽文庫内に配置できないものであろうか。中世・ルネッサンスおよび現代にかんして，現時点では充実した収集がなされている遠山音楽文庫を，未来においても生きた文庫とするために，今後も資料の購入が行われることが，なんらかの方法で必要であろう。

ミュージック・ライブラリアン

平尾行蔵

欧米の図書館巡りをしてみると，一般閲覧室の他にいくつかの独立した特別閲覧室があるのが目につく。たとえばそれは，手写本，初期刊本，地図，東洋学関係資料等のための部屋であるが，それらと並んで必ずといってよいほど音楽資料のための部屋がある。そこでは音楽特有の資料である楽譜を中心として音楽書や，最近ではレコード等も，閲覧に供されている。今日普通目にする五線記譜法による楽譜は17世紀以来のものであるが音の高さとともに長さをも表現しうる記譜法が確立されたのは13世紀中頃である。活字印刷術に遅れることおよそ半世紀の1501年に始まった楽譜印刷は，五線記譜法がそれから百年余の後に成熟するに至って今日とほぼ同じ姿の楽譜を世に送るようになった。音楽資料室は，500年程の歴史をもつ印刷楽譜と1,000年の昔から存在する手書楽譜を第一義的な収集対象とし，学問研究のために設けられているのである。

日本の公共図書館や大学図書館でも最近は視聴覚資料室の整備に力が注がれていて，音楽を愉しもうとする利用者の要求が満たされつつある。しかしそれは，活字と紙以外の手段による記録媒体（コンパクト・ディスク，レコード，ヴィデオ等）の扱いには特別の配慮が必要であった結果にすぎず，もともと音楽資料のために構想された部屋ではなさそうである。彼我の図書館における音楽資料室ないし視聴覚資料室の成立の事情は，現象面での相似にもかかわらず，音楽の側から観ると大いに異なっている。それには，社会における音楽の存在態様，音楽の芸術としての自律性，音楽を書き記す行為が持つ意味等々の相違が歴史的背景としてあるだろう。

資料と施設だけではない。人的にも違いは大きい。欧米の学術図書館は，人文・社会・自然諸科学の専門家にして図書館員である人達（学術図書館員）の集団指導体制で運営されている。そこには管理者と実務担当者の乖離はない。学術図書館員―司書―司書補―事務員等という職制は図書館職員の階層的養成制度と相俟って社会的に認知されている。音楽部門の運営責任者（music librarian）もこの例に洩れず，音楽学を修めたのち図書館員としての養成を受けた主題専門家（subject specialist）である。医学と法律そして音楽の３分野は図書館学の中で独立した分野を成しているとは西洋ではよく言われることだが，音楽資料特に楽譜の整理には音楽学的素養を必要とするという認識の，制度上の表現をここに見ることができる。

翻って日本の現状をみるとどうであろうか。いわゆる洋楽であれ，日本古来の伝統（芸能の）音楽であれ，音楽の図書館が，総合図書館の中で，市民権を与えられ一つの部門を形成しているとはいえない。むしろ専門図書館として別の世界を作っている。これらの施設で働く職員には，ごく稀な個人的例外を除いて，主題専門家はいない。

三田情報センターでは，今年３月遠山音楽図書館から寄贈を受けた楽譜・音楽書・音楽雑誌・レコード等約３万点のコレクションを，「遠山音楽文庫」として４月から公開している。詳しくは別稿を参照して戴きたいが，総合大学が有する音楽資料としては我が国に類例を見ない大きな規模であるのもさることながら，中世・ルネサンス・現代という音楽史上の３つの時代に重点を置いた個性的かつ充実したコレクションとして価値は高い。

人のこと，資料のこと，施設のこと，いずれをとってみても一朝一夕に変革は難しい。小生は義塾に勤務してまだ４ケ月の新参者であるが，比較的恵まれた条件にある本塾で，これをきっかけとして音楽部門の拡充が，様々な意味で，実現できればと希望している。

（三田情報センター整理課）

三田情報センターにおける教員の選書行動

上　田　修　一
（文学部助教授　図書館・情報学専攻）
会　田　真由美
（杏林大学医学部図書館　塾員）

1. はじめに

大学図書館における資料選択の重要性については，改めて述べるまでもない。図書館により資料の選定者の主体は，(1)図書館長，(2)図書館長，図書館員，研究者の合議，(3)研究者の三種類に大きく分かれる[1]。研究用資料は，一般に研究者すなわち大学教員によって選書されている。各分野の専門家である研究者が主として選書することについては，十分な妥当性があるといえる。しかしながら，教員がどのような情報を得て，どのような選書行動をとっているのかについては，客観的な資料は乏しい。今回，慶應義塾大学三田情報センターの選書状況と選定者である教員の意見を調べたので報告する。

2. 慶大三田における選書の状況

慶大三田情報センターの1984年度の資料購入費は，約5.9億円であるが，その46%である約2.7億円が学部図書費で，これは全て教員によって選書されている。三田全体の専任教員数は，約320名であるから教員一人当り85万円の図書費である。なお，この他に各教員に割当てられている特別図書費がある。学部図書費支出の協議機関として各学部毎に図書委員会が設けられている。学部ごとに資料の選定方法は異なっているし，支出のシステムも異なると考えられる。例えば，文学部では文学部図書費を各専攻に配分しているが，配分された図書費を図書館予算に拠出している専攻もある。（図書館予算の中から選書，購入するので，こうしても支障は無く，予算の一元化という面では望ましい方向である）

学部ごとに資料の選定方法は異なるとはいえ，情報センターのとっている見計らいによる選書方式は共通である。情報センターの選書課の棚に，契約書店の見計らい図書が配架されておりここから選書する方式をとっている。これは選定者に対する図書館側からの情報提供とも考えられる。

情報センターでは教員からの図書の購入希望は原則として全て満たすという方針をとっており，どの予算を用いるのかという点について，教員は一般には特別図書費，学部図書費，図書館予算の順で支出すると考えられている。

情報センターと教員との選書に関する情報交換は前述の見計らいを除けば乏しいと言える。一方，書店側の教員に対する情報提供活動は活発である。三田情報センターの契約している洋書取次，書店の担当者に対してのインタビューによると，全教員の少なくとも半数には，これらの取次，書店からの選書用の資料が配布されており，各販売員は，各教員の関心領域をよく把握している。特によく選書する教員に対しては，特定分野の速報や高額図書のリストがわたされており，訪問回数も多い。慶大の教員を含む主要大学の主要研究者の関心領域をデータベース化している洋書取次も存在する。

以上のような状況下で行なわれる選書について，次のような構図を描くことができよう。すなわち，(1)熱心に選書する教員は少数である，(2)その結果として選書結果には，偏りが生じる可能性がある，(3)こうしたよく選書している教員に対しては，書店から出版情報等を豊富に与えられている，(4)一方，選書をあまりしない教員は，与えられる情報は少なく，その結果ますます選書の機会を逸する。

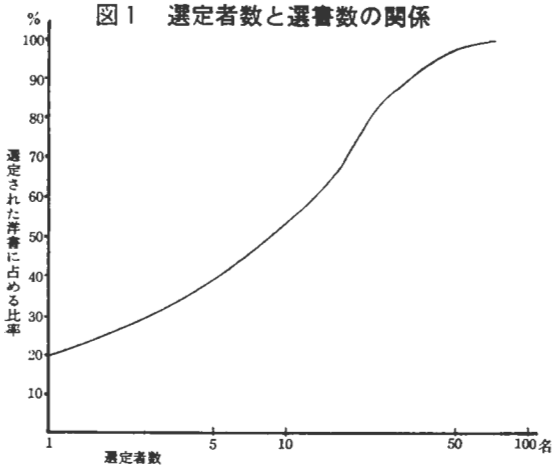
以上は他大学図書館でも同様であろうし，また経験的にもよく知られていることである。ここでは，いくつかの調査をもとに特に(1)と(2)を裏付けたい。

3. 選書結果からみた選書傾向

最初に果して選書が少数の教員によって行なわれているかどうかを調べてみる。これは，教員が見計らい図書を選定した際に図書にはさみこむス

リップ（「収書メモ」と呼ばれている）および付されている仮納品書から，選定者名，研究室図書主題番号，書店コード，価格，出版年などのデータを得て調査した。研究室図書主題番号とは，各学部図書予算で購入する際に付される番号であるが，選定者が付与する配架場所を示す分類標数（研究室番号）と三田情報センターが与える一連番号とからなっており，この研究室図書主題番号によって図書館内に配架される。調査対象は，昭和59年4月から5月までの間に選書された1,013冊である。その結果は，図1に示すように全体の7割の図書が全専任教員の12%にすぎない40名によって選書されていた。特に上位5名で4割近くの図書が選定されている。

図1　選定者数と選書数の関係



もちろん学部，学科，専攻によって選定者があらかじめ定まっていることもありうる。そこで研究室図書主題番号の分類の分布も調べた。これは図2に示す。研究室図書主題番号の総数は，約600種類であり，ここで対象としている洋書は，ほぼその半数であるが，実際に与えられた番号は75種類にすぎずやはり偏りがみられる。

4.　教員の選書行動と意見

三田の4学部所属の全専任教員に対し調査票を配布し選書の状況と選書に関する意見を尋ねた。調査対象者数は270名で，85名（31.5%）から回答を得た。

1）　年間選定冊数

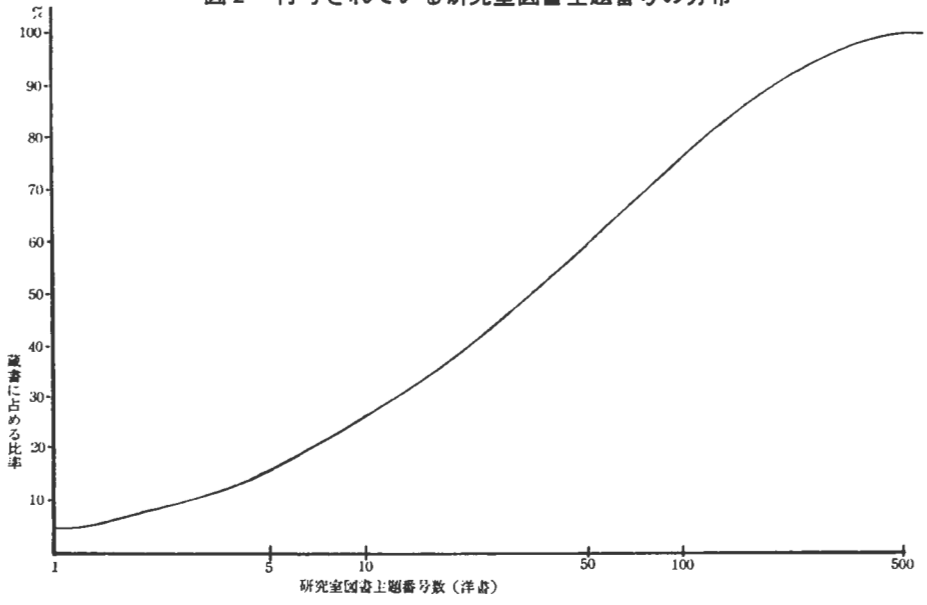
表1に学部予算と図書館予算にわけた年間図書

表1　予算別年間図書選定冊数

（数字は回答教員数）

	10冊未満	10～49冊	50～99冊	100冊以上
学　部	11(15.7%)	18(25.7%)	17(24.3%)	24(34.2%)
図書館	27(39.7%)	18(26.5%)	10(14.7%)	13(19.1%)

図2　付与されている研究室図書主題番号の分布



選定冊数別の教員数を示した。学部予算では半数は10冊以上100冊程度まで選書しており，1/3は100冊以上，5名（7.1%）は，400冊以上選書している。

図書館予算の選書冊数は全般に学部予算より少ないが，400冊以上選書している教員は4名（6.8%）存在する。

2） 購入希望図書の購入状況の印象

情報センター側では，教員からの購入希望図書は，全て購入していると述べているが，教員の印象では63.1%（50名）は，「ほぼ購入されている」と答えているものの，30名（35.7%）は，「半分程度は購入されている」としかみていない。ここでは行なっていないが，情報センターは，このギャップの原因の究明を行なう必要があろう。

また，図書館に必要とする図書がどれほど所蔵されているかについてもその印象を尋ねたが，「ほぼ所蔵されている」と答えたのは，23名（27.0%）にすぎず，大多数の教員（58名（68.2%））は「所蔵するものとしないものとその主題などで異なる」と認識しており，「ほとんど所蔵されていない」とするものも4名（4.7%）存在する。ただしこれは研究用図書の場合であり教育用としては，8割以上の教員（70名（82.3%））が，「図書館の蔵書は受持ちの学生をほぼ満足させている」と回答している。学生の意見は徴してはいない。

3） 見計らい方式につていの意見

情報センターの選書システムの主体である見計らい方式が教員の間でどの程度知られており，利用されているかを調べた。まず見計らいによる選書がそれほど多くはない63名の調査結果は，次のようになった。

	あ　り	な　し
見計らいによる選書経験	55(87.3%)	8(12.7%)
収書メモの知識	50(90.9%)	5(9.1%)

この結果から見計らい方式の認知度はかなり高いといえる。しかし実際の選書で見計らいと注文のどちらが多いかを尋ねてみたところ，見計らいの方が多いというのは8名（14.8%）にすぎず，大多数（46名（85.2%））は注文が主であった。よく選書する教員22名の中でも「見計らいが多い」としているのは，7名とほぼ1/3にすぎない。こうした教員の中でも見計らい方式を強く支持しているのは2名にすぎず，多く（15名（68.1%））は併用を望んでいる。つまり見計らいはよく知られているにもかかわらずそれだけで十分とは考えられていない。むしろ注文方式が主体であり，注文の情報源として有力なものは，書店の配布するアナウンスメントである[2)]。

見計らいに対する意見（自由記入）としては，(1)見計らいの図書は偏っている，書店側の固定観念や営業政策に左右されている，網羅性に乏しい，(2)自分の研究分野が特殊である，(3)書店のアナウンスメントから直接注文するほうがたやすい，(4)図書館に行くのが億劫である，などがあった。

教員の選書の情報源として情報センターが提供するものより書店の提供するもののほうが利用されている。

5. おわりに

予期されたように三田情報センターの教員による選書結果には偏りがみられる。熱心に選書する教員はごく一部であり，その結果としての蔵書構成にも偏りが存在する。バランスのとれた蔵書構成という観点からは問題があるといえる。これはたやすく解決しうる課題ではない。特に教員の選書行動が一朝一夕に変わるものとは考えられない。

従って，情報センターに，教員の側の選書行動をよく理解しそれを支援し，補う努力が求められよう。少なくとも教員に対する現状の情報提供のひとつである見計らい方式は，十分な支持が得られていないと認められる。この方式の認知度は高いのでＰＲが足りないわけではない。教員からは，偏りが多いなどの見計らいのもつ問題点が強く指摘されている。これを補うには，書店のとっている方策に匹敵する網羅的な書誌情報提供と情報センターと教員とのより密接な接触手段とが必要となる。しかし，こうした手段をとったとしても教員が実際にとっている選書行動からみて，選

書結果が一部の主題に集中することは避けられない。バランスのとれた蔵書構成をめざすのであれば，これを補う方向で情報センター側が積極的な選書活動をおこなうことが求められる。

三田情報センターの場合，他大学に比べて図書予算やスタッフの面で高い水準にあることは確かである。しかし学術図書館の評価は，環境条件よりも蔵書の内容と質とによってなされることは自明である。情報センターの資源を生かし，さらによりよい蔵書構成をめざすことが望まれる。

本調査のために便宜をおはかり下さった研究・教育情報センターの渋川雅俊氏，三田情報センター選書課，整理課の方々，および調査表にご回答いただいた方々に御協力を感謝申し上げます。

1) 高鳥正夫："大学図書館の運営"，東京，勁草書房，1985，193 p.

2) 会田真由美："大学図書館における教員の選書" Library and Information Science, No. 23 投稿中.

貸出しの機械化（三田情報センター）

閲覧業務機械化の準備が着々と進められています。昨年の夏，図書館のクーラーの故障というアクシデントにみまわれながら暑い書庫の中で行なわれた Book-ID 貼付，カウンター業務の間を縫ってのプログラミングの為の業務分析，新刊書の Book-ID と請求記号の入力等と除々に進み現在，Book-ID 貼付の事故処理とソフト面での最終的な詰めの段階に来ています。但し，旧図書館にある旧分類図書については，機械化後除々に Book-ID の貼付を行なう予定です。

機械化後，次の様にカウンターでの手続きが変わります。利用者はまず新館1階のメイン・カウンターで現在配布中の図書利用券を入手して下さい。貸出手続は，借出したい図書と図書利用券を貸出カウンターに提示し，係員が図書の Book-ID と図書利用券の User-ID をこする事で完了します。貸出票や貸出券に記入する手間が省ける事になります。返却手続もメイン・カウンターに図書のみを提示し係員が Book-ID をこする事で手続が完了します。延滞図書については，機械化後も一日一冊につき10円の延滞料を頂く点は現在と変わりません。貸出・返却の他に，予約・継続・問合せ等も，Book-ID，User-ID あるいは請求記号を入力する事で簡単に手続や調査を行なえる様になります。

以上の様に機械化する事で多くの利点が生じます。と同時にいくつかの注意しなければならない点も生じてきます。学生の場合は，現在使用している貸出券がなくなる点です。貸出券を所持していれば，自分がどの請求記号の図書を借りているか，又何冊借りているかが一目で分かるが，機械化後は貸出した現物からか，カウンターで問合せをしなければそれらの情報は得られなくなります。教職員の場合は，貸出冊数制限を機械が管理する点です。貸出冊数が30冊を越えると"貸出冊数超過"というメッセージがカウンターの端末に表示されます。又，図書を貸出す為には必ず図書利用券が必要になるので注意して下さい。紛失した場合は速やかにカウンターに届け出て下さい。

貸出業務の機械化を行なった図書館のほとんどが貸出冊数の倍増を報告しています。三田情報センターも例外でないとすれば，貸出冊数の延びと同様に返却本も多くなり，貸出票のファイリング，抜き取りという仕事がなくなっても図書配架の仕事量が増えると予想されます。閲覧業務の機械化をひとつの手段とし，業務の質の変化とともに本来の目的であるサービスの質の向上を目指して行きたい。（閲覧課）

新しい高等学校図書室（日吉）のサービス

斎　藤　憲一郎
（高等学校図書室係主任）

1.　新しい図書室

新しい高等学校図書室（日吉）は，慶應義塾創立125年記念事業の一環として，昭和59年３月に，鉄筋コンクリート造りの特別教室棟Ｂ棟の２階に創られた。閲覧室，書庫スペース合わせて約750 m^2 の広さを持ち，両サイドのガラス窓の採光も十分な，明るく広々とした図書室である。床のカーペットも新鮮だ。フロアには，両面開架方式を採用した書架が向って左側に，その窓側には美術書や写真集等の大型本が別置され，一番手前には，文庫本コーナーがあって，最も人気のある書棚の１つになっている。中央には通路があり，雑誌書架が並んでいる。右側は閲覧室，それを囲むように，参考図書が主題ごとに並んでいる。木彫の大きな熊が窓側にドシッと座っている。貸出カウンター，レファレンスは，向って右，閲覧室と向い合っている。ここには，毎月の新刊案内である図書室だよりや購入希望図書の申込用紙，そして，レファレンス質問票が置かれてある。入口には，著者，書名，件名のいずれからもアクセス出来る，それぞれの閲覧目録がある。

図書館（室）は，しかしながら，建物ばかりでなく，そのサービスが図書館（室）への道を豊かにすることに気づいている。

装いも新たになったこの機会に，図書室のサービス活動について紹介し，高等学校における情報センターとしての図書室やメディア・センターについて考える一助としたい。

2.　一貫教育

高等学校は，慶應義塾の一貫教育の一環として昭和23年に設立され，以来，伝統と共に義塾において中核的な役割を果すべく塾風を育んで来ている。

緑多い日吉のキャンパスには，大学の教養課程の学部学生がいて，研究，教育情報センターの１つである日吉情報センターがある。丘を隔てて矢上台には，専門課程としての理工学部があり，図書館は，理工学情報センターがある。

この環境の中で図書室はその図書館サービスを考えることが出来る。

むろん，この様な教育環境を有効なサービスとして活用，提供するためには，資料の収集，受入，整理等の着実な，確かな蓄積がなされていなくてはならない。近年における目録，台帳等の整備の着実な進展がある。

図書館の利用の技術は，緩かに，そして漸進的に成長するものであるなら，生徒たちの図書館経験は継続的な過程に早くから置かれていた方がよい。

この継続性の中に，サービスの豊かさをどれだけ盛り込むことが出来るかが，単に１つの部屋があるというだけか，学校の中で，「生気に満ちて躍動している」[1]図書館を現出できるかのポイントになる。

3.　生徒に対するサービス活動

現在，図書室は大学を含めた塾内の図書館，情報センターの中で，和書だけを取り上げて見れば，その受入れ，整理，利用に供するという整理業務において最も早く図書を閲覧に供している。10月に刊行された図書は10月に利用出来る。新刊案内も手書きながら毎月刊行している，参考図書の利用案内を載せながら。高等学校の蔵書規模としても全国有数のものを持っている。いわば最も合目的的に機能していると言える。ここに情報サービスの機能が付加される必要がある。

情報サービスは幾多の歴史的な発展をみながらその標準化をはかって来た。書誌解題の累積，ネットワークの発達等々。文献の相互貸借の発達はめざましい。この標準化の図書室への移行，導入である。この相互運営可能性（Inter-operability）を持つこと，展開することがサービスに豊かさを添える。

高等学校における教育，研究分野は，国語，社

会から理科，数学，芸術，そして体育までとても幅広い。文学からコンピュータまで，考古学から宇宙まで，と多岐にわたっている。専門が違うという理由で問い合せを断り得ない。

データは，まだ客観的に何かを示し得るほどに量的に蓄積されてはいないけれども，レファレンス質問票に書いてもらうことから始まった問い合せも少しの蓄積をみせた。いくつか挙げてみよう。

インターフェロンについて調べたい，
○○○○○という名前の由来，
自由の女神の台座に書いてある詩の翻訳，
ホロンについて調べたい，
中世ヨーロッパの都市の人口，
モン・サン・ミッシェル修道院の図版，資料，
日本の海岸の地形，
お地蔵さんについて書いてある本，等々。

自身ですでに調べてあって，それ以上のことを求めて来るケースや授業の課題の１つであったりする。参考図書の利用を促すことや生徒たちの研究・調査の習慣を助長することを越えてしまうことも多々。

特徴的なのは，時に示す，その使い方のエネルギーのすごさ。夏休み明け，宿題と共に，嵐の如く，そして参考図書の書架はみごとに〈レッセフェール〉。全生徒2,500人が図書室に来たのではと思える程の，暑い夏の，休み明けの冷房のきいた図書室での出来事。

また，幼稚舎から図書室に関心を持っていた生徒たちがライブラリークラブを創って，図書室の案内，掲示の作成を手伝ったり，県下の高等学校図書室の実態調査を行ったり，日吉祭での古本市を企画したりしている。彼らとの会話が，図書室にフィードバックされたらと思っている。

4. 教育・研究に対するサービス

文献取り寄せの例から，教育・研究に対するサービスの一端をかいま見てみよう。

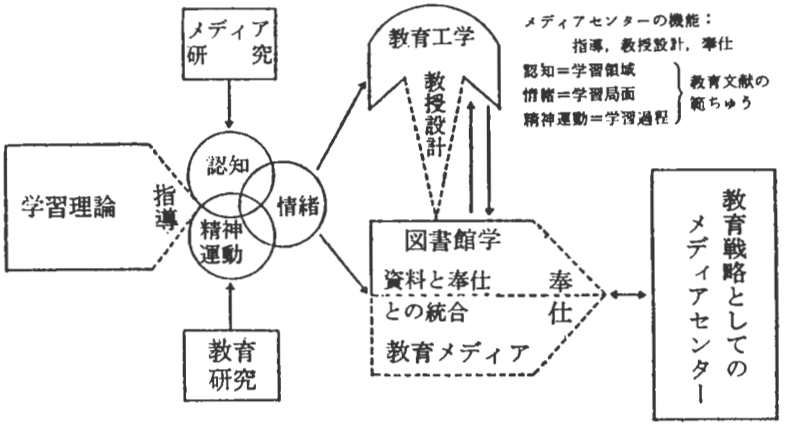
データは昨年６月以降１年分である。

利用者の幅が少し拡がって来た。国語関係の資料はほとんど塾内でまかなうことが出来る一方，生物，特に昆虫関係の文献の入手はかなり国際性を帯びて来る。ソビエトのレーニン図書館やアメリカの議会図書館にまで及んでいる。国内では，医学情報センターと共に，東京大学や九州大学の農学部に依存している。

文献取り寄せ数（利用者別）—1984.6～1985.6

	国語	社会	生物	体育	合計
塾内	56— 0	1— 3	2— 1	0— 0	59— 4
国内	6— 0	1— 0	1— 9	2— 0	10— 9
国外	0— 0	0— 0	3— 5	0— 0	3— 5
合計	62— 0	2— 3	6—15	2— 0	72—18

（注）数字左側……1984.6～1985.3
数字右側……1985.4～6



出典：長倉美恵子，世界の学校図書館，全国学校図書館協議会，1984，p.36.

5. メディア・センターについて

ここで参考までに欧米において発達して来たメディア・センターについて触れておこう。

視聴覚教材，資料の発展と共に，学校図書館は様々な媒体を総合的に扱うマルチ・メディアのセンターとして考えられている。概念図があるので示してみよう。

6. もっと school librarianship

図書室は，そのサービスの成長，発展に恵まれた教育環境を生かした相互運用可能性（Interoperability）という1つのキーワードを見い出せた。カレント・アウエアネスとしてのトピックスの切り抜きファイルの展示，年1回のオンライン情報検索の紹介も加わった。塾高刊行物の目録も作成中。

先日は，筑波大学の研究者から『以前』1950年に掲載された論文記事への文献コピー依頼があった。図書室と若き研究者との交流に想いを馳せる。

今年卒業していった生徒たちの何人かが，色紙を置いて行った。寄せ書きなのだけれども，真中に〈常連〉と書いてある。

世代は，それを引き継ぐだろうか。異った何かを用意しているのだろうか。

図書室は，インターオペラビリティにプラスアルファが必要だろう。是非ご協力を。

引　用　文　献

1) Fargo, L. F.: 学校の図書館，阪本一郎他訳，牧書店，昭和32年，p.12.

スライドによるオリエンテーションの実施とアンケート集計結果

（三田情報センター利用案内検討会）

今年の4，5月にかけて，スライドによるオリエンテーションを初めて実施し，同時にアンケートを行った。利用案内検討会は約1年をかけて，ニーズ・アセスメント，絵コンテ作成，撮影，ナレーション・BGMの録音等の作業を終え，時間帯を決め，自由参加方式で42回上映を行った。参加者は，僅か237名「含む教職員36名」であったが，その内135名がアンケートに協力してくれ，貴重な意見，感想を得ることができた。

感想と内容の修正材料の収集を目的としたアンケートでは，1)内容〔上映時間，ナレーション，難易度〕（選択肢），2)分かりにくかった点，要望，3)感想，4)今後の内容と方法（選択肢）を中心内容とした。

まず，内容の内，上映時間については，8割以上の参加者が「普通」と答え，時間としては，15～20分が適当であろう。ナレーションについても，「わかりやすい」，「普通」と回答したのが，97%を占めていた。難易度は，「普通」が48.9%，「やさしい」が47.4%であった。

わかりにくかった点，要望については，88名が記入し，図書館の構造，目録，雑誌，文献探索，レファレンス関係，AV資料など多岐に渡っていた。とりわけ，目立った回答は図書館の構造についてであった。サービス・フロアが10層であるため，スライドの説明だけでは，分からないのかもしれない。画面上に文字を入れたり，館内におけるサインの工夫が必要であろう。更に目録についても「わかりにくい」が集中した。分類目録，NDCについては，スペシフィック版のスライドが必要と思われる。また要望では，今回触れなかった文献目録の使い方に対する要望も多かった。

次に，感想については129件の記入があり，「出て良かった」，「有意義」，「分かりやすい」というのが大半を占め，その外にオリエンテーションの実施とPRの必要性，更に登場人物についても述べられていた。

最後に，今後の方法についてはツアーを最も要望し，次にウォークマンであった。内容はレファレンス・ブックの紹介，カード目録の順であった。

以上のアンケートでは，今回のスライドを一応評価しているものの，専門課程のある三田では，図書館の概略より文献探索を中心にした内容を学生は希望していると思われる。今後，当検討会はAV資料を用い，一般学生に，或は現在行っているゼミ単位のツアーの補助手段として，効率のよい利用方法を提供して行きたいと考えている。来年度は，ビデオ，ウォークマンなどを用いて「方法の多様化」を計るとともに，更にニーズに応じて「内容の多様化」を計って行く予定である。

福澤展と義塾図書館の資料

田　中　正　之
（三田情報センター
特殊資料担当課長）

昨昭和59年秋から本年4月にかけて，生誕百五十年記念と銘打って「福澤諭吉展」が三越を会場に東京・大阪・横浜と三度三ケ所に於ておこなわれた。義塾主催の福澤展は過去半世紀，大きなものだけでも数度に及ぶ。近いところでは昭和39年に福澤全集完成を記念して行なわれたもので，会場はやはり三越で，微かな記憶によればかなり大がかりなものであった。今回のそれは前回を上廻る大規模なもので，全塾に渉り展覧会委員が選ばれ，足掛け二年前から準備・検討がなされた。

今回の福澤展はその副題テーマで“黒船来航から独立自尊”と示したように，福澤諭吉生涯の足跡を，世界史の中で大きく揺れ動いた時代の日本と共に捉えた。日本近代文明の先駆者と世に言われるところの福澤の，では如何にしてその時代のうねりの中でそれを認識し，受け止め，自ら体験し思想形成し，且つ実践していったかを示す事が，今回の福澤展の大きな眼目であった。より具体的には，福澤の，洋学を学び，欧米を見聞した直接体験による思想形成から，日本の近代化に向った実践活動の局面であり，更に，その実践活動の成果として育てられた人材・門弟たちの業績紹介を加えて，も一つの大きな柱とした。

実行に当っては各分野での識者，研究者が実行委員として選ばれたが，資料取扱いの実務者の一員として，図書館資料取扱いの窓口の意味で情報センターから白石と私の二人が実行委員に加えられた。一応組織上は白石は福澤先生直接関係の第一部会，私は門弟・福澤山脈の人々に関する第二部会に属したが，実際には二人協力して情報センター一本の窓口の仕事をした。我々の仕事は主として，夫々の分野を分担担当した各委員が“これこれに関する資料が図書館にないだろうか”と言ってくるのを聞き，それに応じ調査して，必要なものを図書館資料から引出し展覧会に資料提供することであった。

ひとくちに展覧会の資料と言っても，義塾がやる福澤諭吉展で，しかも今回はその弟子人脈の業績にまで展示が及ぶとなると，少しばかりの資料で事が足りるというわけにはいかない。資料は，北は北海道から南は沖縄まで，全国各地に資料蒐集の網は張り巡らされたが，当然のこと乍ら地元慶應義塾所蔵の資料がその骨子となったのは言うまでもない。展覧会の資料は，なにも文字に書き現わされたものばかりと限ったものではないが，その大部分には何らかの形で文字が書かれ，然してそれらのものは，いずれも図書館が管理保管義務を負わされるところの資料である。義塾では，福澤関係資料は，塾史資料室が発展改称した福澤研究センターが，当然その多くを所蔵するが，図書館本館（慶應義塾図書館）もまた，過去の長い歴史から，多くの貴重な資料を質量とも，福澤研究センターに劣らぬくらいに所蔵している。殊に書物ともなれば，福澤研究センター或いはその前身の塾史資料室といえども，発足は比較的新しいので，福澤先生将来本をはじめとする洋書，先生著作かずかずの由緒ある版本，あるいは稿本写本類の多くを含めた，この展覧会に関係ある資料の書物が，わが義塾図書館には多数所蔵されているのは当然のことである。

今回展覧会に出された資料については，立派な図録も出されたことであり，学者研究者でもない私が，今更個々の資料の解題めいたことを述べてもはじまらないのでそれは措くとして，唯，今回の福澤展展示に携わった者の一員，そして図書館資料通過窓口者の報告のつもりで，その主要なもののいくつかを列挙し紹介してみようと思う。

展覧会の順をおって，先づ生い立ち，中津の項では，“「上諭条例」箱入”がある。先生誕生の日に父百助が大阪で入手したもの。諭吉という名はこれによって付けられたという有名なもので，福澤展には欠かせない資料である。

次に，“先生自筆草稿「中津留別之書」”。これは，先生が明治3年中津の一家を纏めて東京に引移る際，自ら認められたものと言われている。

次いで蘭学関係では，ご存知“「ターフェルアナトミア」原本”及び“「重訂解体新書」（福澤書込本）”「蘭語訳筌」，“版本「蘭学事始」明治２年”。いずれも中高学校教科書にも出て来るような本であまりにも有名である。

次に『黒船ショックと西欧体験』部門に入ると，「横浜御開地明細之図」「ペリー日本遠征記」「咸臨丸難航図」“ブルック船長書入「庚申米利堅航海針路図」”「咸臨丸航路図一伴鉄太郎筆」「伴鉄太郎ノート」。“木村摂津守日記「奉使米利堅紀行」「長崎伝習関係日記」”。「米国フェニモアクーパー号水彩画」「ホノルル王カメガヤ自画紋章」。“「増訂華英通語」（佐野常民本）”。“遣米使節派遣瓦版「亜墨利加国御上使御名前」”“遣米使節関係絵入「レズリー米新聞」”「オランダ政府発行日本使節名簿」「同鋳造記念メダル」などなど枚挙にいとまがない。

再に，福澤塾鉄砲洲から芝新銭座，三田へと義塾の流れをたどってその周辺の資料に目を向けると，先づ特記第一に掲げるべきは，「福澤塾入門帳文久３年～慶應４年」（別名「姓名録無罫紙本」）である。姓名録と称するものはこの無罫紙本に続き，一，二，三，四，五・六，と明治７年12月迄の分計６冊を数える。これは更に明治８年から「入社帳」と改称され，その七から二十九（明治34年11月）までと続く。別に，「医学所入門帳」「法律学校入社帳」「大阪入社録」「徳島入社録」等もある。入社帳（姓名録）は，塾史資料室の手によって「第一」「第二」「第三」及び「第四索引」が復刻された。

更に図書館提供の主な資料を列挙すると，図面類では「東京築地鉄砲洲居留地之図」「芝新銭座地図（尾張屋版江戸切絵図芝愛宕下図）「東京市坊細見図明治10年」「明治八・九年頃慶應義塾全図」。そして，「芝新銭座慶應義塾之記」，かの有名な，上野の砲声の中で講じたと言われる「ウェーランド経済書」，「慶應義塾学業勤惰表」「慶應義塾社中之約束」「慶應義塾改革之議案（明治９年草稿）」「慶應義塾紀事（先生草稿）」，“先生筆「慶應義塾之目的」原本”「三田演説会関係記録類」などがある。

最後に先生著訳書及び原拠本として，「兵士懐中便覧」「日本地図草紙」「掌中万国一覧」「徳育如何」「士人処世論」「通俗外交論」「西洋事情」“Tytler, Alexander Fraser : Elements of general history, ancient and modern, Edinb. & Lond., 1866” “Brande, William J. J. & Cox, George W. : A dictionary of science, literature and art, 2 vol. Lond. 1865-67” “Mill, John Stuart : Utilitalianism, 5th ed. Lond., 1874” “Schalk, Emile : Summary of the art of war, 2nd ed. phil., 1863” などの書物が，今回の福澤展に図書館本の中から展示された。

以上掲げたこれらの資料は，今回の福澤展を飾った義塾図書館資料の中のほんの一部に過ぎない。他に，先生筆蹟，書翰類，更にはピラミッド型に門下の人々の膨大な業績を顕す数々の資料をあげていったらきりがないので割愛するが，展覧会を無事終った今日，今更乍らつくづく思うことは，あまりにもわかりきったことだけれど，塾祖福澤諭吉の，そのはかり知れぬ偉大さであった。

三田の新館，この3年間の変化

中　島　紘　一
（三田情報センター閲覧課長）

開館して4年目に入った三田の新図書館は，この間，不馴れから生ずる困乱や動揺，単純なミス，施設やサービスや図書の配置に対する不満や非難，賞讃や激励など，新しいものにはつきものの一通りの試練を体験し，これに応えるための試行錯誤を繰り返して，どうやら安定の軌道に乗ったようである。

そこで，一段落したと思われるこの機会に開館から現在までの新館の歩みをたどり，事態に対応する具対的な方策として施設面やサービス面においてどのような改善や変更が行われたのかを概観してみたい。

◇施設上の改善

建築は先ず何よりもその中で人間が特定の活動を円滑に行うことを保証する内容でなければならない。機能を重視し，デザインを尊重することはともにその目的に沿うものであるが，両者のバランスがくずれると活動の円滑性が阻害されることがある。開館して間もなく，その具体例ではないかと思われる苦情がいくつか寄せられたのである。

その第一は照明が暗いというクレームであった。特に目録ホールの照明はひときわ暗く，最下段のひき出しのカードになると，目が落ちた後はもう読み取るのに骨がおれた。また1階の書架の一部，3階，4階の事務室と書架の一部は完全に照度不足で，作業や閲覧にも支障が生ずる程の暗さだった。この原因はデザイン上の観点から，もっぱらシャンデリアとダウンライトに照明を依存しようとした方針にあったものと思われる。

そこで，昭和58年3月から4月にかけて照明の改善工事が行われ，目録ホールにはスポットライト4基が新設された。またその他の照度不足の場所にはダウンライトの増設と，可能な所には螢光灯の新設とが行われた。これらの工事によって照明の不備は概ね改善されたものとみられるが，では目録ホールは十分に明るくなったのかといえば，必ずしも「イエス」とはいいきれないところになお問題が残されている。

次に指摘されたのはサインの分かりにくさであった。サインとは本来案内標識であり，これによって内部の機能を簡潔・明快に表示し，人を効率よく導くものでなければならない。新図書館のサインシステムは「目立たないようにその機能を果たすこと」という基本方針に基づいたため，サイン本来の目的よりも，デザイン機能を重視する方向に偏る結果になってしまったといわれても仕方がない。

サインが分かり難いというクレームは，文字が小さ過ぎる，標示方法に難がある，標示場所が分からない，必要な場所に必要な標示がない，などの内訳の総称である。これに対しては，もはややり直すことのできない部分が多く，結局必要なサインを逐一追加するという形での改善が図られることになった。昭和58年の4月に目録ホールや3階，4階を中心にこのための追加工事が行われた。この時，風除室の外扉と内扉のそれぞれの両側に取り付けられたガラスの仕切りにも，目の高さの位置に模様を入れることを忘れなかった。このガラスは素通しのためその模様がないと開いている通路と間違える危険性が高いからである。現に開館して1年も経たない間に，ここを通路と思い込んだ学生がガラスと正面衝突し，これを割る事故が3回も発生したのである。その意味でこの模様は貴重なサインの役割を果たしている。

またピカピカに磨き上げられた石を敷きつめた正面入口周辺の床も開館後ただちに問題になった。雨が降るとツルツルにすべり易くなり，見ている目の前で何人もの学生がすべって転倒したからである。幸い，どのケースも怪我には至らなかったが，急いで対策を立てる必要から，床石にミゾを堀る工事を行ってスベリ止めの防止が図られた。その結果，床石は当初の光沢を失って景観は著しく損なわれたが，これは安全対策上やむを得ぬ選択であったろう。

閲覧事務室に鍵付きのアコーディオンカーテンを取り付けた（58年３月）のは，メインカウンターが閉まる午後６時以降しばしば事務室が無人になる無防備な状態に対応するためであった。本来この位置にはドアが必要であったのだが，設計の段階ではそれに気が付かなかったため，後から追加せざるを得なかったのである。同じことは強い西日を受けてからその必要性に気付いて取り付けた受付カウンターのブラインドについてもいえる。

新築の建物に関連する不備，手違い等の改善の経過は大体以上の通りである。これらは開館後，概ね１～２年の間に対策の手が打たれ，それなりに問題は解決されている。けれども，より多くの利用者を収容し，より多くの図書を収納するための施設・設備上の改善・工夫という面は，新館がこれから継続的に取り組まねばならない課題の一つである。４階の総合資料室のキャレル10台の増設（59～60年度），１階レファレンスルームの低書架12連の増設（59年度）などはその努力の具体例である。

◇サービス面における対応

新館のサービスが始まって最初に手直しを迫られたのは資料の配置場所であった。その対象は原寸大の製本新聞と和装本で，ともに地下４階の集密書架に収まったばかりであった。製本新聞は「雑誌・資料類はすべて新館にまとめる」という方針によって各所から集められたものである。しかし，その形態，重量，ボリュームなどが集密書架への収納には全く不適当であることがわかり，方針の変更を余儀なくされたのである。また，和装本は一部が閉架の書架に，一部が開架の書架に分断配架されたため，これでは利用に不便であるとして関係者から強く改善を求められたのである。このため，昭和57年の７月下旬に書庫移動を開始し，製本新聞は旧館の第３書庫地下２階に，和装本は新聞を運び出した後の集密書架にその全てを展開する再配置の作業が行われ，同年の９月にその全てが完了した。

この間，まだ残っていた研究室図書の個室収容分を新館に移転する作業も行われ，教育学関係，東洋史関係，言文研関係の図書などが他の研究室図書と共に地下３階に収容された。

こうして研究室図書が学生の目にふれる位置に展開されると，その利用，特に館外貸出しの可否が問題になってくる。開館と同時に学生に対する貸出しを行ったのはそれ以前に学部の合意を得ていた文学部，商学部，法学部政治学科の図書に限られていた。経済学部と法学部法律学科の図書については，まだ実施の合意が得られていなかったので，これを待った結果，間もなくして得られ，昭和57年７月からこれらの図書も学生は館外で利用できるようになった。

なお，新館開館と同時に実施することになっていながら未だに実行されていないものがひとつある。それは返却期限を超過した図書について，延滞金を徴収する対象者の範囲に教職員を含めるという取り決めである。この方針は新図書館のソフトウェアを検討する特別委員会で決定され，昭和57年４月から実施することになっていたものだが，主としてその実行部署である閲覧課の準備が整わないため，まだ手がつけられていない。今後実行するとすれば，その前に改めて学内のコンセンサス作りが必要となろう。1981年のＫＵＬＩＣ15号（p.1～2）で予告されたこの取り決めは以下の通りである。

「……教職員が返還を遅延した場合には，２週間の期限内に返却するか更新の手続きをとるかを催告し，なお返還がされなかった時は，貸出停止または延滞金の徴収のいずれかの罰則を適用する。」

◇学外利用者について

学外利用者の扱いについては今なお試行錯誤の過程にある。旧館時代，一般社会人（学生は大学生以上）は10円を払えば誰でも自由に入館できた。慶應義塾図書館の一般公開サービスとして知られていたもので，この制度は，特に，思想統制が厳しく，図書館も未整備だった時代にはそれなりに特徴があり，社会に貢献したものと思われる。最近は事情が大きく変っており，旧館時代の

10円入館者もその大部分が施設だけの利用者で，図書館の図書・資料の利用とは無関係であった。

居住性が飛躍的に改善された新館でこの制度をそのまま継続すると，その傾向に拍車がかかり，学生や教職員の利用に支障をきたす恐れがあった。そこで新館開館時から料金を10円から100円に改め，入館する時にはその利用目的を確認する方式に変えたのである。国家試験の受験勉強の場所として新館を利用しようとする外来者はその入館を断わり，図書館のもつ図書・資料を利用する人には利用の便宜を保証することをこれによって意図しているわけである。

この場合，大学生の入館に対しては一定の歯止めをかける必要があった。これがないとレポートや卒論などの執筆の際，必要な文献を自分の大学図書館に依存しないで，新館にくる学生が増えるのではないか，という心配があったからである。このため，大学生は100円入館者の対象から外し，来館する場合は紹介状の持参を義務づけた。紹介状は，通常自館にない図書・資料の利用をそれをもつ他館に依頼する時に発行されるものである。目下のところ，他大学生の利用はこの紹介状によって適正な範囲に落ち着いている。

以上の外に，他大学の研究者などが学内の研究者と共同研究を行う場合などに発行される特別利用券というものがあった。この券は新館以降もそのままの形で継続された。しかし教職員の紹介があれば無制限に発行されるという手軽さと総合資料室が自由に利用できるという便利さとが受けて開館後申込者が急増し，席数の少ない総合資料室の利用に徐々に影響が出はじめるまでになった。そこでこの制度についても再検討が要請され，有料制を原則とする一般入館券に変った（58年7月）。一般入館券を申請できる人は他大学等の研究者（大学院生は除く）で，学内の専任者の推薦を得ることが必要とされている。一般入館券という名称は塾員入館券のそれに対置するものである。

塾員入館券については昭和59年4月からその料金が100円から500円に改定され，発券の窓口が塾員課から閲覧課に変っている。

小展示ニュース

昭和59年

10月27日～12月20日（新聞コーナー棚展示）
84年度ノーベル賞（文学経済学）と蔵書

11月1日～11月9日
新一万円札発行記念展示

11月12日～11月19日
東洋史，前嶋信次先生著作展示

12月3日～60年2月1日
高橋誠一郎浮世絵コレクション　広重東海道五十三次の内　日本橋，品川　展示

昭和60年

1月8日～1月18日
生誕150周年記念福澤諭吉関係の本展示

3月12日～5月18日
万国博の歴史展示

5月21日～6月3日
最近出版された教育関係図書―臨教審―

5月20日～6月3日
Original leaves from famous English books

6月4日～7月4日
西欧の book binding の歴史

7月7日～10月25日
「魚菜文庫目録」刊行記念小展示

10月26日～
「尾張屋版江戸切絵図」刊行記念小展示

第5回国際医学図書館会議の開催

大沢　充
（医学情報センター副所長）

第5回国際医学図書館会議が本年9月30日から10月4日までの間，市ケ谷の日本大学会館を会場として開催される。国際医学図書館会議（International Congress on Medical Librarianship）は医学分野の図書館・情報に関する現代的課題を国際的視野から論究する学術集会であり，すでに第1回（1953年）はロンドン，第2回（1963年）はワシントン，第3回（1969年）はアムステルダム，第4回（1980年）はベルグラードの各地で開催され多くの成果を収めてきた。

医学の発展は膨大な量の情報とその的確な利用を基盤としている。特に現代における研究活動は広く関連諸科学の成果を積極的に採り入れて急速に高度な専門分化を遂げつつある。このため現代の医学図書館に求められる第一は，世界的規模で急増する医学情報に対処するために緊密な国際協力関係を維持することである。また第二はますます多様化し特殊化する情報需要に対して，迅速で的確な対応を果すために図書館担当者の知識・技能の向上を促進することである。

第5回会議は，このような要請にこたえて日本医学図書館協会と国際図書館連盟（ＩＦＬＡ）生物医学図書館部会との共同主催で行なわれる。会議のテーマは「医学図書館――ひとつの世界：資源，協力，サービス」である。このテーマのもとに世界38ケ国から寄せられた124編の論文が発表され，慶應からも以下の5編の発表が行なわれる。

Y. Amano: International Cooperation in Biomedical Information Services in Japan.

K. Goto: The Development of Medical Terminology in Japan.

A. Matsui, K. Kato and T. Miyazaki: Document Delivery Capabilites for Medical Grey Literature in Japan; A Case Study.

K. Saito: Synoptic Journal.

M. Watanabe: Computerized Systems in Japanese Health Sciences Libraries.

第5回会議の特色は，テーマが示すように過去30年にわたって取り上げられてきた医学図書館活動の基本的な問題を継続して討議するばかりでなく，医学情報を世界的視野で共有し合おうという現代的課題に取り組むために，特に第三世界の人々の参加を強く促進している点にある。このためこれらの人々に対する参加費用提供の努力が日本組織委員会をはじめWHO，米国国立医学図書館などの機関により強力に進められ，これによる参加者が70余名に及んでいる。なお，これらの人々を含めて参加者総数は8月末日現在で43カ国，466名に達しており，最終的には500名を超えることが予想されている。

医学情報センターは，前所長の嶋井和世先生が日本医学図書館協会の会長であられた関係からこの会議開催のための事務局を引受け，2年有余の間この準備作業を進めてきた。その間，全国の医学図書館関係の方々からの好意ある励しに支えられ，特に国際医学情報センターを始めとする関東地区の医学図書館の方々の強力なバックアップによって漸く予定通りの開催に至ったものである。

いずれにしろ，この会議の日本における開催は，わが国の医学図書館界の長年にわたる願望の実現であり，同時に国際的レベルにおいて，わが国の医学図書館活動やその能力に対する認識をあらたにする絶好の機会である。またこのような国際会議に積極的に参加して得た経験は，医学情報センターの今後における国際化時代の図書館としての幅広い柔軟な活動の展開に，極めて大きな意義を持つものとなるであろう。

統計資料の新しいメディアについて
——利用者の立場から——

浜　田　裕一郎
（経済学部助教授）

昨年夏，Statistical Analysis System (SAS) という強力な資料解析のパッケージが，慶應義塾にも導入・設置されました。情報処理の技術は，ハードウェア，ソフトウェアの両面で急速に発展しつつあります。例えばこのＳＡＳの利点の一つは，プログラミング言語について全く無知の私にすら，複雑・多様な計算処理を容易に許すことです。分業の偉大な成果のお蔭で，私たちは分析の目的である処理結果の吟味に，時間と努力を集中することができるようになりました。

さてこのＳＡＳのオプション・パッケージの一つに計量経済学向けのＳＡＳ/ＥＴＳがあり，そのプロシージャーの中に Citibase と Compustat があります。この手続きを使うと，簡単な命令一つで，Citibase や Standard & Poor's の経済，金融，企業情報に関する膨大なデータ・ベースに容易にアクセスできます。ＳＡＳに直接リンクされているわけではありませんが，「データを整理・統合し，電子計算機による検索を行いうる形態にした集合体」であるデータ・ベースは，昭和59年度の通産省データ・ベース台帳に拠れば，1,242ほどあります。ニュース，法律，政治，行政などの一般分野が181，自然科学，技術に関するもの459，経営・経済以外の社会科学・人文科学の分野では117，経営・経済の分野では466，地理などその他のものが19です。この大半は，電話回線などの通信ケーブルを使った直接的，即時的な利用のできる，オンライン・データベースですが，ハードコピー，磁気テープ，フロッピー・ディスクなどで利用可能なものもあります。

この台帳に収録された資料は，少なくとも私の専攻分野である経済学に関する限り，どの研究においても必要とされる基礎的，一般的な性格のものであり，また大量かつ詳細なものです。例えば，先の Citibase や Compustat を始めとして，日経Needs，工業統計表，鉱工業関連各種指数，産業連関表各表，商業統計表，家計調査，労働力調査，またＯＥＣＤ諸データベース，米国ＢＬＳのデータベースなどです。こうしたデータベースがその威力を最も強力に発揮するのは，恐らく金融市場の分析においてでしょう。時は金なり，情報は金なりの分野ですから，情報の集積とその迅速かつ効率的な利用が強く要請されるのは，企業の立場からは当然のことです。独自のデータベースと，一般に購入可能な外部のデータベースを，端末機を通して活用する人々の姿は，いわゆる高度情報社会のスナップショットです。一方金儲けと縁の薄い研究者にとっても，このデータベースは知識と発見の宝庫です。またこうしたデータベースへのアクセスなしには研究すら困難になりつつあるというのが現状です。一例を挙げれば，為替率や株価の決定に関して，年次でも月次でも週次でもなく，一回の内の時間ごとの動きを対象とする統計的分析すら現われています。この類のデータを手入力から始めて分析しようとすることは，賢い研究者のとるはずもありません。

ところがこれに類した不合理な事態は，我国のリサーチ・センターと称される高等教育・研究機関においてしばしば観察されます。すなわち先述したような基礎的，一般的な性格の資料についても，書籍というハードコピーから，個々の研究者が今日博物館的遺物と呼ばれるカードパンチによって逐一入力しているという光景はまれではありません。時間と努力の莫大な浪費です。

勿論，民間企業や官庁に比べ，高等教育・研究機関は情報処理の迅速化と効率化とを，その費用に見合うほどに必要とはしていないのかも知れません。この点については後に立ち帰ることにして，分析に必要とされる資料が，オンラインのデータベースほど利用者の範囲が広くはないものの，それほど少数の研究者集団にのみ限定されるわけではなく，しかも膨大かつ詳細である場合があります。多くの医療関連のデータがこのカテゴリーに入ると思われますが，私の分野では米国の Current Population Survey や National Longi-

tudinal Survey，また我国の就業構造基本統計調査あるいは賃金構造基本統計調査などの，いわゆるマイクロ（個票）データです。利用の制限されている場合も多々ありますが，磁気テープとして一般の利用が可能なものも少なくありません。

ハードコピーからオンラインのデータベースや磁気テープ，フロッピー・ディスクへの資料形態の変化は，情報処理技術の発展の成果を享受する際に残されていた入力段階での困難を解消するための工夫です。研究・教育活動においても無視し得ない経済性の観点を別にしても，こうした工夫と発明を高等教育・研究機関が十分に活用すべき理由があります。先ず一見タコツボ状態にあると見られる学問の状況において，各専門分野での進展は理論と実証の両面での研究の深化と，それを支える両者の相互作用の経緯であるという，あたりまえの事実を確認しておくべきでしょう。この事実が建前だけでなく，実情であることは，例えば経済学の領域において，先述のようなデータベースへの需要が強まった理由とその恩恵とを見れば明らかです。理由として三点ほど挙げることができます。第一にマクロ計量モデルの大型化です。第二には時系列分析の応用と開発の進展，そして第三に集計量に基く分析の限界が次第に明確になってきたことと，マイクロ・データの開発です。一方その恩恵については，第一と第二の点において近年多くの議論を呼んだ「合理的期待形成」の理論が産まれ，経済運営の標準的な論拠であったケインズ経済学の再検討と，マクロ経済分析の新たな理論的展開を促したことを，先ず挙げることができます。またこの展開の中では，個別の経済主体の行動の分析が改めて重視されましたが，このいわゆるミクロ分析の接近法に対して実に豊かな試験場を，第三のマイクロ・データは提供しています。そしてこのことは当然ながら，特にミクロ動学の分野での理論の拡充という新たな要請をもたらしました。このように過去十数年の学問の進捗が，先述したような情報の蓄積と処理技術の発展の一つの成果であったことは，疑う余地もありません。時代の要請の変化という事情があるとしても，最近の我国の学術論文や専門書の筆者に，こうした発展の恩恵に浴することの多い，企業や官庁のエコノミストが増えて来ていることは，その証左の一つであると思われます。

研究に限らず教育の場面においても，この新しいテクノロジーには，特に財政上，学生・教員比率の改善に限界のあるといわれる私立大学にとって，積極的に活用すべき利点が多々あると思われます。例えば最近の統計学の教科書には，具体的な数値例を使う数多くの演習問題を収めたものが，目立ちます。こうした演習問題用の資料をデータベースとして集積し，学生に広く利用可能なものとすることは，学習意欲の刺激と理解の確認を通して，教育効率を大きく向上させると考えます。統計学ばかりでなく，文科系学部のその他の授業においても，シミュレーションや文献・資料の検索などの演習を通してより密度の濃い教育サービスの提供を可能にすると期待できます。こうした直接的な効果以上に，教育場面での情報社会への具体的な接触は，それに対する批判も含めて，新しい知性の構築にとって必要条件ですらあると思われます。

ハードコピーから，磁気テープ，フロッピー・ディスク，そしてオンライン・データベースへと資料形態は，情報処理技術の革新に伴って急速に変化してきています。書籍の発行点数の絶対数での増加にもかかわらず，研究・教育における書籍以外のメディアの比率と重要性は今後とも拡大し続けこそすれ縮小することは決っしてないでしょう。このことは書籍の重要性を決っして損うものではありませんが，研究・教育機関の中枢機能が「図書」館から「情報センター」へと継承されるものであるならば，努力は単なる「機械化」にとどまることはできません。図書館学にも情報科学にも素人の一利用者として新たなメディアへの積極的な対応を期待します。

頭痛の種“テクニカル・レポート”

落合啓一

利用者から「この文献が手に入らないだろうか？」ともちかけられたとき，そこに，何やら整理番号のようなものがふってあり，それが，“AD-****”とか“DOE-****”のように，比較的見慣れた番号である場合はまだ良いのですが，見たこともないような番号付けだったり“Rsearch Report of University ****”あるいは“Technical Report of **** Laboratory”だったりしますと，見たとたんに思わず頭が痛くなることがあります。この頭痛の種になりやすいテクニカル・レポートは，理工学情報センターが扱う（所蔵はありません）科学技術情報の分野では，機械工学，電気・電子工学，航空・宇宙工学，原子力工学（Pure Science よりも Applied Science, Little Science よりも Big Science）に関するものに多いようです。ちなみに“Hand Book of Special Librarianship and Information Work”には“米国における研究成果の約20%がレポートの形で現われている。例えば，原子力分野であるとか航空宇宙学などは他の分野よりもずっと多くのものがレポートとして出版されている。”とあります。

Auger が“Use of Report Literature”の Preface でレポート文献の範囲は十分に定義されておらず，その十分定義されていない様々な範囲の中で相当量の出版点数があり，多様な特徴がある。そして，レポート文献の統制と最善の利用法は常時改訂されている。といっているように，テクニカル・レポートの扱いには一般に書誌コントロールが十分になされていない物が多いようです。それは，テクニカル・レポートは一般に，出版・流通を意識されておらず，またページ数の制限もなく，フォーマットも自由な形式のものが多いからともいわれています。

さて，実際に，これらのテクニカル・レポートめらを探すこととあいなった場合ですが，“有名ブランド物（ＰＢ・ＡＤレポート等）”なら，まずは国立国会図書館かあるいは日本科学技術情報センターに所蔵があるはずなのですが，そうでない物は多少ともやっかいなことになる場合があります。まずそういう場合は米国で受け入れられ整理された物であることを期待することになります。米国で扱われれば，かなりの高い確率で，テクニカル・レポートのクリアリング・センターであるＮＴＩＳに受け入れられており，“Government Reports Announcement and Index (GRA & I)”を見れば（レポートの書誌情報の一部さえ分かれば何とか検索できることから最近ではオンラインで検索することも多くなりました）何か情報が得られるはずです。そこで喜ばしい場合は何やら訳のわからない番号のテクニカル・レポートがＰＢレポートかＡＤレポートの形で処理されている場合です。しかし，年代の古い物についての探索は絶望的な作業になります。(GRA & I は冊子体では1968年以前の索引がなく，オンラインファイルも1964年までしか遡及していません）また，ＮＴＩＳや，ＮＡＳＡあるいはＤＯＥといった米国の情報機関で扱っていないものもその探索は苦労させられることになります。そういう場合はそのレポートの発行機関がわかれば，直接に請求することになりますが，相手先が分からない時は“How to Get It”や“Directory of Report Series Code”で調べることになりますが，うまくいくとは限りません。そういえば，以前ある米国の大学の図書館にその大学のレポートの寄贈を依頼したところ，その返信に，送られてきたお目当てのレポートとともに送り状があり，それには“Report Librarian ****”といったサインがありました。それを見て「なるほど，テクニカル・レポート専任の図書館員を置くということは米国でも苦労しているのだな」と感じた次第です。

科学技術情報をめぐる近年の情勢からすると，今後もテクニカル・レポートの重要性は増大することになるでしょうし，また会議録やペーパーといった他の Gray Literature もそうなるでしょう。更には電子出版などどいうものも現われて頭痛の種が益々増えそうな今日このごろであります。

（理工学情報センター情報サービス担当）

指定出版社制度による一括購入方式
—昭和59年納品率調査結果—

田　中　芙美子
（日吉情報センター副所長付
前三田情報センター選書課課長代理）

I　はじめに

三田情報センターでは，学術的価値の高い国内新刊書の網羅的収集を目標としている。これは，図書館利用者への当然のサービスを配慮していることはいうまでもないが，同時に，わが国における知的所産の一つである書物を後世のために蓄積・保管するという本来，図書館が基本的にもつ社会的・文化的使命の故でもある。

この方針に基づき，われわれは学術書の収集に種々な方法で努力を重ねて来た。昭和56年には，この意図が確実に実行に移され，効果的に収集が行われているかどうかを確認するために幾つかの調査を行った。その結果，当センターでは，和書の新刊学術書購入に業者の協力をえて昭和57年夏から“指定出版社制度による一括購入方式”を導入することにした。システム全体の総点検のため納品率の調査を行い，その分析，改善点をのべ，当センター和書購入上の統計的総点検を行った。さらにこのシステム導入の目的が果されたかシステム全体の見直しを行った。最後に米国におけるアプルーヴァル・プランの現状，国内の受入自動システムの動向にふれた。

II　“指定出版社による一括購入方式”導入の背景

a）遡及的所蔵調査・補充

図書の収集・購入には“注文”と“見計い”の二方式がある。当センターでは，従来，国内新刊学術書の収集は特定の出入り業者による見計い納品図書にかなり依存していた。昭和57年，収書課は，この方式による納品量・質，選定方法に疑問を抱き，大学生のための基本図書及び新刊学術書について大規模な遡及的所蔵調査を行った[1),2)]。この結果，各々69主題，約4,500点中，408点を，10年分の学術書4,000点の補充を行った。（これは学部には所蔵しているが図書館には所蔵していないものを含んでいる）

b）選定方法の改善

三田情報センターでは，前述二つの調査結果を重大に受けとめ，以後，より主体的な収集を計ることを目指した。折から，昭和57年4月には，新図書館を開館し，この機に，より組織化された一層充実したコレクション・ビルディングを志向しはじめた。従来，収書課が行って来た“収集，選

表1
見計いの仕組

見　計　い	選書架特定見計い書架				
見計い図書タイプ	S書房	大学生協	C出版	特定主題の出版	臨時訪問
1. 指定出版社（一般）	◎	△			
2. 同　上（大学）		◎			
3. 一般見計い	○	○			
4. 同　上*（これから出る本チェック分）	○				
5. 地方出版・小出版もの			○		
6. 特定言語・主題など				○	
7. その他（臨時持込みなど）					○

◎印　指定扱い
△印　取扱い業者外も入れる（学部・個人研究費購入となる）

注　文

1. 各種新刊案内・図書目録など
2. ウィークリィ出版情報*

* 館内選定有資格者が回覧（1～1.5カ月）し，選定を行う。
注　教員による選定……教員による“見計い”“注文”は，図書館への“推薦”という形式をとり，館員選定と同じ重複調査など，一定の調整後決定する。

定，発注，受入”業務から選書業務を重視すべく“選書課”を独立させた。同時に，注文・見計い方式の改善を実施した。

① 公開の常設見計い棚を新図書館選書課事務室内に設置，随時，選定可能とする。

② 納品業者，とくに和新刊学術書取扱い業者を複数とし，これにより納品量，質，納入の迅速化などを自由競争で行うことにする。他の特殊主題業者数なども増加した。

③ 主要2社の納入日を交替に定期的に定め，2週間展示後，全点入れ替えし，その他は原則として1カ月展示とする。

④ 選定者の増加を行い最終調整を選書課担当とする。(見計い棚選定と⑤)

⑤ 選定用ツゥールとして“これから出る本”“ウィークリー出版情報”を用い④の全回覧選定方式とする。指定37社はチェック対象外とする。

⑥ 図書選定委員会は，予算申請・管理・調整，高額図書の選定，逐次刊行物選定など検討，調整を行う場とし，一般選定は随時個別に行う。

Ⅲ “指定出版社による一括購入方式”の導入

当センターでは，この数年の図書予算の安定を前提として人文・社会科学系の国内新刊学術書の網羅的収集を目指して，“指定出版社による一括購入制度”の導入を行うことにした。

1. 導入の目的

① 和書新刊学術書の人文・社会科学系の網羅的収集を目指し，とくに指定した出版社の学術書をモレなく収集するため

② システム導入による省力化

a）出版情報の収集による選定業務の省略

b）“これから出る本”“ウィークリー出版情報”選定作業から指定出版社の刊行物を除く

c）業者の選定ほか注文手続きの簡略化

2. “指定出版社による一括購入方式”とは

これは，出版流通業者（出版者，取次店，出入り業者）の協力を得て，当センターで指定した出版社の新刊書をあらかじめ定められた主題など条件内で出版と同時に一冊納品する。当センターでは，これらを確定注文品として扱い，原則として返品せず，条件にかなえば購入するというものである。発足当初の詳細は文献2)に詳しいので省略する。

このシステムは一年に一度，契約がえを行えるように計画してある。

3. 指定出版社の推移

表2に指定出版社の推移を示した。

表2 指定出版社の推移

時期＼扱い業者	S書房扱	大学生協書籍部扱	計
第Ⅰ期	昭和57年8月 24社（含，4大学出版部）		24
第Ⅱ期	昭和58年10月 6社追加		30
第Ⅲ期	4大学出版部を扱い移行→	→11大学出版部	37
	26社	11大学	37

（注）

第Ⅰ期 24社は，前出“三色旗”による学生基本図書調査結果および，“出版年鑑”による出版点数調査などによる全主題にわたる一般，学術出版社。

第Ⅱ期 6社は，学部図書委員会および選書課推薦により，限定された主題の学術出版社をテストケースとして加えてみた。

第Ⅲ期 大学出版部を加えることとし，取扱い対象を移行した。全14大学の内，主題及びレベル上の配慮から東京電機大学，産業能率大学を除き，さらに，全面寄贈を受けることを条件としている“慶應通信”を除いた。

4. 出版流通上の受入経路—26社

表3参照。なお，大学出版物は，当センターが大学出版部協会と契約し各大学出版部が，慶應義塾大学生協書籍部へ納品する。

Ⅳ 調査：指定出版社9社の納入状況・出版点数など

1） 目的——三田情報センターで，所蔵すべき図書と判断した新刊学術図書が，このシステムの導入により確実に収集されたかを確認し，システ

表3　新刊書の出版流通上の受入経路—26社

Aタイプ：各一冊契約
S書房⟷各出版社

1. 白桃書房*
2. 国元書房*
3. 御茶の水書房
4. 桜楓社*
5. 成文堂*
6. 創文社
7. 大明堂*
8. 吉川弘文堂

（計8社　31%）

Bタイプ：各一冊，配本棚へ入れる
S書房←—栗田ブックセンター

1. 筑摩書房
2. 白水社
3. 平凡社
4. 角川書店
5. 研究社
6. 紀伊国屋
7. みすず書房
8. 三省堂
9. 新潮社
10. 大修館
11. 東洋経済新報社
12. 有斐閣

（計12社　46%）

Cタイプ：その都度，一冊ごとに発注する
S書房—→各出版社へ

1. 岩波書店
2. 弘文堂
3. 未来社*
4. 理想社
5. 青林書院
6. 商事法務研究会

（計6社　23%）

*印　第Ⅱ期指定出版社
□印　納品調査対象にした出版社

ムを評価し，改善するため。

2）対象とした出版社—①Aタイプ……御茶の水書房，吉川弘文館，Bタイプ……筑摩書房，紀伊国屋，みすず書房，大修館，有斐閣，Cタイプ……岩波書店，未来社（各タイプ毎に主題に一般性，専門性のある出版社で，かつ出版目録の明確なものがある出版社②大学出版部協会所属の11大学出版部（表2の注および表4参照）

3）対象とした新刊書—昭和59年1月から12月までに前記9社が刊行した新刊学術書のうち，当センターの指定した条件によるもの。

4）調査方法——①9社

表4　指定出版社9社の納入状況—調査結果—

昭和60年2月調べ

受入タイプ	出版社	所蔵調査 アリ	所蔵調査 ナシ	ⓐ計*(100%)	ⓑ継続図書*	ⓐ+ⓑ合計*	昭59総出版点数
A	御茶の水書房	24	5 (17%)	29	1	30	32
	吉川弘文館	22	4 (15%)	26	29	55	64
B	紀伊国屋	10	3 (23%)	13	0	13	18
	みすず書房	35	6 (13%)	41	5	46	62
	大修館	15	0 (0%)	15	11	26	48
	筑摩書房	18	5 (23%)	23	20	43	213
	有斐閣	52	2 (4%)	54	152	206	238
C	岩波	66	5 (7%)	71	6	77	433
	未来社	38	1 (3%)	39	0	39	78
	計	280 (90%)	31** (10%)	311 (100%)	224	535	1,186
	比率	(52%)	(6%)	(58%)	(42%)	(100%) (100%) (45%)	(100%)

* ⓐⓑ……当センターで所蔵すべきと判断した点数
** 所蔵調査の結果ナシについては，3月見計い後受入済
総出版点数は出版年鑑による。

表5　11大学出版部の納入状況—調査結果—

昭和60年2月調べ

大学出版部	所蔵調査		入れるべき計	出版点数	備考（除外対象となった主な主題）
	アリ	ナシ			
北海道	4	1	5	11	
玉川	3	0	3	30	教育，生物
中央	8	1	9	9	
東海	8	1	9	40	物理，生物
東京	81	5	86	213	生物など
法政	29	1	30	58	
明星	3	0	3	5	
早稲田	17	0	17	33	
名古屋	0	7*	7	13	*他業者先納＋寄贈
関西	0	2*	2	2	*他業者先納
九州	15	0	15	19	
計	168 (90%)	18 (10%)	186 (100%) (43%)	433 (100%)	

↓

*を除くと9（5%）となる。

数字は単行本のほか継続図書を含んでいる。

の発行した昭和59年新刊リストの内，当センターで必要と認めた学術図書が図書館用に受入れられているかを，選書課のテンポラリーファイル（注文票，見計い受入れ図書の書名順簡略ファイル）によって確認を行う。（表4）　②大学出版部協会発行，昭和59年新刊図書リストによる（大学生協書籍部が納品記録によってチェックしたリストを①と同様にチェック）（表5）

V　調査結果——納品率／受入冊数／全出版点数

1.　納品率

上記の方法による調査の結果，当センターに所蔵すべきであると判断した9社の学術書311点の内，所蔵しているのは280点（90%），所蔵なしは31点（10%）となった。一方，継続中の図書と単行書を合わせた535点から見ると31点は6%となった。

また，11大学出版部の新刊書中，当センターに入れるべきと思われる186冊中，所蔵しているのは168点（90%），ナシは18点（10%）であった。ナシの内，9件はすでに他の業者から受入済，および寄贈をうけたもので，納品はしたが重複となり“返本”となった。従って実際の納品率は95%，収集側としての最終モレは9件（5%）であった。（指定出版社の納品は，納品タイミング上，第一番であることを前提としているので調整は行っていない。）

2.　所蔵モレの原因分析

業者側の問題として　①純粋に学術図書であるにもかかわらず不注意によるモレ　②学術書か一般書か慶應で入れるか判断が困難なもの（例．市民13660号　A．御茶の水書房…戦時下，米国日本人収容所生活スケッチ集，生命のシンフォニー　B．紀伊国屋）

逆に“返本”となる理由は，センター側の判断では　①主題範囲，内容，雑誌扱いなど契約時指定した条件と異る場合，②業者側判断と見解が異る，③納品タイミングの遅れ（殆んどない）であった。

納品モレの事後処理については，全点，見計いによるチェック後，補充した。不注意によモレは注意を喚起し，返本となったセンターと業者間に判断のズレが生じる可能性あるものは，むしろセンター側の判断にまかせるため納入するよう打合せている。つまり第一次選定を契約時にこちらの条件で業者が代行し，納品時に現物を見て図書館が最終判断を行えることこそが，このシステムの強味である。

3.　出版流通上の受入経路A/B/Cタイプ（表4）

Aタイプ—各出版社のS書房への納品率が期待よりはるかに低い。Bタイプ—栗田経由の納品モレは0%～23%，各社の出版点数の大小で精粗が出るという結果は現われていない。Cタイプ—S

書房一点毎の注文ものは健闘しているといえよう。

4. 全指定出版社の出版点数における学術書受入点数

		出版点数	受入点数	
合計	37 社	3,465	960	28%
内訳 指定一般	9社	1,186	311	26%
〃	16社	1,846	(479)	(26%)
指定大学	11社	433	170	39%

( ) 内数字は同率での推定

"出版年鑑" によると，昭和59年出版点数は，32,357点であるから，上記37社3,465点は，10.6%をこえている。(昭55調査時9.8%)

しかし，当センターで所蔵すべき数との差が大きいのは ①学術書ではない，②主題範囲が異る③年鑑・逐次刊行物で，当方で "雑誌扱い" として，所蔵しており，この場合の対象外となる一などの理由による。以上，調査結果の納品率分析，出版点数などにより当システムの出版流通上の指定出版社関連データによる実態をのべた。

VI 考 察一導入目的の達成・指定出版社による一括購入方式全体の見直し

上記の調査結果から果してこのシステムの導入目的は達成されたかを検討し，次にシステム全体の見直すべき問題点について考察した。

1. 導入の目的は果されたか

上記の調査結果，および，3年近くの同システム運用の経験から当初の目的は果されたかを点検してみよう。

a) 納品率…モレなく収集すること。結果として納品率90%。不注意によるモレ5%を0%にすることは不可能だが，より少くすることは可能である。又，返本率もきわめて少いといえる。なお，現在，刊行と同時にルーティン化した "三色旗" 昭和56～59年，30主題1,832件の所蔵調査においても，一般的主題は平均85～90%の所蔵率を示し，"履修案内" の調査もほぼ同様となり，基本図書及び新刊学術書の所蔵率は安定しつつあることを示している。

b) 省力化について，Ⅲ-1①～②による当初の目的をチェックしてみると①選定業務の省力化は実際には条件外の図書を廃除する作業となり，例えば1/10が廃除(9/10は受入)指定外の一般書は，全点熱心な内容チェックの上，選定図書は最高5/10～最低2/10，平均3/10，その他の特殊主題は1/10の比率となる。

つまり，指定ものはその他の約1/3の労力ですむ，この点は，業者にとっては効率の良い販売ルートを獲得していることになる。要するに，このシステムの選定は①契約時の各出版社毎の明細な条件付けに従って業者がピックアップし，納品時の当センターの第2次チェック労力を軽減していることになり，条件の適切な設定により目標を達成していることになる。

c) 回覧チェックによる情報誌2誌のチェック数は39社を除くことにより通常の選定であれば100件を越す注文が30点内外となっている。指定出版社を除外する繁雑さを嫌う選定者もあろうが，最終的に選書課担当者が検収し，責任をもっている。

d) 手続き上の業務量の省力化では，指定ものは，ⓐカタログ収集，書評チェックによる選定，ⓑ業者の選択，発注票作成の簡略化などにつながる。指定納入ものと他の一般書からの注文・選定のタイミング上の調整は行わない。理由は，一括購入が第一番の納品であることを前提としているからである。従って調整上の繁雑さはない。一方，図書館用の指定図書が同時に学部や教員研究用又は，個人用に選定された場合には，各々，注文票を作成し，内部調整を行っている。

2. "指定出版社による一括購入方式" 全体の見直し

次にシステム全体を見直してみると，考慮すべき点として ①選択した指定出版社は適当であったか，②このシステムの請負い業者は適当であったか一を検討すべきであろう。

a）選択した出版社は適当だったか

37社が期待通り上質の学術書を何点位刊行したか，出版社の入れかえ，増減は必要かなどが上げられる。この数年，著しい特徴は，各出版社とも企画・編集方針の変更，つまり主題範囲の拡大，一般化が目立つことである。点数について，例えば理想社は昭和59年新刊は0冊，理由は雑誌出版に全力をつくしたとのことであった。表4，5によると出版社毎の出版点数と最終的な収集点数との間にバラつきがある。

しかし，小規模のほぼ全面的に学術書の出版社ものは，図書館側にとっても収集しやすく，大視模で広範囲の主題・レベルの出版社のものは，図書館にとって学術書をさがし出すこと自身，労力を要する。それ故に業者側の協力を期待出来る部分とも言える。

b）和書購入における指定出版社図書の割合

表6　三田情報センター和書購入内訳

（昭和59年度）

		点数	冊数	金額
図書館	注文	3,364 (41%)	6,077	28,060,301
学部		1,542	2,795	16,868,918
図書館	見計	1,996 (25%)	2,202	10,102,195
学部		2,377	3,403	8,383,519
図書館	継続*	2,737 (34%)	3,289	14,746,095
学部		897	1,151	5,977,601
図書館	合計	8,097 (100%)	11,568	52,908,591
学部		4,816	7,349	31,230,038

* 継続図書とは2冊以上で時期がズレて刊行される図書をいい，選定の第一冊目は，注文・見計時により行われ以後引つづき継続注文図書となり，完結までの収集管理，支払いなど，完結するまで，別扱いとなる。

注　図書館予算　昭59年度　321,326,000円
　　学部予算　　〃　　287,975,000円

注　学部用見計いは，選書課和書見計いのほか，店頭，新刊カタログ，古書のとりよせなど"教員見計い"による。

次に，この指定出版社による同システムの受入図書が，当センター和書購入中どの様な位置にあるのかを件数，点数，金額について，学部図書と比較してみた。（表6）継続図書と見計いの合計4,733点中，指定によるものは37社で1,552点（33%）であり，全見計い1,996点中，指定ものは37社で約950点（48%）と推定される。指定分を除いた1,046点は，"これから出る本"からの選定約400点，その他一般の見計いが約600冊と推定される。なお，和書購入全体（注文・見計い・継続）8,097点中，指定図書（見計い・継続）1,552点は19%となる。

c）指定出版社数の増加を計るか

指定出版社の増加について，学部図書委員から，又，選書課として検討すべき20社ほどの出版社の候補が上がっている。（例えば日本経済新聞社，勁草書房，新評論社など）収集側としては，常に優良出版社を把握して検討にそなえておく必要がある。

現在，当センター全見計い点数の約1/2，全購入の約1/5の実績を上げた37の指定出版社数をさらに増加して比率を増すことも可能であろう。例えば極端な例として　①米国のアプルーヴァルシステム風に，学術書を出す大部分の出版社をカバーして80%以上にするか，②検討中のいくつかの出版社を加えるか，③周辺の動きを見て，変更なしとし39社を続けるか—現時点までに指定した39社は，国内出版点数10%以上をカバーし当センター全見計いの48%の効率であったが，今後の増加に同じ比率の期待は考えられない。②のこのシステムの請負業者が適切であったかについて健闘しているといえよう。しかし，今後は，出版社数の増加の検討と共に，いずれ訪ずれるであろう受入・選書業務に伴う変動を見越した上での慎重かつ積極的な判断が必要であろう。

Ⅶ　アプルーヴァル プラン（確定注文方式）・自動受入システムの将来

名古屋学院大学は，"指定出版社制度"採用の

初期の例として，昭和45～50年にわたる同制度の実施を行い，文献3）にまとめられた。その実施内容は，対象とした出版社の新刊カタログ情報収集，全図書館員分担による選定チェック，委員会による調整決定という方式で，一方的な図書館側の努力の積上げ方式であった。

一方，米国での見計い方式（On Approval System）の歴史は，ブランケット方式（一括購入，返品なし）から一歩進んだ“アプルーヴァル・プラン”による確定注文方式の時代に入っている。米国では，数年前まで6社の学術図書館専門の同プラン提供業者（出版社，取次店）があり新刊書の納品を一括して請負い，特定の条件を提示した契約によって納品し，チェック用に納品リスト，未納品リストの磁気テープサービスを行っている[4]。

当センターの“指定出版社による一括購入方式”は，出入りの納品業者を窓口にした出版流通業者（代理店，出版社）との共同方式で，あらかじめ定めた主題ほか図書館側の主体的条件により，業者が選択と供給の責任を負う方式である。出版と同時に納品され，条件外の図書の返品権利をもつ。この方式は，①専門の請負い業者ではない。②機械化はされていないが，基本方式は，部分的な“確定注文方式”のきめ細かい手づくりの一種類とも言えよう。近い将来，業者側もセンター側も機械化された自動受入システムとなるであろう。

米国では，前述6社の他にBALLOTS, OCLC, RLINなど全国書誌データ・ネットワークに加盟し，受入データを共有する。又は，出版社等の受入システムの自動化などと自館に合う方式の選択による多種類の自動受入システムがある。

さらに，米国では新着の文献5）によると，このプランの請負業者8社の実態調査を行っている。全米405の大学・研究図書館に出した詳細な9項目にわたる質問状の回答分析によって業者の評価を行うなど，このシステムは完全に一般化している。

Ⅷ 結　　論

結論として，このシステム導入の目的とした国内新刊学術書の網羅的収集，および業務量の省力化という点では，当初の目的を達成したといえよう。

このシステム導入の成功の主な原因は，①契約時の収集範囲（含，廃除するもの）の具体的な各出版社毎の限定が適切であったこと，②選定方法として見計いシステム全体の改善と調和したこと，③確定注文であるが，見計いの一部として第2次選定する運用上の扱いが適切であったことが上げられる。

従って，結果として“指定図書”を見計い棚に展示することによって，選定者側にも業者側にも新刊学術書の選定上の一定のガイドラインが常に示されていることになり，選定作業運用上の効果は評価すべきであろう。

このシステムを常により良い状態に保つためには，手づくり時代も機械化時代も，①納品率チェックシステムの確立，②一年毎の契約更新時にシステム全体の評価・改善を行うなどを実行することである。

あとがき

近い将来，三田情報センターにおいても，収集関連業務（業者の新刊出版情報の利用，注文重複チェック，発注手続き，昭和60年度中には，日本の学術情報最大規模の“文献情報センター・システム”への参加など）の機械化が行われようとしている。

なお，現在，国内でも，K社，M社など大手業者により和書自動受入システムが開発され，自動受入サービスの提供，納品打出しリストの登録台帳化，継続図書の見本管理なども含めて各々大学と接続して実験中である。

いずれにしても，最終的には，ライブラリーにとって，人間がその一冊を手にとって図書の内容を把握し，各々の図書館に入れるべきかどうかの価値判断が残るであろう限り，このシステムの有

効性は追求されるべきであろう。その意味では，われわれのこの2・3年のきめ細い“指定出版社による一括購入”の実績は，何らかの機械化を導入した場合にも，その利点・問題点を踏まえつつの基本的なノウハウとして，引継き選書業務に生かされていくであろう。

参 考 文 献

1) 森園繁：“図書の収集と目録サービス” KULIC 16, 1982, p. 27-30.
2) 石黒敦子：“指定出版社による一括購入方式のその後” KULIC 17, 1983, p. 41-43.
3) 高多亨：“資料収集をめぐる諸問題——指定出版社制定を中心として” 経済資料研究10, 1976, p. 1-21.
4) 丸谷治一：“大学図書館における「受入業務」の問題点と課題——アプルーヴァルプラン（自動受入システム）の採用へ向けて——大学図書館研究 26, 1985, p. 106-111.
5) Reidelbach, J. H. & Shirk, G. M.: “Selecting an approval plan vendor III: academic librarians' evaluations of eight United States approval plan vendors,” Library Acquisitions: practice & theory 9(3), 1985, pp. 177-260.

早稲田大学図書館との相互利用の開始

全学の蔵書数が250万冊を越える早稲田大学と本塾大学との間に図書館の相互利用に関する協定が成立し，昭和60年10月1日からその運用が始まった。相互利用の実現によって，両大学の関係者はこれまでよりもはるかに便利な形で，単純計算では500万冊近い蔵書の利用への道が拓かれたことになる。

従来，本塾大学関係者が早大の図書を利用する時は，情報センター所長が発行する紹介状を持参して相手先を訪問し，館内閲覧又は複写に限定されたサービスを受けるか，情報センターを通じて必要な文献の複写を取り寄せるかの二つに一つの方法しかなかった。今回の協定の成立によって，利用の便宜は次のように拡充される。

先ず教職員は早大図書館で利用者登録をし，特別入庫閲覧証の交付を受ければ，以後はこの券の呈示によって，入館，入庫，閲覧，館外貸出のサービスが受けられる。一方，大学院学生，学部学生は，早大図書館を直接訪問する時は従来通り紹介状の持参が必要だが，図書館を借受人とする機関間の館外貸出制度が新設されたので，これを利用すれば早大の図書を塾内の情報センターで閲覧することができる。教職員もむろんこの制度を利用できる。

複写サービスは両大学間に限って従来の学外料金の適用をやめ，ゼロックス1枚につき30円を共通料金とすることになった。本塾大学関係者に対しては，早大図書館の窓口で複写を依頼する時も，情報センターを通じて複写を取り寄せる時も，この料金が適用される。

図書や複写物の搬送の便を確保するため，本塾の塾内便を当面毎週水曜日に早大に乗り入れる。従って，必要文献の入手に要する時間は，直接訪問しない場合でも1週間以内と大幅に短縮される。図書の貸出申込みや複写物の取り寄せ依頼などの事務連絡にはファクシミリを活用するので，通信・連絡の迅速性，確実性は十分に保証される。

利用にあたって留意すべき点は，協定の対象範囲が早大図書館の管理する図書を中心としていることから，その枠外の図書を利用する時の手続きである。この場合は早大図書館が仲介するので，直接訪問する時は事前に確認をとるなどの注意が必要である。また，書庫の収容能力がパンクしているため，洋書や洋雑誌の多くが新図書館ができるまでの当分の間本庄分館に別置されている。これらの図書を利用する時も事前の手配が必要である。詳細は情報センターの窓口に問合せられたい。

利用面での便宜が保証され，定着すれば，次は高額・大量の研究文献の分担購入の実施といった協力関係に進むことも意図されている。

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1984.7～1985.7

〔三　田〕

勝島順子 "慶應義塾図書館新館見学記（昭和58年度秋期研究報告）" **つどい**（神奈川県学校図書館員研究会）No.79, p.1-2 (1984).

佐藤朔 "二つの大学図書館—若き'知'の集うセンター" **塾友** No.329, p.19-21 (1985).

白井厚 "慶應義塾大学の高橋誠一郎文庫について（図書館員のカルチャー・コーナー２）" **図書館雑誌** Vol.78, No.9, p.604-606 (1984).

遠山一行・中野博司 "遠山音楽文庫をめぐって（対談）" **三田評論** No.861, p.78-83 (1985).

"New buildings in Keio Univ.," **The Mita campus** Vol.40, No.3, p.1 (1985).

〔日　吉〕

特集　慶應義塾日吉図書館の開館　p.32-33参照.

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1984.7～1985.7

〔論文発表〕

〔三　田〕

市古健次 "ライブラリー・インストラクション—効果的な図書館利用のために" **塾監局紀要** No.11, p.72-76 (1984).

市古健次 "ライブラリー・インストラクション" **相互協力研究分科会報告** 創刊号 p.41-44 (1985).

広田とし子 "未来の図書館と図書館員（「図書館の未来像」を読んで　特集）" **現代の図書館** Vol.22, No.2, p.94-95 (1984).

松本和子 "慶應義塾大学三田情報センターにおける海外 ILL 実務について" **相互協力研究分科会報告** 創刊号 p.25-33 (1985).

長島敏樹 "JAPAN MARC と TRC MARC—比較検討と問題点の整理" **大学図書館研究** No.26, p.21-28 (1985).

中島紘一 "新図書館（三田）の利用状況" **塾監局紀要** No.12, p.24-30 (1985).

大江晃 "図書館利用の自己規制" **塾** No.130, p.1 (1985).

斎藤泰則 "KULIC" **塾監局紀要** No.11, p.74 (1984).

斎藤泰則 "共引用分析を用いた図書館・情報学分野における専門領域の同定" **Library and information science**, Vol.22, p.65-85(1984).

渋川雅俊 "出版流通機構の動向" **公共図書館—その周辺（II）** 国立社会教育研修所 p.31-51 (1984).

渋川雅俊 "図書館業務" **私立大学職員入門** 日本

私立大学連盟編　第一法規　p.272-285 (1985).
渋川雅俊 "図書館と出版流通" **図書館年鑑1985** 日本図書館協会　p.120-122 (1985).
白石克 "江戸時代の相州 '江之島絵図 (刊行図)' **斯道文庫論集**　No.21, p.297-349 (1985).
渡部満彦 "マークにはどんな種類があるか" **マークをうまく使うには**—機械可読目録入門 黒沢正彦・西村徹編　三洋出版貿易　p.25-38 (1985).
渡部満彦 "マークの意義" ibid, p.229-246.
安田博 "北米のネットワーク・システム—RLINを中心として" **私立大学図書館協会会報**　No. 82, p.35-40 (1984).
利用案内検討会　**スライドのアンケート集計結果と61年度オリエンテーション実施計画** (内部資料) (1985).
Watanabe, Mitsuhiko "Computer systems in health science libraries of Japan" **Medical libraries—one world** : resources, cooperation, services : 5th International Congress on Medical Librarianship : Procedings 1 p.782-787 (1685).

〔医　学〕
天野善雄・加藤孝明(他) "医学図書館員の世界—国際活動, 国内活動, 展望 (座談会)　**ライブラリアンズフォーラム**　Vol.2, No.1, p.2—18 (1985).
天野善雄 "日中医学情報協力の胎動" **医学図書館** Vol.32, No.2, p.177—183 (1985).
天野善雄 "わが国の医学情報分野の貿易赤字をどうするか" **Information flash**　No.4, p.2-5 (1984).
後藤敬治 "1985年度MEDLINE ファイル" **医学図書館**　Vol.32, No.1, p.37-46 (1985).
加藤孝明 "看護学の索引 (1)" **きたさとニュース**　No. 86 (1985).
加藤孝明 "看護学の索引 (2)" **きたさとニュース**　No. 87 (1985).
加藤孝明 "職場の紹介　医学情報センター (北里記念医学図書館)" **KEIO 病院ニュース**　No. 32, p.6-7 (1984).
加藤孝明 "図書館員の保守主義と未来 (「図書館の未来像」を読んで　特集)" **現代の図書館** Vol.22, No.2, p.83-86 (1984).
松井朗 "医学分野の Directory—図書館の蔵書の中から" **きたさとニュース**　No. 84, p. 1-3 (1984).
大澤充 "第1回医学薬学図書館講習会" **医学図書館**　Vol.32, No.1, p.102-103 (1985).
Amano, Yoshio "International cooperation in biomedical information service in Japan" **Medical libraries—one world** : resources, cooperation, services : 5th International Congress on Medical Librarianship : Proceedings 1 p.37-42 (1985).
Goto, Keiji "The development of medical terminology in Japan" ibid, p.236-238.
Matsui, Akira・Kato, Komei・Miyazaki, Sadaharu "Document delivery capability for medical grey literature in Japan—a case studies" ibid, p.412-416.

〔日　吉〕
風間茂彦 "選書とは—図書選択論小史" **塾監局紀要**　No.11, p.68-71 (1984).
風間茂彦 "図書館資料の受入れ—プランニングから集中整理まで (S.フォード著　丸谷洽一　高木由美子訳　書評)" **丸善ライブラリーニュース**　No.129, p.11 (1984).
Ogawa, H. et al., "The relationships among the citation measures and the factors influence on them". **Information services and use** Vol.4, No.6, p.417-424 (1984).

〔理工学〕
斎藤憲一郎・滝口久美子・上原順子・笹島早月・吉川智江・佐藤健司 "マイクロコンピュータによる KWIC 索引の作成" **第21回情報科学技術研究集会発表論文集**　p.177-183 (1985).
斎藤憲一郎・佐藤健司 "マイクロコンピュータによる KWIC 辞書の作成" ibid, p.51-54.

斎藤憲一郎・富沢英治・宮崎俊明“重要文書の長期保管に関する調査・研究”**塾監局紀要** No. 12, p. 72-77 (1985).

Saito, Kenichiro “Synoptic journal” **Medical libraries—one world** : resources, cooperation, services : 5 th International Congress on Medical Librarianship : Proceedings 1 p. 610-616 (1985).

〔研究発表〕

〔三　田〕

安西郁夫“大学図書館の協力活動”昭和59年度大学図書館職員長期研修 1984.7.30 於 図書館情報大学.

渋川雅俊“21世紀に向かう私立大学図書館（パネルディスカッション　司会）”第46回私立大学図書館協会総大会研究会 1985.7.26 於 上智大学.

山口佳世子・広田とし子“逐次刊行物のレファレンスワークについて”私立大学図書館協会東地区部会逐次刊行物研究分科会 1984.12.21 於 日本女子大学.

渡部満彦“21世紀の図書館像”第45回私立大学図書館協会総大会研究会 1984.7.20 於 創価大学.

〔理工学〕

斎藤憲一郎・佐藤健司“マイクロコンピュータによる KWIC 辞書の作成”第21回情報科学技術研究集会 1984.10.23～24 於 全共連ビル.

“キャクストンとアーサー王伝説”展

英国最初の印刷業者ウィリアム・キャクストンが英文学史上の名作マロリーの「アーサーの死」を出版してから，本年は500年目にあたる。慶應義塾図書館はこれを記念し丸善と共催して，「“キャクストンとアーサー王伝説”展」を7月15日から23日まで丸善日本橋店で開催した。またこれに先立って，高宮利行文学部教授による「キャクストンと アーサー王伝説」と題する講演会が6月29日に慶應義塾図書館で行なわれた。

展示会では，キャクストンの印刷物のオリジナル数点をはじめとしてマロリーの諸版や多くの関係資料が原典で展示された。

1450年頃の活字印刷術の発明は，それまでの写本による書物の生産を一変し，安価で大量な書物の生産を可能にした。

マロリーの「アーサーの死」はキャクストンによる出版を通して多くの人々に読みつがれ，文人，画家を始めとする芸術家に大きな影響を与えた。

資料 III

年次統計要覧 <昭和59年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <59年度実績及び60年度予算>

内訳 / 支部センター	59年度実績 <単位：円>			60年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	589,067,000	2,068,900	591,135,900	614,708	2,130	616,838
図書館	316,226,000	2,068,900	318,294,900	332,866	2,130	334,996
学部*	272,841,000	—	272,841,000	281,842	—	281,842
(私大研究設備相当額)	(20,234,000)	—	**	(20,638)	—	**
日吉情報センター	130,744,802	1,958,530	132,703,332	135,316	2,017	137,333
図書館	48,300,655	1,958,530	50,259,185	49,990	2,017	52,007
学部*	82,444,147	—	82,444,147	85,326	—	85,326
(私大研究設備相当額)	(9,576,750)	—	**	(7,004)	—	**
医学情報センター	127,590,490	2,341,470	129,931,960	132,174	2,461	134,635
〃	127,090,490	2,341,470	129,431,960	132,174	2,461	134,635
指定寄付金	500,000	—	500,000	—	—	—
理工学情報センター	112,861,817	1,365,890	114,227,707	117,373	1,406	118,779
〃	112,861,817	1,365,890	114,227,707	117,373	1,406	118,779
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**	(1,300)	—	**
合計	960,264,109	7,734,790	967,998,899	999,571	8,014	1,007,585

注) * 特別図書費は含まず。

** (　) 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したもの。

Ⅱ—1 蔵 書 統 計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター＼内訳		単行本 和	単行本 洋	単行本 計	製本雑誌 和	製本雑誌 洋	製本雑誌 計	合計
年間受入冊数	三田情報センター	18,904	28,351	47,255	7,535	9,273	16,808	64,063
	図書館	(11,511)	(12,751)	(24,262)	(3,819)	(2,661)	(6,480)	(30,742)
	学部	(7,393)	(15,600)	(22,993)	(3,716)	(6,612)	(10,328)	(33,321)
	日吉情報センター	14,205	6,097	20,302	2,728	3,278	6,006	26,308
	図書館	(11,671)	(1,043)	(12,714)	(812)	(25)	(837)	(13,551)
	学部	(2,534)	(5,054)	(7,588)	(1,916)	(3,253)	(5,169)	(12,757)
	医学情報センター	1,804	1,513	3,317	1,378	2,908	4,286	7,603
	理工学情報センター	1,462	1,319	2,781	1,407	3,318	4,725	7,506
合計		36,375	37,280	73,655	13,048	18,777	31,825	105,480
所蔵冊数(累計)	三田情報センター	546,639	519,131	1,065,770	133,747	119,324	253,071	1,318,841
	図書館	(400,914)	(297,871)	(698,785)	(82,470)	(48,712)	(131,182)	(829,967)
	学部	(145,725)	(221,260)	(366,985)	(51,277)	(70,612)	(121,889)	(488,874)
	日吉情報センター	197,985	98,578	296,563	20,551	28,076	48,627	345,190
	図書館	(141,129)	(16,058)	(157,187)	(13,308)	(313)	(13,621)	(170,808)
	学部	(56,856)	(82,520)	(139,376)	(7,243)	(27,763)	(35,006)	(174,382)
	医学情報センター	25,736	27,902	53,638	40,013	77,827	117,840	171,478
	理工学情報センター	30,944	20,803	51,747	30,510	82,497	113,007	164,754
合計		801,304	666,414	1,467,718	224,821	307,724	532,545	2,000,263

注1） 所蔵冊数（累計）は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。
2） 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ—2 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 / 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	4,922	3,210	8,132	4,886	2,230	7,116	15,248
図書館	(1,896)	(849)	(2,745)	(2,996)	(1,219)	(4,215)	(6,960)
学部	(3,026)	(2,361)	(5,387)	(1,890)	(1,011)	(2,901)	(8,288)
日吉情報センター	741	568	1,309	338	641	979	2,288
図書館	(491)	(32)	(523)	(131)	(3)	(134)	(657)
学部	(250)	(536)	(786)	(207)	(638)	(845)	(1,631)
医学情報センター	1,207	1,567	2,774	707	1,075	1,782	4,556
理工学情報センター	932	1,287	2,219	2,597	4,763	7,360	9,579
合計	7,802	6,632	14,434	8,528	8,709	17,237	31,671

Ⅲ—1 利 用 統 計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 / 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比
	教職員	学生	計	一般図書	貴重書	館外貸出(計)
三田情報センター	11,829	125,530	137,359	*	1,460	1.06
日吉情報センター	4,074	62,555	66,629	*	—	1.01
医学情報センター	39,194	18,469	57,663	*	—	1.15
理工学情報センター	—	—	42,169	*	—	1.23
合計	—	—	303,820	*	1,460	1.09

* 開架のため実数不明

Ⅲ—2 利 用 統 計 <相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 / 支部センター	依頼をうけた（貸）			依頼した（借）			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	1,673	4	1,677	861	359	1,220	2,897
日吉情報センター	152	0	152	75	37	112	264
医学情報センター	9,155	53	9,208	2,516	98	2,614	11,822
理工学情報センター	31,212	0	31,212	1,369	43	1,412	32,624
合計	42,192	57	42,249	4,821	537	5,358	47,607

Ⅲ—3 利 用 統 計 <複写サービス>

内訳 / 支部センター	種別	学内 件数	学内 枚数	学外 件数	学外 枚数	合計 件数	合計 枚数
三田情報センター	MF	13	6,476	26	2,602	39	9,078
	ゼロックス	9,246	209,432	2,062	46,580	11,308	256,012
	オフセット	94	162,187	—	—	94	162,187
	PPC	—	—	—	—	—	1,391,505
	OHP	12	99	—	—	12	99
	ファクシミリ	122	426	—	—	122	426
日吉情報センター	ゼロックス	3,031	17,254	190	2,592	3,221	19,846
	PPC	—	154,149	—	—	—	154,149
医学情報センター	MF	1,546	6,957	—	—	1,546	6,957
	ゼロックス	53,574	370,075	120,674	673,653	174,248	1,043,728
理工学情報センター	MF	28	1,177	—	—	28	1,177
	ゼロックス	20,364	254,329	31,212	317,830	51,576	572,159
	OHP	269	1,688	—	—	269	1,688

注） ＰＰＣはコイン方式のため内訳は不明。

Ⅲ—4 利 用 統 計 <レファレンス・サービス>

利 用 者 別

内訳 / 支部センター	学内者 教職員	学内者 学生	学外者	合計
三田情報センター	1,559	7,764	3,959	13,282
日吉情報センター	478	2,890	64	3,432
医学情報センター	2,492	431	1,780	4,703
理工学情報センター	510	1,963	1,965	4,168
合計	5,039	13,048	7,768	25,585

業 務 内 容 別

内訳 / 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田情報センター	6,061	593	6,577	51	13,282
日吉情報センター	942	199	2,277	14	3,432
医学情報センター	948	338	711	2,706	4,703
理工学情報センター	1,811	427	1,773	157	4,168
合計	9,762	1,557	11,338	2,928	25,585

「日吉キャンパスにふさわしい図書館を」ということが，日吉地区教員・塾生・塾当局の久しい願いでした。その念願が叶い，いよいよ新しい図書館が建設されました。三田の図書館とは趣を異にする立派な図書館となって開館しました。日吉地区教職員の方々に数々の協力をいただきましたが，建設計画の原動力は衛藤所長のリーダーシップと日吉情報センター職員の一致協力にあったといってよいでしょう。今後の発展を祈念します。本号は，その意味で創立125年記念慶應義塾大学日吉図書館を特集し，建設経過と今後の方針・計画をまとめました。

特集したものの他に，中野教授の遠山音楽文庫への期待，浜田助教授の統計データベースの展開は，義塾図書館の今後を展望する上で特に注目すべきでありましょう。その他にもこの号は，義塾の最近の図書館活動を報告している幾つかの小論文を収録しました。

本年4月から定年で退かれた嶋井和世教授の後任として横山哲朗医学部教授が医学情報センター所長に就任されましたが，その所信を掲載しました。また，この10月から大江研究・教育情報センター所長の文学部長に就任されたことに伴ない，速水融経済学部教授が新所長に着任されましたが，その所信は次号に掲載の予定です。

（10月21日　渋川記）

編集委員＊情報センター本部　渋川雅俊＊三田情報センター　斎藤泰則　川瀬宏美＊日吉情報センター
木藤るい＊医学情報センター　山中みどり＊理工学情報センター　遠藤久美子

三田情報センター刊行物の案内

慶應義塾図書館蔵　魚菜文庫（旧称石泰文庫）目録　昭和60年3月

文献シリーズ

No. 11　経済学関係記念論文集記事索引　単行本の部（個人編）　昭和43年12月現在　昭和46年3月

No. 12　慶應義塾図書館所蔵　江戸期地誌紀行類目録稿　含・寺社略縁起類　昭和47年3月

No. 13　Catalogue of foreign language dictionaries　Part 1　Asia and Africa　外国語辞書目録　アジア・アフリカ語篇　昭和48年3月

No. 14　慶應義塾図書館所蔵　寺社略縁起類解題　昭和56年1月